

## 「一輪の綿花から始まる倉敷物語」 調査研究事業報告書



2019 年 3 月 25 日

「一輪の綿花から始まる倉敷物語」 近代化遺産研究会

## 序

「一輪の綿花から始まる倉敷物語」近代化遺産研究会が行なった 2018 年度日本遺産研究の調査・研究内容を報告します。内容は、産業考古学会会員 5 名と倉敷市立短期大学服飾美術学科と専攻科服飾美術専攻の学生 4 名による 7 題目です。そのうちの「下村紡績所及び玉島紡績所の産業遺産」では渋沢史料館が所蔵さなる貴重な史料の掲載をご承諾いただきました。この場をお借りして、渋沢史料館と永井美穂学芸員にここからお礼申し上げます。

調査・研究を通して、児島地区の繊維産業、郷内の撚糸業、郷内の倉敷帆布、玉島紡績所、紡績工場や機械をはじめとする産業遺産、産業システム、繊維以外の産業遺産など、「一輪の綿花から始まる倉敷物語」のさらなる調査・研究が必要であることを認識しました。日本遺産研究が市民の方々への啓蒙につながり、研究内容をまちづくりに活かしていただけたら幸いです。

2018 年 3 月 25 日

産業考古学会理事  
岡山近代化遺産研究会代表  
「一輪の綿花から始まる倉敷物語」近代化遺産研究会代表  
小西伸彦



# 「一輪の綿花から始まる倉敷物語」調査研究事業報告書

## 目次

|                                                |                                                        |
|------------------------------------------------|--------------------------------------------------------|
| 岡山紡績所の誕生まで                                     | 岡山近代化遺産研究会事務局・・・ 1                                     |
| 下村紡績所及び玉島紡績所の産業遺産                              | 玉川寛治・・・・・・・・・・・・・・ 5                                   |
| 企業の生産システムが都市を形づける<br>倉敷紡績・経営者大原孫三郎と倉敷          | 清水憲一・・・・・・・・・・・・・・ 16                                  |
| 倉敷の帆布                                          | 天野武弘・・・・・・・・・・・・・・ 21                                  |
| 倉敷市児島地区における繊維産業発展の概要                           | 唐澤克樹・・・・・・・・・・・・・・ 34                                  |
| 倉敷市立短期大学服飾美術学科<br>・専攻科服飾美術専攻<br>学生による繊維製品の調査研究 | 唐澤克樹・・・・・・・・・・・・・・ 40<br>井上実子<br>渡部菜々子<br>雑賀優衣<br>木之下樹 |
| 倉敷市街地の日本遺産構成文化財と近代建築                           | 小西伸彦・・・・・・・・・・・・・・ 48                                  |

岡山紡績所の誕生まで

岡山近代化遺産研究会事務局

はじめに

産業考古学会は 2018(平成 30)年、倉敷市教育委員会文化財保護課と日本遺産推進室から、日本遺産研究のお話をいただき、産業考古学会の関連研究組織である岡山近代化遺産研究会の中に「一輪の綿花から始まる倉敷物語」近代化遺産研究会を置いた。2018 年度は「十基紡」として誕生した下村紡績所、倉敷紡績二代目社長・大原孫三郎が描いた産業システム、郷内に拠点を置く 3 社で国内生産 70%を担う帆布産業、倉敷紡績の企業城下町・倉敷で大原孫三郎・総一郎父子が建てた近代建築、倉敷市立短期大学の教師と学生による共同研究、以上 5 題を報告する。「十基紡」については玉川寛治氏の「下村紡績所及び玉島紡績所の産業遺産」にお任せし、ここでは、児島紡績所と玉島紡績所に先駆け、士族授産事業として岡山市で創業した岡山紡績所までの概要を述べる。

吉備の穴海干拓まで

倉敷を含む岡山県南はかつて「吉備の穴海」と呼ばれる浅瀬の海であった。穴海には現在の児島半島や玉島、連島、早島、笠井山などの島々が浮かび、岡山県の三大河川・吉井川、旭川、高梁川が流れ込んでいた。ところが、三大河川上流部の地質は中生代白亜紀の花崗岩や安山岩、中流部の地質も中生代白亜紀の花崗岩や流紋岩を主体とするものであった<sup>1</sup>。その多くを占める花崗岩には雨水が染み込みにくく、風化によって真

砂を生みやすいという特徴があるため、真砂は降雨により下流域から吉備の穴海に運ばれ、そこに堆積した。吉備の穴海は次第に広大な干潟となっていたため、沿岸では中世以降、小規模な干拓事業が営まれるようになった。

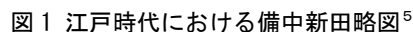
また、中国山地は弥生時代以降、国内生産の 60%から 70%を占める砂鉄の産地であった<sup>2</sup>。ところが花崗岩に含まれる砂鉄の割合は 0.15%から 0.3%に過ぎなかったため、砂鉄を採取により生じた残土もまた三大河川を降り、下流域から吉備穴海に堆積した<sup>3</sup>。江戸時代末期にピークを迎え、明治時代までつづいた鉄穴流しと鑪製鉄によって吐き出された大量の土砂は三大河川下流域における洪水被害の元凶ともなったのである。

岡山県南における干拓事業

戦国時代が終焉を告げ、江戸時代を迎えると、領主らは戦闘から内治へと政策を転換し、農耕地の拡大を目指した。岡山藩士・池田家も吉備の穴海を干拓する新田開発に熱心であった。初代藩士・池田光政が津田永忠を起用して開墾させた倉田新田、沖新田、幸島新田はその代表である。

16 世紀末から幕末にかけて、備中では約 6,350 町歩の新田開発が行われたが、その約 5,600 町歩が高梁川の東西分流によって生まれた扇形状の干潟を干拓したものである。酒津を基点とすると、東は茶屋町、南は連島、西は玉島を結ぶ半径約 10km で、残り約 750 町歩は寄島と笠岡付近である。年代別では、宇喜多家による 16 世紀末の 986 町歩、最盛期となる 17 世紀の 4,340 町歩、停滞期である 18 世紀の 425 町歩、19 世紀の 600 町歩である〔図 1〕<sup>4</sup>。ところが、海を埋め立

と表現しても過言ではない。蘭<sup>いんぎょう</sup>筵業からは英米輸出の主要品目となり、日本の特許制度導入を早めたことで知られる、磯崎眠<sup>いそぎみんき</sup>亀による錦<sup>きん</sup>莞<sup>かん</sup>筵<sup>えん</sup>が生み出された。



背景には主に四つの要因があった。(1) 干拓事業で耕地となった妹尾、早島、藤戸、玉島が綿作地帯となった。最盛期の興除新田における綿栽培面積は44%であった。(2) 織物業が盛んになった彦崎村・宇野津村間から南の街道沿いまでの地域には、新綿作地帯からの綿供給が容易であった。(3) 綿作地帯と機業地を結ぶ交通路となった藤戸、天城、八浜、下津井などが綿、肥料、綿織物の商業地になった。(4) 金比羅往来琴平・丸亀・下津井・瑜伽間が織物商品の販路拡大に機能した(図2)。

江戸時代中期以降、児島が機業になった



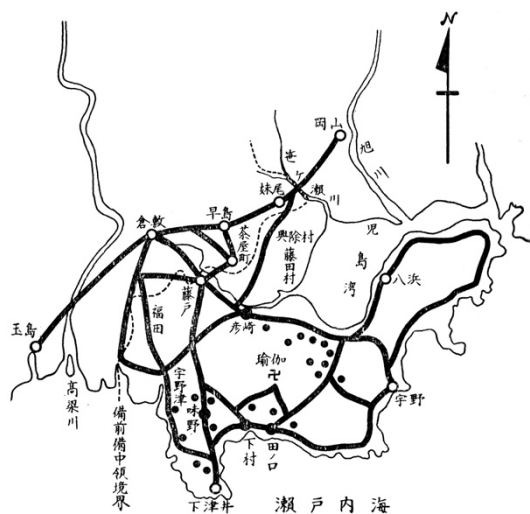


図2 児島地方の図<sup>7</sup>

●は、幕末頃小倉織を大量に生産していた村(24箇所)

児島に<sup>たかばた</sup>高機が入り、織物生産が始まったのは寛政年間(1789年～1801年)であった。農民階層の急激な変化により、1村の約90%の農家が土地を持たず、たとえ土地を所有していたとしても、面積が5反以下という零細農家ばかりであった当時、機業は農家の貴重な副業、あるいは本業になったのである。その経営形態は、自ら高機を所有する家内工業、織元から高機を借りて生産する問屋制家内工業、作業場を確保して多く労働者を雇用する工場制手工業(マニユファクチャー)であった。文政年間(1818年～1830年)・天保年間(1830年～1844年)の高機は300基を数え、問屋制家内工業と工場制手工業が大きく発展した<sup>8</sup>。

#### 岡山紡績所の創業

1871(明治4)年の廃藩置県、1873年の徴兵令発令により、藩家臣団はその存在理由と共に、それまでの世襲的特権を失った。江戸時代のように、家禄を支給する経済的

余裕のなかった政府は、数次にわたる秩禄処分、1876年の金禄公債証書条例公布の後、家禄を廃止した。岡山県では岡山藩など13藩の士族5,175戸2万265人、卒族5,132戸1万4,583人、軽卒174戸319人の計1万481戸3万5,167人がおよそ300万円の証書を受け取った。しかし、一部の上級士族を除き、ほとんどの士族が日々の生活のために証書を手放し、内職や雑業でやっと糊口をしのいでいた。旧士族救済に向けた士族授産事業の実現が急務であった<sup>9</sup>。

旧岡山藩士族らは陶器を製造する天瀬陶器製造所、マッチ製造、製紙、日雇請負塵芥取除の有恒社、金融、機織、醸醬を営む篤好社などを興した。1878年頃からは、旧岡山藩士・<sup>はなぶさまさつら</sup>花房端連、<sup>しんじょうあつのぶ</sup>新庄厚信、<sup>かわはらのぶよし</sup>杉山岩三郎、<sup>むらかみちようぎ</sup>河原信可、村上長毅と第二十二国立銀行などが紡績工場の開設を計画した。旧岡山藩主・池田家から2万円を借り受け、資本金4万円で2,000錘ミュール精紡機をイギリスから買い入れ、川崎造船所に20馬力蒸気機関を発注した。1881年7月、岡山市花畑で岡山紡績所の開所式を行い、1882年、操業を開始した。1880年6月には旧岡山藩士約720人が設立した有終社に経営を譲り、岡山紡績会社とした。岡山紡績所は岡山県における機械式綿紡の第一号である。

#### おわりに

日本の機械式綿紡は、島津藩によって1867(慶応3)年に操業を開始した鹿児島紡績所をして嚆矢とする。1870(明治3)年、島津藩が開設した堺紡績所は1872年、大蔵省買い上げとなり官営模範工場となった。1873年、江戸の商人・鹿島萬兵衛が東京府王子滝野川村(現在の東京都北区)に鹿島紡

績所を開設した。鹿児島紡績所、堺紡績所、鹿島紡績所は「始祖三紡績」と呼ばれる<sup>10</sup>。

政府は開港以来、全輸入高の3分の1を占めるようになった綿花、綿織物に着目し、国産綿の増産と、国産綿を原料とする紡績所の設置を具体化させた。まず、綿生産地である愛知県額田郡大平村に愛知紡績所、広島県安芸郡上瀬野村に広島紡績所、二つの官営模範紡績所を建設した。つづいて打ち出したのが、官営模範紡績所と同規模の

紡績所を国内10箇所に開設するため、政府が精紡機を買い入れ、民間に無利子10年賦で払い下げる「十基紡績所」計画であった。

「十基紡」である。そこに手を挙げたのが児島の<sup>こんだいぼうあいじ</sup>渾大防<sup>あいじ</sup>・益三郎兄弟と、玉島の難波二郎三郎であった。渾大防の下村紡績所と、難波の玉島紡績所(図3)は共に1881年創立、1882年に操業を開始した。児島と玉島の町に機械式綿紡の稼働音が響くようになった。



図3 玉島紡績所<sup>11</sup>

#### 注・引用

<sup>1</sup> 木下卓也、松田敏彦「岡山県の主要3河川の水質と地質の関係」(OKAYAMA University Earth Science Reports vol. 8, No. 1, 29-38, 2001)、31頁。

「地形と地質」(『高梁川水系河川整備計画』、国土交通省中国地方整備局、2010年)、4頁。

<sup>2</sup> 「鉄山業のあらまし」(岡山県史実編纂委員会編『岡山県史』第7巻近世Ⅱ、岡山県、1986年)、374頁。

<sup>3</sup> 「激しい土砂の堆積」(倉敷市史研究会編『新修倉敷市史』第5巻近代(上)倉敷市、2002年)、681頁。

<sup>4</sup> 「備中の新田開発」(岡山県編『岡山県の歴史』、岡山県、1962年)、362頁。

<sup>5</sup> 「江戸時代における備中新田略図」、同364頁。

<sup>6</sup> 「副業としての手工業の広範な展開」、同392頁。

<sup>7</sup> 「児島地方の図」、同397頁。

<sup>8</sup> 「近代工業の芽生え」、同365～398頁。

<sup>9</sup> 「士族授産事業」前掲『新修倉敷市史』

第5巻、200頁。

<sup>10</sup> 玉川寛治「幕末・明治期の輸入綿紡績機械関係の産業遺物」(前田清志、玉川寛治編『日本の産業遺産』Ⅱ、玉川大学出版部、2010年)、338～340頁。

<sup>11</sup> 高瀬安太郎「中備之魁」(『絵で見る明治商工便覧』第8巻、ゆまに書房、1987)、48～49頁。

#### 主な参考文献

OKAYAMA University Earth Science Reports vol. 8, No. 1, 29-38, 2001

『絵で見る明治商工便覧』第8巻、ゆまに書房、1987

岡山県編『岡山県の歴史』、岡山県、1962年

倉敷市史研究会編『新修倉敷市史』第5巻近代(上)倉敷市、2002年

『高梁川水系河川整備計画』、国土交通省中国地方整備局、2010年

前田清志、玉川寛治編『日本の産業遺産』Ⅱ、玉川大学出版部、2010年

下村紡績所及び玉島紡績所の産業遺産

玉川寛治(産業考古学会顧問)

はじめに

現在の倉敷市(倉敷・児島・玉島の旧 3 市は地域発展のため 1967(昭和 42)年 2 月 1 日大合)の発展にとって、倉敷紡績会社、下村紡績所及び玉島紡績所の綿紡績工場が果たした役割の大きさは、万人が認めるところであろう。

1888(明治 21)年創業の倉敷紡績株式会社倉敷工場は、1973 年、旧工場をホテルやレストラン、多目的ホールなどに、原綿倉庫を倉敷紡績の企業博物館である倉紡記念館として、保存・利用され、倉敷アイビースクエアは倉敷市における観光施設として活用されている。これらは 2007 年、綿産業関連遺産として経済産業省により「近代化産業遺産群 33」のなかの『東洋のマンチェスター』大阪と西日本各地における綿産業発展の歩みを物語る近代化産業遺産群の中の一つとして「倉敷市の綿産業関連遺産 倉敷アイビースクエア(旧倉敷紡績所)－倉紡記念館(旧倉敷紡績所原綿倉庫)－倉紡記念館所蔵物 写真・模型・文書・絵画等の展示 児島虎次郎記念館(旧倉敷紡績所製品倉庫)が選定され、登録されている。また、原綿倉庫と製品倉庫は登録有形文化財である。

一方、下村紡績所は 1990 年、玉島紡績所は 2008 年に工場建物はすべて解体され、

更地となった。児島・玉島の産業の発展に果たした両紡績工場の大きな役割を、長く記憶に留めるよすがとしての産業遺産の調査を行った。その結果を報告する。

## 1. 日本綿糸紡績業の創始期について

鹿児島紡績所から堺紡績所及び鹿島紡績所のいわゆる始祖三紡績、官営愛知紡績所、広島紡績所に始まる二千錘紡績所及び、大阪紡績会社の創立の時代を、日本綿糸紡績業の創始期と呼ぶことにする。

明治政府は、綿糸および綿織物の輸入防遏を目的として、財政援助によって機械制紡績業の創出を図ろうとした。1878 年 1 月内務卿大久保利通は

印度地方ノ如キ初メ英ヨリ輸入スル綿糸ヲ仰キテ自国ノ用ニ供スルモ其徒費ニ堪ヘス遂ニ紡績ノ業ヲ起シ今ヤ盛大ニ至リ自国ハ勿論他邦ニ輸出スル甚タ多ク製品ニ三分ノ税ヲ払フモ許多ノ益アリ英国遂ニ競フ能ハサルニ至ルト」し、インドの経験をモデルにして機械制綿紡績業の創設を企図した。そのためには、如何セン人民自奮ノ氣象ニ乏シク其私設ニ係ノレモノ僅々一二ノ小工場ニ過キス曩ニ泉州堺ニ設置セル紡績機ノ如キ数年ノ試験近來漸ク目的ヲ達スルノ端緒ヲ開キ衆庶始メテ其有益ヲ弁知シ先般伺ノ如ク払下ノ手順ニ至リ稍有志自奮ノ勢アリ猶一層ノ気力ヲ啓発スヘキ時期ナリト雖一時大金

ヲ要スル工場建築ヲ始メ機械購求ノ  
事ニ至テハ亦容易ノ事ニ無之時勢已  
ヲ得サレハ官先之ヲ創設シ行々有志  
ノ者ニ下付スルノ 目的ヲ以テ<sup>(1)</sup>

まず、2,000 鍾規模の工場を 2 箇所、官  
営紡績所として創設することを建議した。  
こうして実現したのが愛知紡績所と広島  
紡績所である。しかし、広島紡績所は開業  
の直前に民間に払い下げられたために、  
模範工場として機能したのは愛知紡績所  
のみであった。政府は、起業資金を民間に  
貸付けて官営紡績所と同じ規模の紡績所  
をさらに 10 箇所創設した。これが、いわ  
ゆる「十基紡」と呼ばれているものである。  
官営紡績所と十基紡の外にも、政府等の

資金援助によったものがある。これらの  
紡績所は何れも、基本的には堺紡績所の  
紡績機械設備をモデルにしたもので、「二  
千鍾紡績」と呼ぶことにする。二千鍾紡績  
が全面的に開業する以前に、民間資金の  
出資によって、当時にあつては 10,500 鍾  
という最大規模の大阪紡績会社がつくら  
れた。明治維新前後に鹿児島紡績所、堺紡  
績所および鹿島紡績所のいわゆる「始祖  
三紡績」が開業している。始祖三紡績、二  
千鍾紡績、および大阪紡績会社が日本綿  
糸紡績業の創始期の紡績工場のすべてで  
ある。創始期の紡績工場の精紡機と原動  
機を一覧表にして以下に示す。

| 紡績所(会社) |        | 保護方法 | 開業年次 | 鍾数    | 精紡機械種：台数       | 原動機  |
|---------|--------|------|------|-------|----------------|------|
| 始祖三紡績   | 鹿児島紡績所 | 藩営   | 1867 | 3,648 | ミュール 3、スロットル 5 | 蒸気機関 |
|         | 堺紡績所   | 藩営   | 1870 | 2,000 | ミュール 4         | 蒸気機関 |
|         | 鹿島紡績所  | 私立   | 1872 | 576   | リング 4          | 水車   |
| 二千鍾紡績   | 愛知紡績所  | 官営   | 1881 | 2,000 | ミュール 4         | 水車   |
|         | 広島紡績所  | 官営   | 1882 | 2,000 | ミュール 4         | 水車   |
|         | 広島紡績会社 | 県保護  | 1883 | 3,000 | ミュール 6         | 水車   |
|         | 下村紡績所  | 払下   | 1882 | 2,000 | ミュール 4         | 蒸気機関 |
|         | 玉島紡績所  | 払下   | 1882 | 4,000 | ミュール 8         | 蒸気機関 |
|         | 三重紡績所  | 払下   | 1882 | 2,000 | ミュール 4         | 水車   |
|         | 市川紡績所  | 払下   | 1882 | 2,000 | ミュール 4         | 水車   |
|         | 瀧本村紡績所 | 払下   | 1883 | 2,000 | ミュール 4         | 水車   |
|         | 長崎紡績所  | 払下   | 1884 | 2,000 | ミュール 4         | 蒸気機関 |
|         | 島田紡績所  | 払下   | 1884 | 2,000 | ミュール 4         | 水車   |
|         | 遠州紡績所  | 払下   | 1884 | 2,000 | ミュール 4         | 水車   |
|         | 下野紡績所  | 払下   | 1885 | 2,000 | ミュール 4         | 水車   |
|         | 佐賀物産会社 | 払下   |      | 2,000 | ミュール 4         |      |
|         | 桑原村紡績所 | 立替払  | 1882 | 2,000 | ミュール 4         | 水車   |

|        |         |     |      |        |         |      |
|--------|---------|-----|------|--------|---------|------|
|        | 宮城紡績所   | 立替払 | 1882 | 2,000  | ミュール 4  | 水車   |
|        | 名古屋紡績所  | 立替払 | 1885 | 2,000  | ミュール 4  | 蒸気機関 |
|        | 姫路綿糸製造所 | 県営  | 1880 | 2,000  | ミュール 4  | 水車   |
|        | 岡山紡績所   | 藩保護 | 1881 | 2,000  | ミュール 4  | 蒸気機関 |
|        | 渋谷紡績所   | 私立  | 1880 | 2,000  | ミュール 4  | 蒸気機関 |
| 大阪紡績会社 |         | 私立  | 1883 | 10,500 | ミュール 15 | 蒸気機関 |

注 1) 主として絹川太一『本邦綿糸紡績史』第 1～3 巻による。

注 2) 設備は創業当時のものである。渋谷紡の詳細は不明。

注 3) 広島紡績所は開業前に広島紡績会社に払下げられた。

注 4) 佐賀物産の設備は玉島紡に売却された。

## 2. 紡績連合会の創設と下村・玉島紡績所

愛知紡績所々長岡田令高は 1881 年 12 月、機械の運転を開始し、翌年 3 月名古屋地方において製品の試験的な販売に成功して、操業がやっと軌道に乗りはじめるや、連合会の結成に取り組み、早くも同年 7 月には「綿糸紡績同業者聯合約束案」を農商務省に建議した。その中で岡田は、連合会設立の意図を次のように述べている。

凡ソ工業上至難ノ事ハ職工傭役ノ方法其宜ヲ得ルト得サルトニ有之其方法中的切ノ関係ヲ有スルモノハ労銀ノ額其平ヲ得ルト得サルトニ有之若労銀其度ヲ超ユレハ常ニ営業者ノ損耗ヲ来シ損得相償フノ時ナカルヘク労銀其度ヲ下レハ常ニ流離ヲ促シ安堵就業ノ時ナカルヘキナリ故ニ各営業者ニ於ハ職工傭役検束ノ方法ヲ設ケサレハ動スレハ一職工ノ為メ牽制セラレ其影響ハ直ニ工業ヲ左右シ終ニハ業務壊敗ノ基ヲナスコト古今其例少シトセス且ツ材料買入製品売

捌ヲ始メトシ業務須要ノ事項ハ同業相約シテ規定ヲ定メ内ニシテハ一ニ同業ノ所為ニ依テ営業一般ノ障害ヲ生スルコトナク外ニシテハ同業一致シテ他ノ制圧ヲ防クノ策ヲ立サレハ工業ノ保護隆盛ヲ見ルコト難カルヘシ是欧米諸州ニ於テハ同業相会シ業務施設ノ要項職工傭役ノ方法等ヲ議定シ彼此大不同ナキヲ務ムル所以ナリ

事ハ始メニ其宜ヲ制セサレハ慣行直ニ常習トナリ終ニ如何トモスヘカラサルニ至ルハ物ノ数ナレハ此時ニ及テ適當ノ方法ヲ設ケスンハアルヘカラスト故ニ第一期ハ愛知紡績所主唱トナリ大坂ニ於テ同業者ノ会合ヲ催シ、(中略)、聯合約束ヲ結ハシメ漸次紡績事業ノ鞏固隆盛ノ基ヲ立度ト存候<sup>(2)</sup>

同年 8 月には大阪に同業者が会し、連合会結成の相談がなされている。この会合に先立って岡田と大阪紡の山辺丈夫が名古屋で会い、連合会結成について岡田

から話があり、山辺は大いに共鳴したといわれる。この際の約束案が山辺にも予め提示されていたものだろうか。その上で、10 日からの3日間大阪で創設会議を聞き、約束に調印した。この約束は翌 1883 年 1 月 15 日より発効することと定め、こ

こに連合会が発足することになった。紡績連合会の創設は、その後日本綿糸紡績業の発展にきわめて大きな影響を持った。

この創設集会に出席した紡績所とその代表者は次のとおりである。

|     |         |        |
|-----|---------|--------|
| 一番  | 広島紡績会社  | 亀岡勝知   |
| 二番  | 下村紡績所   | 渾大防埃二  |
| 三番  | 姫路綿糸製造所 | 岡崎護三郎  |
| 四番  | 岡山紡績所   | 沼野義也   |
| 五番  | 大阪紡績会社  | 山辺丈夫   |
| 六番  | 桑原村紡績所  | 島田覚人   |
| 七番  | 愛知紡績所   | 岡田令高   |
| 八番  | 渋谷紡績所   | 本川仁十郎  |
| 九番  | 三重紡績所   | 伊藤伝一郎  |
| 十番  | 玉島紡績所   | 難波二郎三郎 |
| 十一番 | 滝本村紡績所  | 前川迪徳   |
| 十二番 | 堺紡績所    | 阪上要助   |

下村紡績所の創業者・渾大防埃二は二番、玉島紡績所の創業者・難波二郎三郎は十番として参加した<sup>(3)</sup>。

### 3. 下村紡績所

#### 3-1 下村紡績所の略沿革

明治新政府はその殖産興業政策の一環として二千錘紡績機を英国から 10 基(セット)輸入して、これを無利息 10 年払いで民間に払い下げた。これを普通「十基紡」

と呼んでいる。下村紡績所はこの十基紡の一つであって、1882(明治 15)年、塩田の経営者・渾大防埃二、益三郎兄弟の手で生産を開始した。また 1888 年、倉敷紡の操業開始に当たっては、大原孝四郎の依頼によって伝習生を受け入れたこともあった。その後は綿業界の浮沈にさらされ、1986(昭和 61)年に倒産するまでに所有者は 7 回代わり、五代の経営者によって事業が継承されてきた<sup>(4)</sup>。

|        |                                   |
|--------|-----------------------------------|
| 1882 年 | 明治 15 年 10 月、備前児島郡下村渾大防埃二、下村紡績所開業 |
| 1887 年 | 「有限責任」の形態となる                      |
| 1889 年 | リング精紡機 1,608 錘増設                  |



|        |                                                                                 |
|--------|---------------------------------------------------------------------------------|
| 1893 年 | 株式会社に改組                                                                         |
| 1897 年 | ミュール精紡機 2,000 錘を除却、リング精紡機のみ 4,564 錘                                             |
| 1903 年 | 9 月、破産による解散                                                                     |
| 1905 年 | 暮れから翌年、大阪の河野幾次郎落札                                                               |
| 1906 年 | 12 月、愛媛紡績株式会社下村支店となる                                                            |
| 1918 年 | 大正 7 年 7 月 1 日、近江帆布株式会社下村工場となる                                                  |
| 1934 年 | 昭和 9 年 8 月、大阪の竹村棉業株式会社は、近江帆布株式会社下村工場を買収。琴浦紡績株式会社と改称。精紡機 11,520 錘、撚糸機 1,200 錘    |
| 1942 年 | 琴浦紡績株式会社を竹村棉業株式会社下村工場と改称<br>5 月 15 日、企業整備令が施行<br>11 月、ミシン 400 台の海軍管理下の縫製工場として転業 |
| 1951 年 | 8 月 13 日、紡績所として全面的に復活、琴浦紡績会社と復称。精紡機 8,176 錘、撚糸機 1,200 錘                         |
| 1962 年 | 2 月、竹村棉業株式会社、備前棉業株式会社に売却。株式会社琴浦紡績所と改称 <sup>(5)</sup>                            |
| 1980 年 | 株式会社琴浦紡績所廃業                                                                     |

廃業当時、渾大防経営時代の遺構としては、1893 年又は 1896 年の赤レンガ造りの工場建屋約 4,400 m<sup>2</sup>、高さ 30m の煙突、ボイラ室が現存した。敷地と建物の所有権は大阪の不動産会社の手にわたった。

十基紡の遺構として貴重なものであるとして、地元の市民団体がその保存運動を展開していた。産業考古学会は、1989(平成元)年 5 月に開催された第 13 回総会で、学会推薦産業遺産に認定し、保存運動を助けることにした<sup>(5)</sup>。

しかし、1990 年工場解体、更地化が行われ<sup>(6)</sup>、現在は株式会社セレマ児島シティーホール(葬祭場・駐車場)となっている。

### 3-2 128 年後に出現した下村紡績所の機械配置図

下村紡績所は跡形なく消滅し、正門前

の下村川河岸に建つ、「金毘羅宮」「明治十七年 甲申三月」「沖組」と刻まれた常夜灯が下村紡績所の遺物である<sup>(7)</sup>。常夜灯の写真を[写真 1]に示す。また、常夜灯の川上に架かる常盤橋も、地元の方々のお話によると、紡績所に行くための橋として造られたそうである。

渋沢史料館は、わが国初期紡績工場の図面 90 点を、2013 年に入手した<sup>(8)</sup>。この中に下村紡績所の図面が 2 枚含まれていた。これまで確認されていたこの時期の紡績工場の図面は、鹿児島紡績所、堺紡績所、愛知紡績所、島田紡績所、下野紡績所及び熊本紡績所の 6 件のみであった。128 年ぶりに出現した下村紡績所の 2 枚の図面は、下村紡績所のみでなく創始期の紡績技術の発展を研究する上で、きわめて貴重なものである。2 枚の図面を簡潔に紹介する。



写真 1 常夜灯

図面 1 「Messrs Mitsui & Co. / Shimomura Spinning Mill / Japan」(渋沢史料館蔵)

裏面には、「英国ヒック会社ヨリ送来ノ分／下村紡績所第二号工場図面」と墨書されている。[図面 1]を次頁に[写真 2]として示す。

この図面には、「HICK, HARGREAVES & Co. \*BOLTON\* / SOHO IRON WORKS」の丸印が押捺されており、その中に「June 27 6/87」とペン書きされている。

「MITSUI & Co. LONDON」の丸印があり、その中に「JUL 8 87」の日付印が押捺されている。三井物産が輸入代理店であることを示すものである。

この図面は、プラット社の紡績機械を、ヒック・ハーグリーブス社が、ボイラと蒸気機関を供給し、据え付けるための機械配置図である。1882 年に開業した二千鍾紡績工場（第一工場）に、次の紡績機械を増設したものである。

ローラ式梳綿機 7 台、3 頭 5 尾練条機 1 台、64 鍾建始紡機 1 台、98 鍾建間紡機 1 台、128 建鍾練紡機 2 台、268 建鍾リング精紡機 6 台(1,608 鍾)、打綿機は第一号工場のもので共用で、増設されなかった。

第二工場に設置されたボイラは 1 基で、その大きさは、直径 6ft、長さ 26ft であり、エコノマイザーを附置している。煙突は丸型である。蒸気機関は Corliss mill engine(コーリス式蒸気機関)1 基である。この形式の蒸気機関は、日本の多くの紡績工場でも採用されたが、コーリス式蒸気機関が明確に図示されている図面は、少ない。コーリス式蒸気機関の図面( [写真 2])の一部を拡大し、次頁に[写真 3]として示す。

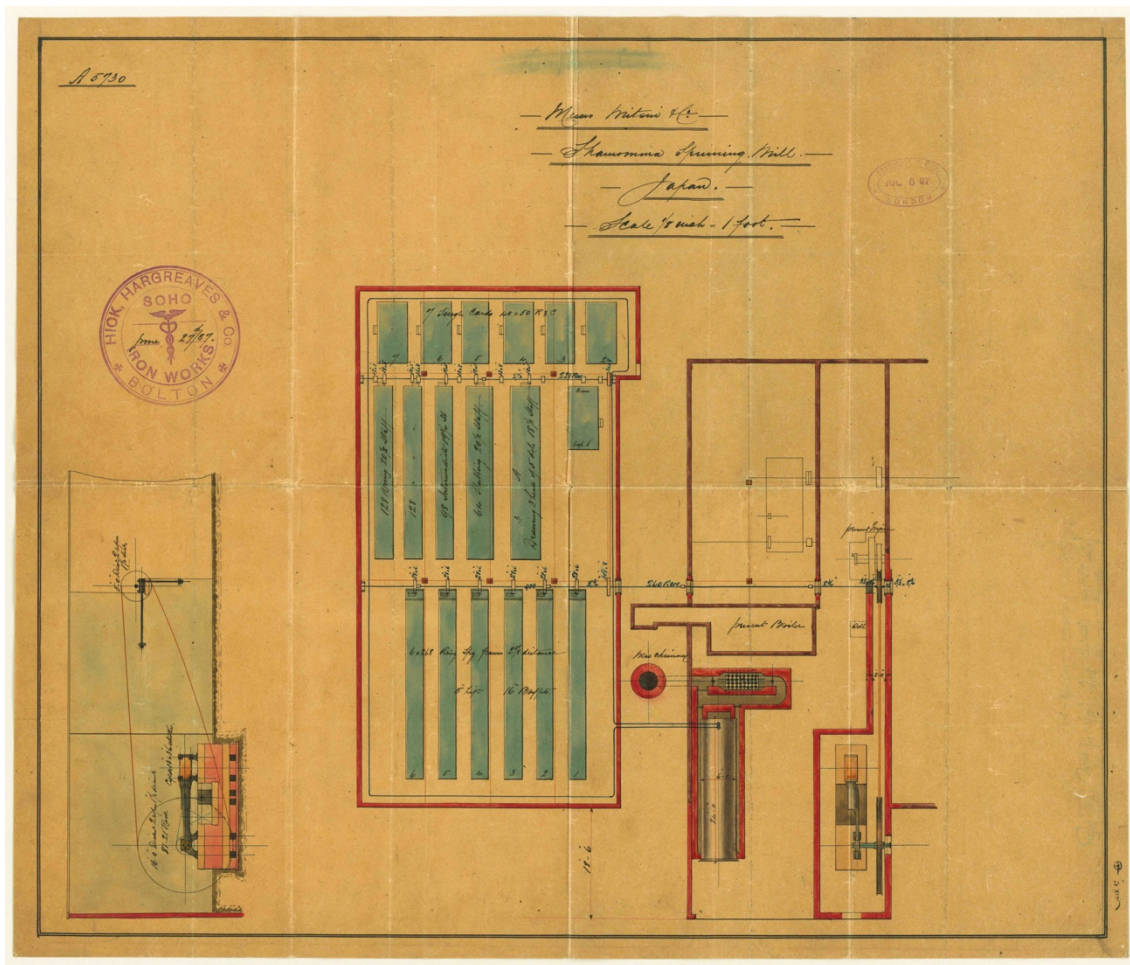


写真 2 下村紡績所第二号工場図面（渋沢史料館蔵）

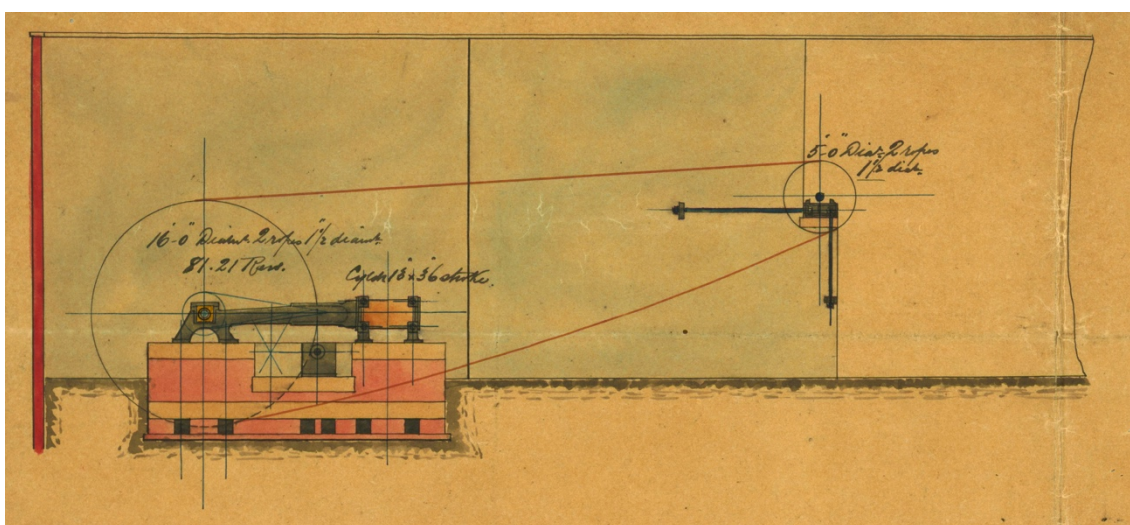


写真 3 コーリス式蒸気機関の図（下村紡績所第二号工場図面の一部、渋沢史料館蔵）



図面 2 「下村紡績所エンジン略図」(渋沢史料館蔵)

この図面は、第一工場の既存ボイラおよび蒸気機関と、第二工場の新設ボイラおよび蒸気機関の関係を示した図面である。[図面 1]と同時期に日本で作成された

図面である。[図面 1]の煙突は丸型であるが、[図面 2]の煙突は四角型に変更されている。実際に立てられた煙突は煉瓦造の四角型であった。[図面 2]を[写真 4]として示す。

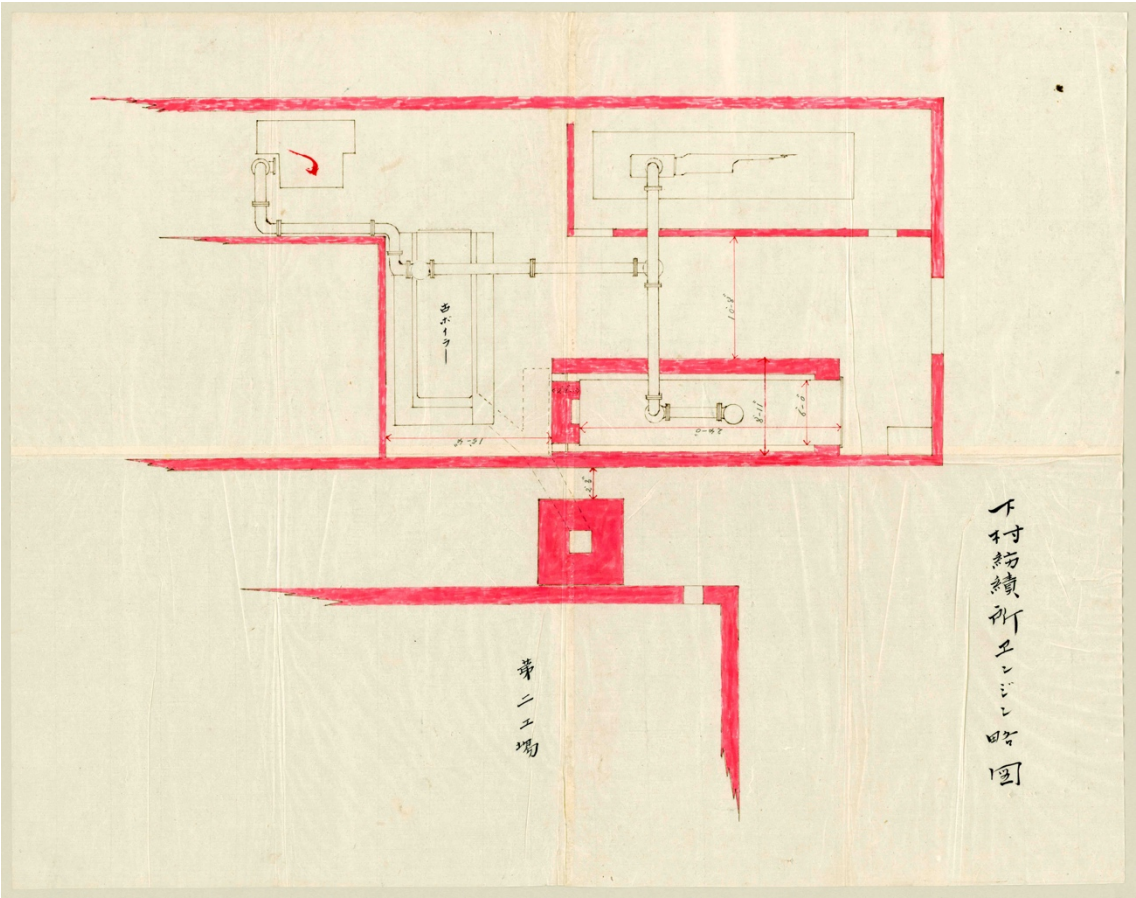


写真 4 下村紡績所エンジン略図(渋沢史料館蔵)

#### 4. 玉島紡績所

##### 4-1 玉島紡績所の略沿革

玉島紡績所は、下村紡績所と同じ十基紡の一つとして、玉島に設置された第二

十二国立銀行玉島支店長・難波二郎三郎により、1882 年生産を開始した。その後、五代の経営者によって事業が継承されてきた。

|        |                                                 |
|--------|-------------------------------------------------|
| 1882 年 | 備中浅口郡玉島町に玉島紡績所開業                                |
| 1886 年 | 佐賀物産会社のミュール精紡機 2,000 鍾を購入。その後、リング精紡機の小規模の増設を続ける |
| 1887 年 | リング精紡機 2,412 鍾増設                                |

|        |                                                          |
|--------|----------------------------------------------------------|
| 1888 年 | リング精紡機 4,680 錘増設                                         |
| 1889 年 | リング精紡機 3,072 錘増設                                         |
| 1891 年 | リング精紡機 2,688 錘増設                                         |
| 1893 年 | ミュール精紡機 2,000 錘を除却、リング精紡機 1,920 錘増設                      |
| 1896 年 | ミュール精紡機 2,000 錘を除却、リング精紡機 10,368 錘増設                     |
| 1899 年 | 破産、吉備紡績株式会社となる                                           |
| 1908 年 | 11 月、倉敷紡績が買収、倉敷紡績株式会社玉島工場となる。リング精紡機 29,336 錘とタオル織機 100 台 |
| 1942 年 | 12 月、玉島工場を休止                                             |
| 1943 年 | 倉敷航空機工業株式会社に貸与                                           |
| 1944 年 | 玉島航空機器製作所となる                                             |
| 1958 年 | 12 月、山陽紡績玉島工場となる。リング精紡機 20,400 錘と特綿紡機 2,642 錘            |
| 1980 年 | リング精紡機 53,800 錘                                          |
| 2002 年 | 山陽紡績玉島工場廃業                                               |
| 2008 年 | 工場建物すべて解体、更地となった                                         |

#### 4-2 玉島紡績所の図面

渋沢史料館には、玉島紡績関係の図面が 2 枚ある。2 枚とも青焼きの図面で、日本で作成されたものである。この青焼き図面は写真で明瞭に示すことができないので割愛した。

#### 図面 1 TAMASHIMA COTTON MILL. 玉島紡績所(渋沢史料館蔵)

上記の表題の図面であり、英文の表記がある。( ) 内は筆者による邦訳機械名である。

| Scale 1/8 inch to a Foot |                       |
|--------------------------|-----------------------|
| BYLER 2                  | (ボイラ 2 台)             |
| ENGIN 1                  | (蒸気機関 1 台)            |
| OP                       | (開綿機 1 台)             |
| SC SC 2                  | (ブリーカ打綿機・仕上打綿機 2 セット) |
| C 21                     | (梳綿機 21 台)            |
| D 3                      | (練条機 3 台)             |
| S 3                      | (始紡機 2 台)             |
| I 2                      | (間紡機 2 台)             |
| R 6                      | (練紡機 6 台)             |
| R 10                     | (リング精紡機 10 台)         |

図面には、作成年月日が記載されていないので、いつの増設のための図面かは特

定できない。しかし混打綿工程に、開綿機 1 台とブリーカ打綿機・仕上打綿機 2 セットが設置されているので、1887 年にリング精紡機 2,412 錠を増設するための図面だと推測できる。

図面 2 明治二十二年寒暖表華氏 玉島紡績所観測 「若松」の丸印(渋沢史料館蔵)

この図面には 1889 年間毎日の天候(正午と深夜 12 時)の華氏表示の気温、●晴、○雨、×曇、●○昼晴夜雨、●×○朝晴昼曇夜雨、\* 雪の天気記号が記載されている。7 月～12 月の気圧(インチ)と強風の日の風向が記載されている。この図面に、1889 年 2 月 11 日に雪が降ったことが記録されている。

綿紡績の生産成績は、天候に大きな影響を受ける。玉島紡績所が毎日の天気を観測して、記録していたこの図面は、玉島紡績所の紡績技術者の優れた科学的精神を示すものである。西日本で一番の好成績を収めた理由がそこにあったように思われる。

おわりに

下村紡績所と玉島紡績所は、それぞれ 1990 年と 2008 年に工場建物はすべて解体され更地化された。筆者が、2010 年に両工場跡の現地調査に赴いた折に、JR 児島駅から旧下村紡績所にいたる歩道に、[写真 5]に示す紡績工場の鋸屋根が描か

れた敷石が 1 枚あるのが目についた。

両工場が存在したことを示すものは、この 1 枚の敷石以外に見つけることができなかったが、現在の所在は不明である。西日本の産業の発展に大きな役割を果たした両工場が、かつてこの地に存在したことを示す、記念碑あるいは説明板などが設置されることを切望するものである。



写真 5 下村紡績所を偲ばせる歩道の敷石(玉川寛治「下村紡績所跡」『日本の近代化を開いた産業遺産』産業考古学会、2011 年、153 頁)

謝辞

写真 1 の掲載を承認された小西伸彦氏、写真 2、写真 3、写真 4 の掲載を承認された渋沢史料館に、また同館蔵のわが国初期紡績工場の図面 90 点の閲覧にお力添えくださった同館学芸員の永井美穂さんにお礼申し上げます。

文献等

- (1) 玉川寛治「紡績聯合会創設の歴史的意義」『技術と文明』、5 巻 1 号。
- (2) 同上書。
- (3) 同上書。
- (4) 吉川一弘「下村紡績所跡」『産業考古学』52 号、1989 年 10 月。

- (5) 角田直一『明治の記念碑 下村紡績』瀬戸内海文化連盟、1969 年、により作成した。
- (6) 玉川寛治「下村紡績所跡」『日本の近代化を開いた産業遺産』産業考古学会、2011 年、153 ページ。
- (7) 同上書。
- (8) 平井直樹・結城武延・玉川寛治・阿部武司「史料紹介 初期日本紡績工場の設計図面 ―二千鍾紡績関係史料および大阪紡績関係資料―」『渋沢研究』31 号、渋沢史料館、2019 年 1 月。

企業の生産システムが都市を形づける

： 倉敷紡績・経営者大原孫三郎と倉敷市

清水憲一(九州国際大学名誉教授)

産業遺産は、「道具・機械・装置、施設・建築物・構造物という産業活動の場所、エネルギーと輸送のインフラおよびその景観から構成される。またこれは、活動の成果物である製品、図面・写真、文書など多種多様な有形の産業活動の証言なども含まれる」(産業考古学会「産業遺産の評価・保存・活用ガイドライン(案)」2017年)とすると、産業活動は生産施設とそれを支えるインフラ(産業基盤)によってシステム的に機能しているものであり、したがって産業遺産はシステムとして理解できることが重要になってくる。つまり産業遺産は、「道具・機械・装置、施設・建築物・構造物という産業活動」の各単体の評価づけによるだけでなく、「システム」であることが評価と保存のポイントとなる。こうした視点から企業と都市＝地域社会の関連を考察するということは、具体的には、企業の生産・産業システムが都市空間にいかにより有機的に配置されているか、または企業の生産・産業システムがどのように、どのような都市空間を形成し、都市を形づけたか、という課題を明らかにすることになる。

戦前・戦後を通して、日本の工業化における企業と都市のあり様を振り返る時、地方において近代的な工業都市が誕生する際には、複数の大資本が投入あるいは内在する場合は極めて限られており、特定の企業あるいは企業グループが工業都市化を牽引する企業城下町タイプが多い。この企業城下町の場合、都市全体にわたって生産活動が展開され、都市そのものが大企業の生産システムに組み込まれているといえる。この企業活動が必要とした生産システムとは、(1)製造に直接かわる工場とその関連施設(電力などの動力、工業用水)「工場関連施設」、(2)製品や原料の運搬にかかわる「輸送施設」(産業基盤としての鉄道・道路網を含む)、(3)従業員の生活を支える「福利厚生施設」(住宅、医療、保健、衛生、慰安、娯楽、文化、体育、教育など)と区別することができる。

こうした施設が都市空間の変容をいかにもたらしたかを検証することになる。この視点から企業＝倉敷紡績と企業城下町＝倉敷の関係性を具体的に検証したのが中野茂夫の研究である<sup>(1)</sup>。この研究成果を整理することが、検討の第一歩である。

中野は、倉敷紡績による産業基盤の整備(生産システムの拡充)が都市基盤・近代的都市施設の整備との関連で市街地の空間構造をいかに変容させたかという視点から、倉敷紡績の事業展開を三段階(戦前)に区分して特徴づける<sup>(2)</sup>。

第一段階 会社設立(M21)～1914

倉敷工場中心の事業展開

第二段階 万寿工場の建設(1915)

～多角経営の時代(1928)

第三段階 本社機能の大阪移転(1929)

～戦時下の統制経済

ところで、この段階区分の第三段階において、企業としての倉敷紡績は、戦時時期に100万錠規模の「十大紡」として「全国展開していく大企業」に移行する<sup>(3)</sup>が、倉敷市内の工場(倉敷、万寿第一・二・三)は不況による人員整理と紡機ハイドラフト化によって職工数は減少し(1927年2,938人、1933年2,314人)、本社の大阪移転で在勤者も減少し、倉敷市の人口は明らかに停滞した(1927年頃約3万人、1935年34,716人、1940年32,228人)。また1920年代後半からの「経営・財務の見直し＝経営合理化」によって病院、研究所、図書館などの施設は会社から分離された。こうしたことから、倉敷紡績の生産システムの拡充と倉敷市の都市基盤・近代的都市施設との強い関連性は、経営者大原孫三郎の経営思想が最も反映された第二段階に形成されており、この点を中心に、以下に要点を整理する。

また、第一段階、とくに倉紡の出発点において留意しておきたいのは、工場の立地場所である。近世以来、明治初期において倉敷は、倉敷川周辺に蔵屋敷・水夫屋敷が建ち並ぶ在郷町であった。戸数1,600、人口約6,000人で、米と棉の集散の商売を除いては他に取りあげるほどの産業もなかった。山陽鉄道の開通・倉敷停車場の開設は1891年のことであり、倉紡は水運を利用して原料・製品運送するために、倉敷川<sup>(4)</sup>沿いの旧陣屋跡地に



工場を建設し、1889年に操業を開始した。

創業頃の倉紡は、資本金 15 万円、創業株主は 131 名で半数が倉敷、残りは岡山とその周辺から募集された。筆頭株主の大原孝四郎が頭取に就いた。当時の最小規模 1 万鍾水準からみても非常に小規模なリング紡績機 13 台 4,472 錘で、蒸気機関は機械類と点灯用の発電機の動力であった。当初の職工の雇用は、近郊の身元確かな親戚等がいることを条件に、口入業者を通して地元から男子 120 人、女子 230 人、計 350 人を通勤職工として雇用した。昼夜 2 交替 24 時間操業で、洋 16 番・和 10 番の廉価な太糸を大阪・岡山・広島、四国・九州の機業地に販売した。まさに典型的な地方紡績企業であった。

原料棉花の調達には、創業時は、'89 年 8 月から備前・備中・備後の各地から実綿や繰綿の買い付けを始め、大阪の内外棉会社から中国棉を購入した。'90 年の消費棉花は国内棉 30%、中国棉 70%であった。会社の創立定款には第 11 条に「綿糸ヲ製スルニハ成ルヘク内国産ノ綿花ヲ用ユルヲ要ス」と定めていたが、国内産の消費率は'92 年 11.2%、'93 年には 10%を割り、'97 年には使用が見られなくなった。そして'93 年の定款改正で第 11 条は削除された。使用綿花は、当初は中国棉が中心であったが、'96 年にはインド棉が中国棉を上回っていった。綿花の運搬は「阪神方面から船便で三幡港まで輸送し、三幡港から瀬取船に積替へ倉敷川を倉敷浜まで運搬した」（東大社研、p. 33）。

1894 年の三次増鍾（4,816 増鍾、計 15,480 錘）をきっかけに女工の遠隔地募集が始まり、このために 96 年に本格的な寄宿舎が建設された。木造二階建て 2 棟、木造平屋の食堂、浴場、寄宿舎病室、裁縫所を備えていた。95 年に職工数は 1,000 人を超え、96 年には 1,432 人を数えた<sup>5)</sup>。

1905 年に二階建て 1 棟・平屋建て 2 棟を増設したが、翌年に寄宿舎でチフスが発生して女工 7 名が死亡した。この責任を取って大原社長は辞任し、二代目社長として大原孫三郎が就任した。

第二期<sup>6)</sup>は、1912 年の拡充計画によって電力、鉄道輸送と 3 万鍾規模という新型＝万寿工場の建設（'15 年創業開始）から始まる。そしてこの万寿工場を特徴づけたのが、熟練男子工の確保ために、孫三郎の労働理想主義を反映して「社宅・通

勤制度」による労働者家族の形成をめざす「田園都市風社宅」の「職工村」が建設されたことである<sup>7)</sup>。しかし、大戦ブームによって増設された'18 年の万寿第二工場では、女工不足から「分散式寄宿舎」による女工の確保へと転換していった。

この期の企業拡張の特徴は、企業合併・買収によって中国・四国地方の瀬戸内を中心に工場群を形成していったことにあり、倉敷市内の「工場関連施設」は第一次大戦期に万寿工場の増設（第二・三工場）と兼営織布に進出し、1920 年代後半期に倉敷市郊外に倉敷絹織（株）を設立して人絹部門に多角化していった。必要電力も 1916 年に備作電気（株）に改組する中で（社長大原孫三郎）、自家発電所を提供・運転停止して外部からの受電に切り替えた。事業運営に関連する研究機関が設立された。大原農業科学研究所（1914）、倉敷労働科学研究所（1921、万寿工場内）、本店実験所（1926、旭町）である。大原社会問題研究所（1919）は市外の大阪市に設けられた。

従業員の福利厚生施設では、南町社宅（1920 年）、浜田町社宅（'24）と職員社宅が建設され、社交・娯楽施設として二三会館（'19）が拡充された。倉紡図書館（'21 年、元町本店転用）、倉紡中央病院（'23 年）、保育所・若竹の園（'24 年）と、1920 年代前半期に建設が相次いだ。

倉紡の産業基盤整備としての郊外開発を、開発会社を設立して取り組んだ。1919 年設立の倉敷住宅土地（株）は、倉敷工場・万寿工場の中間地点の旭町用地を買収して業務街・商業地につくりあげた。倉紡本店事務所、官公署・公共施設が移転・新築され、自動車交通に対応する 3-5 間幅員の 6 路線の道路網も整備された。24 年には倉紡用地が西栄町住宅地開発がされ、翌 25 年には奨農土地（株）が設立されて大原農業科学研究所の果樹畑を住宅地に転換し、道路整備して高砂町住宅地がつけられた。

この頃、大原は、「私は原（澄治、倉紡取締役（1915.1～'45））を町長（1918～'24）にして倉敷の工業都市計画を考へた。人口 1 万 5 千人の中、工場勤労者が 4 千あるから社宅を町内に分散式に造り、在来の倉敷人士と紡績関係者との調和を計りたい。そのため会社に住宅課を新設して住宅経営をやらせたい」として、道路網の整備を核とした

「工業都市計画」に乗り出した。

大原・倉紡は、土地会社を設立して郊外開発を行い、事業費の負担や用地の寄付等によって、町財政だけでは事業化が困難な道路整備を、原澄治を町長として推進した（工業都市計画）。①県道・郡道・主要道路で構成される放射状の幹線道路、②郊外の方形道路、③幹線道路と郊外道路を相互に連絡する循環道路、という都市全体に配慮した道路網が整備された。この新たにつくられた都市構造の上に、大原・倉紡は、倉紡の本社や研究所、病院、社宅、文化施設等を配置していった。こうした倉紡の都市に対する戦略は「倉紡に対して（利益が）増大して帰って来る」という経営理念に基づいて実践された。「こうして倉敷は倉紡の企業城下町となっていった」

（中野、p. 156）。

以上の第一大戦ブームとその後に形成された倉紡の生産・産業システムと企業城下町倉敷の都市空間について、【表】倉敷地域の都市構造に影響を及ぼした倉紡の関連事業、【図】倉敷紡績株式会社の施設分布図（昭和3年）で把握することができる。

#### 注

- (1) 中野茂夫の研究整理は、①『企業城下町の都市計画』（筑波大学出版会、2009）をベースに、②「工業系企業の産業基盤整備が近代地方都市の空間変容に及ぼした影響」（『日本建築学会計画系論文集』544、2001）、③「倉敷／大原孫三郎の労働理想主義と寄宿舎の改良」（社宅研究会編『社宅街』学芸出版社、2009）、④「倉敷紡績株式会社の寄宿舎・職工社宅の推移と大原孫三郎の住宅施策」（『日本建築学会計画系論文集』659、2011）を参照した。

倉敷紡績の産業遺産に関しては、森嶋俊行「企業創業地における近代化産業遺産の保存と活用」（『経済地理学年報』60、2014）が、「倉敷地域の近代化産業遺産一覧」、「倉敷地域の都市構造に影響を及ぼした倉紡・倉紡経営陣の主要な事業」を整理しており参考になる。

- (2) 論文②では、次のような三段階区分であった。

1. 倉敷工場の設備拡張を中心に資本蓄積した「確立期」（M22～T2）
2. 大戦景気を背景に複数工場を新設した事業「拡張期」（T3～S3）

3. 世界恐慌に端を発した不況下において合理化を行い、全国展開していく大企業への「移行期」（S4～戦前）

そして段階区分の基準を企業戦略の三条件とする。①紡績設備の増設、他企業の合併などの「規模の拡大」、②機会、動力、輸送、通信という新技術の導入、経営合理化という「事業の効率化」、③低廉良質な「労働力の確保」

- (3) 「十大紡」とは、東洋紡、鐘紡、大日本紡、呉羽紡、日清紡、富士紡、倉紡、大和紡、日東紡、敷島紡

「全国展開していく大企業」という倉紡の全国的な位置づけについては、再検討が必要である。

- (1) 「資産額による工業会社100社」によると、倉紡は1918年（資産13,679千円、職工数6,220人）に全国43位、1930年（35,311千円、5,407人）42位であるから、1918年において全国的には大企業の位置にあったといえる（由井常彦・大東英祐編『日本経営史3大企業時代の到来』岩波書店、1995、p. 22-3）。(2) 大日本紡績連合会加盟企業として、1912年には4工場57,656錐の13位で「地方の中堅企業」程度であったが、1924年には12工場232,884錐、従業員9,310人で、6大紡に次ぐ7位の「全国有数の規模の大企業」であった（阿部武司編『大原孫三郎』PHP研究所、2017、p. 60-2）。

- (4) 1933年に着工し35年に完成した倉敷川護岸工事は、御船町船溜を新設し、そこに荷揚場と事務所が設置された（『倉敷案内』倉敷商工会議所、1936、p. 65-6）。そして倉敷川貨物は、1929年から1935年にかけて、移入は71,201から113,169噸、移出は14,382から21,534噸と増大し（『倉敷商工会議所十ヶ年間業績抄録』1939、p. 21）、養和期においても重要な輸送手段であったことがわかる。より具体的な分析が必要である。

- (5) 第一期の事業展開については、『倉敷紡績の資本蓄積と大原家の土地所有』（東京大学社会科学研究所、1970）が参考になる。

- (6) 中野は「第二期」を万寿工場建設から本社機能の大阪移転までの拡張・多角経営の時期として区分している。倉紡の会社事業の展開としては、こうした把握に異論はないが、倉敷市内の生産・産業システムの変質という側面から見る時、1924年頃の「科学的管理法による不況対策」、経営方針の見直し、深夜業撤廃に向けた工場改修基本計画などによって従来の温情主義的＝福利施設支出の削減に転換していったことで小区分する必要があるだろう。

(7) 「職工村」の建設による社宅通勤主義の採用について大原は次のように説明している。

「日本の紡績工業は粗笨工業の域を脱することができない。それは男女従業員の勤続が短い為であって、これを精巧工業とするにはどうしても勤続を長くして熟練工を養成する必要がある。遠方から職工をつれて来て、寄宿舎に入れてみたのでは頻繁なる移動は免れぬ。従って熟練工はできない。また労働問題の弊害は、労働者が家庭を離れて寄宿舎に群居することに根本がある。そこで、社宅に住み、土地に根を下ろした労働者が、自分達の工場を中心とした工場村を作り、「工場を住民の共同作業場たらしめる」やうな工場とする必要がある。また労働者を常に土に親しませることが大切である。出でては工業に携はり、入っては鋤を執って土に親しむことができるやうな、田園都市風な工場中心の社宅を理想とする」(『回顧六十五年』p. 147・8)。この職工村のユニークさについては、石田頼房「倉敷職工村(上・下)」(『住民と自治』1998年7・8月号)、坂本忠次「戦前倉敷の都市計画をめぐる覚書—倉敷紡績「職工村」建設をめぐる」(『倉敷の歴史』15、2005)も参照。

【図】倉敷紡績株式会社の施設分布図 (1928・昭和3年)



中野論文②、p.277 による。

【表】倉敷地域の都市構造に影響を及ぼした倉紡の関連事業

| 項目                   | 分野   | 事業主体  | 備考                                                                                                            |
|----------------------|------|-------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 1889 倉敷工場操業開始        | 生産施設 | 倉紡    | 95年、第二工場                                                                                                      |
| 1891 倉敷銀行            | 金融   | 倉紡    | 初代頭取大原孫三郎<br>→'19年6行合同して第一合同銀行<br>→'30年山陽銀号と合併して中国銀行                                                          |
| 1895 寄宿舎建設開始         | 住宅   | 倉紡    |                                                                                                               |
| 1902 工場内倉紡学校設立       | 教育   | 倉紡    |                                                                                                               |
| 1903 倉敷奨学金設立         | 教育   | 大原孫三郎 |                                                                                                               |
| 1907 電話開通            | 通信   | 大原孫三郎 |                                                                                                               |
| 1907 御崎社宅            | 住宅   | 倉紡    | 職員社宅                                                                                                          |
| 1908 分散式家族的寄宿舎建設開始   | 住宅   | 倉紡    |                                                                                                               |
| 1910 倉敷電燈設立          | 電気   | 倉紡    | 倉紡の電化を目的とする<br>→'16年、津山電燈と合併して備作電気、<br>'20年久田水力発電所竣工し倉紡送電<br>→'22年、岡山水力電気を合併＝中国水力電気<br>→'26年、姫路水力電気を合併＝中国合同電気 |
| 1910 倉敷工手学校設立        | 教育   | 倉紡    |                                                                                                               |
| 1911 分散式家族的寄宿舎竣工     | 住宅   | 倉紡    |                                                                                                               |
| 1913 元町本店事務所         |      | 倉紡    |                                                                                                               |
| 1913 倉敷幼稚園設立         | 教育   | 倉敷町   | 大原孫三郎による寄付                                                                                                    |
| 1914 大原農業研究所設立       | 研究施設 | 大原孫三郎 | 現岡山大学資源生物科学研究所                                                                                                |
| 1915 万寿工場竣工          | 生産施設 | 倉紡    | '18年、万寿第二工場<br>'19年、万寿第三工場                                                                                    |
| 1915 社宅建設開始          | 住宅   | 倉紡    | 万寿「田園都市風社宅」＝「職工村」                                                                                             |
| 1915 倉敷発電所送電開始       | 電気   | 倉紡    | 余剰電力を町内供給<br>→'21年、備作電気に提供＝運転停止                                                                               |
| 1919 倶楽部二三会館         | 福利   | 倉紡    |                                                                                                               |
| 1919 倉敷住宅土地株式会社設立    | 住宅   | 倉紡    | 旭町開発                                                                                                          |
| 1919 第一合同銀行設立        | 金融   |       | 初代頭取大原孫三郎                                                                                                     |
| 1920 浜田町職員社宅         | 住宅   | 倉紡    |                                                                                                               |
| 1920 道路法による計画的道路整備開始 | 交通   | 倉敷町   | 大原孫三郎の特定寄付による<br>'21年、「倉敷の工業都市計画」                                                                             |
| 1921 倉敷労働科学研究所設立     | 研究施設 | 倉紡    | 1930倉紡から独立                                                                                                    |
| 1922 旭町本店事務所         | 会社   | 倉紡    | 元町から新築移転 →'29年から本店事務大阪移転                                                                                      |
| 1922 新漢園寄付           | 福利厚生 | 大原孫三郎 |                                                                                                               |
| 1922 倉紡図書館設立         | 福利厚生 | 倉紡    | 1931閉館                                                                                                        |
| 1923 上水道敷設           | 水道   | 倉敷町   | 原澄治町長施政下を実施                                                                                                   |
| 1923 倉敷中央病院設立        | 福利厚生 | 倉紡    | 1934財団法人化                                                                                                     |
| 1924 二三会館増築          | 福利厚生 | 倉紡    | 職員向け娯楽施設                                                                                                      |
| 1924 南町職員社宅          | 住宅   | 倉紡    |                                                                                                               |
| 1925 若竹の園開園          | 福利厚生 | 倉紡    | 保育所、1935財団法人化                                                                                                 |
| 1926 倉敷天文台新設         | 福利厚生 | 原澄治   |                                                                                                               |
| 1927 鶴形山トンネル開通       | 交通   | 倉敷町   | 原澄治町長施政下を実施                                                                                                   |
| 1927 本店実験所           | 生産関連 | 倉紡    |                                                                                                               |
| 1927 奨農土地(株)         | 住宅   | 倉紡    | 高砂町開発                                                                                                         |
| 1930 大原美術館開館         | 福利厚生 | 大原孫三郎 |                                                                                                               |
| 1930 中国銀行設立          | 金融   |       | 第一合同銀行を吸収合併                                                                                                   |

森嶋俊行論文(p. 7)をベースに中野著および『六十五年』で補足した。

## 倉敷の帆布

天野武弘(産業考古学会会長)

### 1. はじめに

旧児島郡を含む倉敷の繊維産業は、江戸時代中期の真田紐や小倉織に始まり<sup>(1)</sup>、その小倉織地の切れ端を利用した足袋生産が行われた<sup>(2)</sup>。明治になると下村紡績や玉島紡績、倉敷紡績が開業し繊維産業の近代化が図られる。一方、小倉織を応用した雲斉織を素材にした足袋生産が児島地区に広まり、ここを主産地に岡山県は大正時代には全国一の足袋生産県<sup>(3)</sup>に発展する。その後服装の洋風化に伴い急成長したのが洋服で、中でも学生服、作業服が大正末から昭和にかけて主要産業となり、今も岡山県は全国の中で圧倒的な地位を占めている<sup>(4)</sup>。さらに児島は国産ジーンズの発祥の地と言われるように、1965(昭和40)年にジーンズ第1号を出して以来、同県の井原市とともに日本を代表するデニム生産地<sup>(5)</sup>となっている。

こうした倉敷の主要な繊維製品を見ていくと、多くは児島地区を主産地とした厚地の織物であることに気がつく。小倉織は綿糸を3~4本を撚り合わせた太糸で織った丈夫な織物であり、雲斉織は足袋底にも使われたように綾織りの厚地もので、前掛けや後の作業服にも用いられてきた。学生服もデニムも長持ちするよう厚手の丈夫な織物として作られている。

本稿で取り上げる帆布については、1874(明治7)年に当時の小田県(備中地方)で、この時はまだ松右衛門帆と思われるが、帆木綿として生産が記録され<sup>(6)</sup>、1916(大正5)年には備前織物の産額表に帆布<sup>(7)</sup>の名が見られるので、古くからの生産品であったことがうかがえる。帆布もまた同じく厚手の丈夫な織物であることから、この地方の厚地ものの流れをくんだ織物の一つとすることができる。

### 2. 綿帆布生産の歴史

#### (1) 帆布生産の始まり

帆布とはどのような織物であろうか。文字通り帆掛け船用の帆布を指す言葉であるが、当初の帆

は、帆木綿という織物を数枚縫い重ねて使用していた。これを綿帆布として開発に成功したのが現在の兵庫県高砂市出身の工業松右衛門で、1785(天明5)年であった<sup>(8)</sup>。開発した綿帆布は、軽便で持久力があつたことから「松右衛門帆」と呼ばれ、帆船用として広く用いられていく。

当初の松右衛門帆は当然ながら手織りであった。水車を動力とした力織機による帆布生産の始まりは、薩摩の島津藩である。当主の島津斉彬は、1857(安政4)年頃に、1867(慶応3)年創立の鹿児島紡績所の前身となる田上水車館を立ち上げ、2台の織機を据え付け1台1日に帆布10反を織り上げた<sup>(9)</sup>とある。これに関しては、『薩摩藩紡績史料』『田上村水車館機織場』の項に「此帆木綿ハ大筋木綿糸八筋ニ合セ云々」ともある<sup>(10)</sup>。ここでは帆木綿としており松右衛門帆を指しているであろうが、綿糸8本を撚糸としているから、かなり厚手の綿帆布を機械織りしていたことが分かる。ただし1日1台10反の生産量は疑問符が付くところである<sup>(11)</sup>。

明治になり帆布の需要が増すにしたがい、アメリカから、通称メリケン帆布と呼ばれた帆布の輸入が増大する。これに対抗して国産帆布の工場を立ち上げたのが近江帆布(株)(現滋賀県近江八幡市)であった。1897(明治30)年のことである。蒸気機関を動力とし、16台の動力織機を設備して生産に当たった。創業翌年には22インチ(約55.9cm)幅のアメリカ規格の0号から7号の綿帆布の販売を始めている<sup>(12)</sup>。動力織機による国産綿布の本格生産の始まりでもあった。近江帆布では年々生産量を拡大し、12年後の1909(明治42)年には約106万ヤール(ヤード、約97万m)と創業翌年の7倍近くになり、輸入帆布を凌駕することになる<sup>(13)</sup>。

こうした推移の中、近江帆布のほかにも民間の帆布工場が、明治期から大正時代にかけて、広島県の尾道、兵庫県の明石、大阪府の泉州、静岡県、神奈川県など各地で立ち上がり<sup>(14)</sup>、そして岡山県にも波及することになる。

(2) 『全国工場通覧』にみる岡山県の帆布工場  
明治、大正期の帆布生産の様子については、『全

『国工場通覧』（農商務省商工局工務課編纂）に見ることができる。同工場通覧刊行の最初となった1902（明治35）年12月末調査（1904年3月刊）では、帆布（帆布綿を含む）を製造品目として挙げているのは全国で7工場ある。兵庫県の3工場、静岡県の2工場、広島県の1工場、滋賀県の近江帆布である<sup>(15)</sup>。この時近江帆布は従業員数が96名と最も多く、帆布生産工場として全国一の規模であったことが分かる。

2年後の1904（明治37）年12月末調査（1906年12月刊）の工場通覧では全国で6工場<sup>(16)</sup>となるが、その3年後の1907（明治40）年12月末調査（1909年5月刊）では13工場<sup>(17)</sup>と倍増している。とくに目立つのが兵庫県で全国の約半数となる7工場に増やしている。そのほとんどの所在が現在の明石地域である。

そして岡山県で初めて帆布生産工場として登場するのが、第5回目の工場通覧の刊行となった1916（大正5）年12月末調査（1918年11月刊）の時である。ここに、備産織物（株）（都窪郡茶屋町）と吉備織物所（都窪郡万寿村）の2工場が名を連ねている<sup>(18)</sup>。備産織物では足袋原料の次に帆布として製品種類が挙げられ、吉備織物所では一番目の製品種類に帆布を掲載している。備産織物は1910（明治43）年の創業で、この時従業員数は124人、吉備織物所は1913（大正2）年創業で、97人の従業員を持つ、どちらも比較的規模の大きな工場として操業していたことが窺える。

なお、この年の調査における全国の帆布工場は19工場あり、兵庫県の10工場を筆頭に、大阪府、滋賀県、広島県、岡山県がともに2工場、静岡県の1工場である。このうち滋賀県の近江帆布（株）は、滋賀県に2工場を持ち従業員計464人の巨大帆布工場となっている。

工場通覧として7回目の調査となった1919（大正8）年1月末調査（1920年12月刊）では、帆布の生産は全国で35工場と大きく増えている<sup>(19)</sup>。明石を中心とした兵庫県が11工場、尾道を主とした広島県が8工場、泉南を中心とした大阪府の6工場が主だったところである。岡山県でも2工場増えて4工場となっている。大正時代最後となる1921（大正10）年刊の工場通覧では、岡山県は3工場となる<sup>(20)</sup>。しかしこの時はまだ、児島郡で

の帆布工場は姿を見せていない（詳細は後述）。

工場通覧はその後1931（昭和6）年刊行まで絶版となるが、再開された1929（昭和4）年末調査の『全国工場通覧』には、岡山県内での帆布生産工場は6工場が挙げられている。難波織布工場（都窪郡撫川町）、牛窓織物（資）（邑久郡牛窓町）、大日本織物（株）（岡山市八日市）、恵藤織物工場（倉敷市濱）、石井織物工場（倉敷市福井）、武鏑織布呼松工場（児島郡福田村）である<sup>(21)</sup>。この時、児島郡における最初の帆布工場が顔を出すことになる。

この調査の3年後となる1932（昭和7）年12月末調査（1934年9月刊）の『全国工場通覧』には、岡山県で帆布を生産する織物工場は3工場増えて9工場となる<sup>(22)</sup>。このうち児島郡内では、武鏑織布工場（児島郡郷内村）、武鏑呼松織布第一工場（児島郡福田村）、武鏑呼松織布第二工場（児島郡福田村）、マルあ曾原織商会（児島郡郷内村）、小田綿糸（株）郷内織布第二工場（児島郡郷内村）、近江帆布（株）味野工場（児島郡味野町）の7工場、それ以外が、大日本織物（株）（岡山市八日市）、難波織物工場（都窪郡撫川町）、牛窓織物（株）（児島郡琴浦町）の2工場である。

これに見るように、児島郡での帆布工場が昭和初期の1929年から1932年の3年間に1工場から7工場へと大きく増えていること、また岡山県全体としても9工場のうち7工場が児島郡に集中していることが特徴として挙げられよう。さらに帆布の巨大企業である近江帆布がこの地に進出していることも注目される。しかし、近江帆布は、昭和9年8月21日の山陽新聞によれば<sup>(23)</sup>、近江帆布味野工場は廃止し、設置していた織機500台は一部を同社の草津工場に、大部分を愛媛県宇和島工場に移転と記されている。

いずれにしても、昭和初期の児島郡に急速に帆布工場が集中したことは、この地が新たな帆布生産地として歩み出したことを示している。それはこの時期の帆布生産額にも現れている。

明治から昭和初期に至る「児島郡綿織物製品価額構成の推移」<sup>(24)</sup>によれば、綿帆布は、1929（昭和4）年の統計に第5位（郡内構成比5.8%、県内構成比21.4%）として初めて顔を出し、1931（昭和6）年には3位（郡内構成比9.1%、県内構成比



21.8%)に順位を上げ、1936(昭和11)年も3位(郡内構成比7.8%、県内構成比24.1%)を維持し、児島郡内では圧倒的に多い50%以上の構成割合を示す綿小倉や、第2位の雲齊には及ばないものの、帆布生産は児島郡内の5~9%と一定の地位を保つようになったことが示されている。

### (3) 倉敷での帆布生産の歴史

前節で述べたように、倉敷で最初の帆布生産工場は、1916(大正5年)年12月末調査の『全国工場通覧』(大正7年刊)に記載される備産織物(株)と吉備織物所の2工場と思われる。備産織物は1910(明治43)年10月の創業で、当時の都窪郡茶屋村(現倉敷市茶屋町)に所在、吉備織物所は1918(大正2)年10月の創業で、こちらも同じく都窪郡の万寿村(現倉敷市、倉敷駅周辺地域)に位置していた。

この2工場は、翌1917(大正6)年12月末の『全国工場通覧』の調査(大正8年10月刊)でも、帆布生産の継続が記載<sup>(25)</sup>されているが、1919(大正8)年1月末の同調査では、備産織物(株)は帆布生産を継続しているものの、吉備織物(この時は合資会社)は製品種類に帆布は消え小倉地と変わっている。この2工場と交替して、この時新たに3工場が帆布生産に乗り出している。御津郡伊島村(現岡山市)の備前織物(株)と都窪郡茶屋町の正織(株)(明治13年5月創業、現正織興業(株))及び、同郡万寿村の正織(株)倉敷分工場(大正7年9月創業)<sup>(26)</sup>である。この3工場は1920(大正9)年12月末調査の次の工場通覧にも変わらずに掲載されている。

これらの工場の所在地は、いずれも織物の一大産地である児島郡(現倉敷市)が含まれていない。しかし、上記と同じ時期の1913~17(大正2~6)年の5年間における児島郡の織物工場や生産品やその産額などをまとめた『備前織物の今昔』(備前織物協同組合編、大正8年発行)によれば、このうち一度だけであるが、1916(大正5)年に帆布の名で産額が記されている<sup>(27)</sup>。

その産額は、同年の綿織物全体の0.00088%と極めて少ない割合であり<sup>(28)</sup>、帆布生産はほとんどないに等しい状況でもある。しかしわずかではあるが、児島郡でも帆布の生産は行われていたこ

とが記録に残っている。これがどこの工場であったかは記されていない。

備前織物同業組合は、同書によれば1905(明治38)年3月に岡山県児島郡織物同業組合として発足し、3年後の1908(明治41)年11月に備前織物同業組合と改称している<sup>(29)</sup>。当初の名にあるように、この組合は当時の児島郡の織物関係の業者で組織されたことが分かる。組合員もこの本が発行された1919(大正8)年当時は370余名<sup>(30)</sup>とあり、一大組織であったことが窺える。

また本書には、組合所属の主要な織物工場と思われる89カ所の工場が一覧になって掲載<sup>(31)</sup>されている。そこには、工場名、場所、生産する織物種類や、設備される織機の種類と台数、原動機の種類や馬力までが克明に記されている。しかしそこに帆布の名はどこにも見当たらない。

こうしたことから、児島地区での帆布生産は、この大正初期の時代はまだ試織段階であったことが窺える。しかし前節で述べたように、昭和初期に大きく発展する帆布生産の助走期間であったともいえよう。

ちなみにこの時代の備前織物同業組合では、木綿織物では70種余り、絹綿交織の織物で8種類の計90種ほどと、多種種類の織物を作っていたことが記されている。

その産額割合では、帆布が記される1916(大正5)年を例にすれば、多い順に、小倉織と思われる袴地の19.9%、足巻雲齊(ゲートル)などを含む雲齊の17.7%、着尺の13.3%、洋服地の11.8%、真田紐の5.5%、仕事着に使われた厚手の織物である厚司の5.2%である<sup>(32)</sup>。

全体として厚地の織物が目立っており、この地域の織物の特徴をよく示していることが産額の面からも明らかとなる。

その後の倉敷における帆布生産の様子は、「都窪郡・倉敷市織物製品価額構成の推移」<sup>(33)</sup>にも見られている。そこには、1924(大正13)年に突然のごとく第3位の産額に帆布(郡市内構成比10.8%、県内構成比57.8%)が登場し、1929(昭和4)年には第2位(郡市内構成比25.3%、県内構成比68.3%)、1931(昭和6)年には1位(郡市内構成比42.0%、県内構成比52.7%)、1936(昭和11)年も継続して1位(郡市内構成比38.4%、県内構

成比 52.7%) となる躍進を成している。

児島郡についてはこちらも先に記したように、同様の躍進を示している。

こうした昭和初期の帆布の躍進は、都窪郡にしても児島郡にしても、昭和初期に急速に帆布工場が増えていったことと関連していよう。

倉敷における歴史的な帆布工場としてこの時代より名を連ね、1970 年代（昭和 50 年代）時点も経営を続けているのは、『帆布の今昔』（昭和 52 年 11 月発行）によれば<sup>(34)</sup>、綿帆布で名を売った恵藤織物（倉敷市濱、大正 7 年 11 月創業）、正織興業（当初は正織社と称す、帆布生産の年代は不詳）、武鑑織布（現（株）タケヤリ、後述）、備前織物（大正初期に帆布生産を始めた備産織物を吸収合併し備前織物茶屋町工場とする）を含め、日本織物（株）（大正 8 年創業）や後述する丸進工業（株）ほか 10 数工場となっている。

#### 4. 綿帆布の規格（1 号～11 号）

帆布は最も基本的な織り方である平織りで織られた厚手の織物で、英語ではキャンバス（カンバスとも言う）である。かつてはズック（オランダ語）とも呼ばれ、上履き用の靴の生地にも多用されていたことから、厚手の布製の上履きの代名詞として広くその名が使われていた。

現在日本では、綿帆布は 1 号から 11 号までの種類が決められている。これらの製品種類の規格は、1997 年に JIS 規格が廃止されるが、これ以後も今も全てこの規格に基づいて生産されている。

この規格表<sup>(35)</sup>によると、表 1 のように、1 号帆布が最も重く、11 号帆布が最も軽い生地となる。すなわち、1 平方ヤード当たりのオンス (oz/yd<sup>2</sup>) で重さを規定しているが、JIS では 1 平方メートル当たりのグラム (g/m<sup>2</sup>) でも重さを示している。今では分かりやすさの点から後者の方が広く用いられている。具体的には、最も重い 1 号帆布では 1,014 g/m<sup>2</sup>、最も軽い 11 号帆布では 343 g/m<sup>2</sup> である。

綿帆布の特徴は、この生地の重さ（厚さ）にあるところであるが、これは経糸と緯糸の使用本数に関係する。すなわち、1 号帆布では、通常の織物ではほとんど用いない経糸 7 本、緯糸 8 本をそれぞれ撚り合わせて製織する。以下、表 1 のよう

に順にそれぞれの本数を減らして製織している。そしてもう一つの特徴が、糸は全て太糸の範囲に入る綿番手の 10 番<sup>(36)</sup>を使用し、全て平織りで製織していることである。

表 1 綿帆布の規格

| 番号 | 原糸 |              |              | 重さ<br>g/m <sup>2</sup> |
|----|----|--------------|--------------|------------------------|
|    | 番手 | 経糸撚り<br>合わせ数 | 緯糸撚り<br>合わせ数 |                        |
| 1  | 10 | 7            | 8            | 1014                   |
| 2  | 10 | 7            | 7            | 941                    |
| 3  | 10 | 6            | 6            | 867                    |
| 4  | 10 | 6            | 5            | 794                    |
| 5  | 10 | 4            | 5            | 720                    |
| 6  | 10 | 4            | 4            | 647                    |
| 7  | 10 | 3            | 4            | 573                    |
| 8  | 10 | 3            | 3            | 500                    |
| 9  | 10 | 2            | 3            | 510                    |
| 10 | 10 | 2            | 2            | 428                    |
| 11 | 10 | 2            | 1            | 343                    |

(注)「綿帆布」JIS L 3102-1957 より抜粋

綿帆布の用途としては、メーカーにより違いはあるが、例えば、以下のようなものがある<sup>(37)</sup>。

- 1 号帆布：馬具の基布、バッグなど
- 2 号帆布：ベルトコンベアの基布、レスキューツール収納袋など
- 3 号帆布：相撲の稽古まわし、船舶ハッチカバーなど
- 4 号帆布：体育館のフロアーシート、船舶ハッチカバーなど
- 5 号帆布：バッグ、船具など
- 6 号帆布：体育館用マット、トートバッグなど
- 7 号帆布：シューズや帽子、トートバッグなど
- 9 号帆布：トラックの幌、ホワイトデニムなど
- 10 号帆布：空手衣、餅布など
- 11 号帆布：ジャケット、バッグ、エプロン、トートバッグ、工具用バッグなど

#### 3. 倉敷で稼働する帆布工場

倉敷での帆布生産は 2019 年 2 月現在、3 社となっている。といってもこの 3 社で国産帆布の 7 割ほどを生産している。現在日本で流通する帆布は、全体の 97%が輸入品であり、日本ブランドの国産はわずか 3%ほどである。その 3%のうちの 7 割が倉敷産<sup>(38)</sup>であり、その意味で倉敷は今、全国一の帆布生産地となっている。

その3社のうち1社目は最も歴史の古い会社で、1888（明治21）年2月創業の（株）タケヤリ（倉敷市曾原、当初は武鑓織布工場、以下、タケヤリと略）である。2社目はこの武鑓織布工場から分かれ、当初から帆布生産工場として1933（昭和8）年に、タケヤリの工場に隣接して創業した丸進工業（株）（倉敷市曾原、以下、丸進工業と略）、そしてもう1社が、戦後間もない1949（昭和24）年頃に創業し、タケヤリの下請け工場として、こちらもタケヤリの工場近郊に位置し、現在は独立して帆布生産を行う日真産業（株）（倉敷市木見、以下、日真産業と略）である。いずれの会社も倉敷市の旧児島郡に所在している。

#### （1）株式会社タケヤリ（倉敷市曾原）

##### 1）タケヤリの歴史

1888（明治21）年2月に創業したタケヤリ（当初は武鑓染織所、武鑓織物工場など）における創業時の生産品の詳細は分かっていない。その生産品が明らかになるのは、タケヤリのカタログ<sup>(39)</sup>によれば、1903（明治36）年の第5回内国勸業博覧会（大阪で開催）に、創業者の武鑓石五郎の名で出品した「瓦斯紺無地」の織物である。これがこの時の博覧会総裁であった載仁親王より褒状を受ける栄誉を賜っている。

瓦斯紺無地とはどのような織物であろうか。おそらく瓦斯糸を用いた紺色に染めた無地の織物であったと想像される。瓦斯糸とは糸をガス炎に通して糸表面の毛羽を焼き取り、光沢ある糸にした高級織物用の糸のことである。当時の児島郡は小倉織や雲斉織など厚手の織物を特徴とする地域であり、その点では異色の織物とも思えるが、あえて高級感ある織物を目指していたのかもしれない。

しかしその後、タケヤリが次に織物の名を出すのは、明治44年刊の『全国工場通覧』である。そこには、製品種類として足袋地用目倉紺とあり、工場名称も武鑓染織所とある<sup>(40)</sup>。目倉とはまたよく分からない。足袋地用であるから小倉織の小倉の誤植とも思われる。それを紺で染めたのであろう。工場名も染めの文字が入っており、1903年の褒状を受けたときも紺染めしたことが窺えるように、この頃までは織りだけでなく染めも事業として行っていたのであろう。

『全国工場通覧』の1916（大正5）年12月末の調査（1918年11月刊）では、工場名から染めの文字は消え、武鑓織物工場となる。また製品種類も雲斉木綿となり、新たに13馬力の蒸気機関を設置し、工場主名も武鑓卓衛となる<sup>(41)</sup>。卓衛は創業者石五郎の長男である。また創業年月も明治43年6月とこれまでと変わっている。場合によると、この時に工場主が卓衛に替わり、工場名も武鑓織物工場に変えたのを機に、その設立年を創業年としたのかもしれない。

さらに1919（大正8）年1月末の『全国工場通覧』の調査では、製品種類は雲斉木綿と変わりは無いが、工場名は武鑓合資会社工場となる。機関も20馬力のガス機関に更新し、従業員は男10人、女25人<sup>(42)</sup>と中堅の織物工場としての体面を整えている。創業年の明治43年6月は、合資会社となっても変わっていない。

これとちょうど時を同じくする1919年3月に出版された『備前織物の今昔』には、前述したように、1913～17（大正2～6）年における89カ所の備前織物の工場が掲載されているが、ここに工場名として武鑓織物合資会社とあり、織物種類は刺底と雲斉とあり、13馬力の蒸気機関を据え付け（図1）、動力織機を計50台設備していることが記されている。

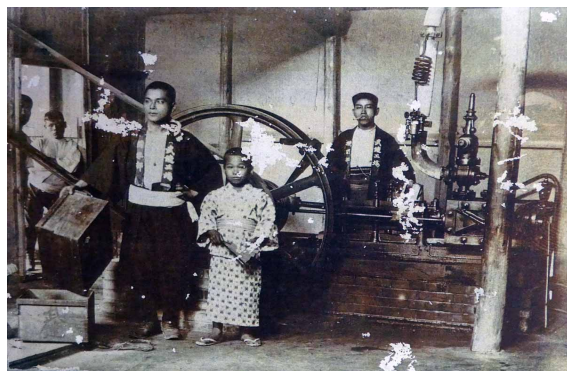


図1 大正初期頃の武鑓織物合資会社の蒸気機関（武鑓工場機関部と記す半纏を着る）（（株）タケヤリ所蔵）

ここには織機のメーカーまで記され、その内訳は、田辺式が34台、豊田式が2台、中村式が10台、丹羽式が4台である。計50台の設置台数は、備前織物同業組合に所属する89工場中4番目<sup>(43)</sup>の多さで、同組合の中で動力織機による先進的な織物工場としての地位を確立していたことが窺え

る。また1917（大正6）年9月時点での同組合の評議員の一人として名を連ねている<sup>(44)</sup>。さらにこの『備前織物の今昔』の巻末にある各社の広告欄に、「武鍬織布合資会社」の名前入りの写真が1頁を割いて掲載されている（図2）。



図2 武鍬織物合資会社（大正6年頃）  
（『備前織物の今昔』巻末の広告頁より）

ように、明治末期頃から大正時代には、足袋地用とか刺底、雲斉木綿などとあるように、厚手の織物を中心に生産していたことが分かる。これらの生産によって、郷内村の武鍬工場はよく知られる工場<sup>(45)</sup>となっていたようである。すなわち、この時期に児島地区で発展していた足袋生産に呼応する形で、雲斉木綿を主生産していたことが窺える。

しかしまだこの時点では帆布の名は出てこない。タケヤリでは、『全国工場通覧』の調査が再開された1929（昭和4）年12月末調査の際に、初めて帆布の名が登場する。それは本社のある郷内村でなく、児島郡福田村の武鍬織布呼松工場として大巾帆布の名で帆布が記されている<sup>(46)</sup>。この呼松工場は1921（大正10）年1月開業となっており、タケヤリがこの時に帆布生産のための工場を新設したか買収したものと思われる。

なお、タケヤリのカタログにある沿革によれば、1927（昭和2）年2月に、現在地に武鍬織布工場設立（代表者武鍬卓衛）とある。そして別の同社沿革にはこの時帆布製造を始める<sup>(47)</sup>とある。

こうした流れから考えると、タケヤリでは1921（大正10）年頃から帆布生産を開始し、1927（昭和2）年に現在地に織布工場を新たに設立して、本格的に帆布生産を始めたと思われる。タケヤリ創業から30年余りを経過した時である。この時期は一方で洋風化に伴う足袋生産の減少があり、これに代わる産品を模索する中でのことだったので

あろう。

このようにタケヤリは、児島郡における帆布本格生産の嚆矢の工場であったといえよう。ちなみに、タケヤリが所在するかつての郷内村の歴史を研究と保存を進める郷内歴史保存会では、ここを帆布発祥の地として、タケヤリ本社正門前に標識を建てて顕彰している。

その後のタケヤリではさらに、『全国工場通覧』の1932（昭和7）年12月末調査（1934年9月刊）に見られるように、本社工場となる現在地の児島郡郷内村字曾原の武鍬織布工場のほかに、武鍬呼松織布第一工場と同第二工場（いずれも児島郡福田町、第二工場の創業年は大正11年11月、生産品は3社とも広幅綿帆布）<sup>(48)</sup>を持ち、事業を拡大していることが分かる。

タケヤリでは戦時中も、軍用の帆布生産工場として継続でき、今日まで一貫して帆布生産を続けてきている。その中で戦後の大きな特徴は、1952（昭和27）年5月に（株）クラレと連携して、ビニロン製の帆布の本格生産を始めたことである。このビニロン製の帆布生産では、1961（昭和36）年に製織世界一<sup>(49)</sup>となる快挙も遂げている。

その前の1956（昭和31）年3月には、個人経営から株式会社に移行し、1968（昭和43）年に同社で初めてとなる外国製の重布用の高速織機となるシャトル織機（ベルギーのピカノール製）を導入し、さらに事業の拡大を図っている。また1979（昭和54）年には同社最初となる革新織機のエアージェットを導入し、その後もレピア織機なども導入して設備の近代化を図り、1989（平成元）年10月には現在の（株）タケヤリに社名を変更し、今日に至っている。

なお、帆布では綿帆布だけでなく、業界では合成繊維の帆布が広く生産されるようになるが、タケヤリでは当初のビニロンに変わって、同じクラレ製のポリエステル帆布の生産が、現在では全体の6割ほど<sup>(50)</sup>となっている。

## 2) タケヤリの工場設備と帆布生産の現状

2019年2月現在、主な工場設備は、同社の武鍬澄治相談役からの聞き取りと、現地調査から以下のものが確認できている。

シャトル織機（ピカノール製、重布用）8台、



シャトル織機（ピカノール製、中軽布用）18 台、革新織機であるグリッパー織機（スルーザー製）5 台、エアージェット織機（津田駒製）10 台、レピア織機（石川製作所製）11 台である。シャトル織機は計 26 台、革新織機は各種含めて計 26 台、合計 52 台である。



写真 1 タケヤリのピカノール製シャトル織機  
(2019. 3. 1 筆者撮影)

綿帆布を例に工程順に述べれば、タケヤリでは整経工程から始めている。この前工程の合糸と撚糸は協力工場となる撚糸工場での外注としている。整経工程は経糸を作る工程で、織り幅に合わせて 1200 本から 2000 本余の経糸を準備する。

その綿糸は国産糸では大阪泉南地区の紡績会社のもを使用し、輸入糸は主にパキスタン綿を用いている。また紡績糸の種類では、従来のリング精紡機によるリング糸と呼ばれる糸と、空気精紡機（オープンエンド精紡機）による空紡糸と呼ばれる、2 種の糸が使い分けられている。

次いで経糸を織機に掛けるための経通しの作業に入る。これは人手によっている。同じ種類の帆布を続けて織機に掛ける場合は省くことができるが、新たな帆布を織機に掛ける場合に行われる。丸一日前後の根気の要る仕事である。そして製織に入る。

綿帆布の製織ではその多くをシャトル織機で行っている。このうち 1 号から 6 号など厚手の重い綿帆布は、シャトル織機の中でも重布用となる頑丈な造りのピカノール製の 8 台の織機を使用する。8 号から 11 号など軽めの薄手の綿帆布は、同じくピカノール製の中軽布用の 18 台のシャトル織機と、2 種の機械を使い分けている。

織り方は、綿帆布の特徴でもある全て平織りで

行っている。とくに 1 号から 3 号のような超厚手の重量のある綿帆布は、現在これを製織できる重布用の織機を持っているところは他になく、タケヤリでしか生産していないという。

エアージェット織機、レピア織機、グリッパー織機の革新織機の方は、タケヤリでは現在はポリエステル製の帆布の製織に用いている。綿帆布の 8 号や 9 号などの一部については、レピア織機も使用されている。

そして最後の工程となる流し検反を経て、畳み機で 1m ごとに畳んで出荷を待つことになる。

こうした帆布の生産量は、高度成長期の 1972（昭和 47）年頃には、綿繊維、合成繊維合わせて月産 26 万 m を織っていた<sup>(51)</sup>が、現在では月産 15 万 m ほどとのことである。

タケヤリではもちろん帆布を主力にしているが、備前 1 号と称する綿 100% の 40 番手双糸を使った、衣料用の生地も一部、シャトル織機で織っている。

### 3) タケヤリの産業遺産

タケヤリは歴史を持つ会社だけに、工場建物には歴史的な様子が各所で見られる。

一つは鋸屋根の工場形態である。工場敷地の南西側の道路沿いに 8 連の鋸屋根工場とそれに続いて別棟の 2 連の鋸屋根工場（いずれも南東側に窓）、北西側の道路沿いに 4 連の別の鋸屋根工場（北西側に窓）、これに隣接して直行する形に、北東側の工場敷地内に建つ 6 連の鋸屋根工場（北東側に窓）の、計 4 棟の鋸屋根工場が現役工場として使われている。また北西側の新工場建設によって、大部分が壊された 5 連の鋸屋根工場の一部もわずかに残されている。鋸屋根には全て屋根部分に窓を持つが、これは明かり取りを主な目的として造られている。

いずれの鋸屋根工場も木造であるが、南西側の 8 連と 2 連の鋸屋根工場の、道路に面した壁面部分は全面、耐火製のボードのようなもので施されている。屋根は南西側の 8 連と北西側の 4 連の鋸屋根工場は、当初施工と思われるセメント瓦が用



写真2 タケヤリの鋸屋根の工場  
(2018. 3. 9 筆者撮影)

いられ、あとの2棟はスレート屋根となっている。

武鍬澄治相談役によれば、鋸屋根工場の多くは1955（昭和30）年頃に建築のもので、なかには大正時代建築の建物もあるという。ただしどれが何年に建築かは分からない、資料も残っていないとのことである。しかしこれだけ多くの鋸屋根工場を持つところは、当地では珍しいと思われ、また現役の工場建物である点からも、希少な歴史的工場として位置づけられよう。

工場内には、かつてのボイラー用の鉄筋コンクリート製の煙突もある。ただし上部は切り取られている。工場内には一部に赤煉瓦の壁もある。火気を扱ったときの設備のようであるが、用途、建築年代は不詳である。煉瓦の簡易実測では5つほどの平均で210×103×64mm、目地は平均で約9mmである。煉瓦の大きさは現在のJIS規格の210×100×60mmに近い大きさである。この大きさに落ち着くのは1940年代であること、またこの煉瓦壁は工場建物の壁際に後付けされて造られていることから、1940年代前後か、これ以降のものと推測される。

機械設備のうちではやはりシャトル織機に目が行く。しかもベルギーのピカノール社製の、今では稼働自体が珍しい織機である。設置年も同社の資料によれば、重布用の8台が1968（昭和43）年12月、中軽布用の18台が2年後の1970（昭和45）年10月<sup>(52)</sup>である。すでに設置してから50年を経過する歴史的機械に位置づけられる機械群である。しかも全てが同社の主要設備となる現役機

械であるところに歴史的意義を持っている。しかし課題も聞く。すでにピカノール製の織機はベルギーでは生産停止をしており、修理では苦勞も多いと聞く。ストックしている同種の機械からの部品取りで修理するしかないとのことである。

以上のように、歴史的な鋸屋根工場とともに、今では歴史的機械となるピカノール製のシャトル織機を持つ、他に例のない帆布工場である。地元でも帆布発祥の工場として顕彰されているように、産業遺産の観点からも極めて希少な存在といえよう。同時に稼働遺産として位置づけられる工場でもある。

## （2）丸進工業株式会社（倉敷市曾原）

### 1）丸進工業の歴史

丸進工業の創業は1933（昭和8）年である。この時は、児島郡で帆布生産が盛んになり始めた頃であり、タケヤリの創業者武鍬石五郎の三男武鍬進衛が現在のタケヤリから分かれて、タケヤリに隣接して工場を設立する。丸進の会社名は進衛の進を採って命名している。

丸進工業の前身となるタケヤリでは、この少し前に、前節でも述べたように、1932（昭和7）年12月末調査の『全国工場通覧』（1934年9月刊）に、現タケヤリの武鍬織布工場と、武鍬呼称織布第一工場、同第二工場を持って、帆布の本格操業を始めている。ところがこの3社ともに代表者として武鍬進衛の名が掲載されている<sup>(53)</sup>。両社の沿革には記されていないところであるが、一時的に進衛が代表者になっていたのかもしれない。いずれにしても進衛は、この直後にタケヤリとは別会社となる丸進工業を立ち上げる。

したがって、丸進工業は、創業時から帆布生産に精通した創業者のもとで事業が開始されることになる。武鍬篤志現社長によれば、当初はシャトル織機10台ほどで始めたという。

そして間もなく戦時体制に巻き込まれ、軍需工場として通信機器の製造を行うことになる。この最中の1944（昭和19）年に丸進工業株式会社として設立し、代表者に武鍬進衛が就いている。

戦後は、すぐに帆布生産を再開し、帆布の他、地下足袋のアップパー部分や、ズックと呼ばれた運動靴用の帆布を手がけていた。



1965（昭和 40）年頃からシキボウから綿糸を仕入れ、帆布や雑嚢袋用の帆布生地を納品した。第 1 次石油ショックの 1972（昭和 47）年頃から大和紡の綿糸を仕入れる、大和紡の指定工場となる。現在も全体の 2 割ほどは大和紡の糸を使用とのことである。ほか 8 割ほどの糸は輸入糸（インド綿、パキスタン綿、米綿）及び泉州ほか国産の別の紡績会社などから仕入れている。輸入、国産の割合は、今は約半々だが次第に輸入糸が増えているという。

2003（平成 15）年には、丸進工業、タケヤリ、タケヤリ帆布協同組合の出資により、帆布の企画、販売会社として（株）バイストンを設立し、同社代表に丸進工業の現社長武鍬篤志が就任する。そして、この 3 社（現在は丸進工業とタケヤリの 2 社）で織った帆布が「倉敷帆布」として商標登録され、今日に至っている。

## 2）丸進工業の工場設備と帆布生産の現状

現在、丸進工業では、糸を仕入れてから、帆布として出荷するまでの全工程を社内で行っている。

まず仕入れる糸については、丸進工業では綿帆布を主体にしていることから、全体の 9 割ほどが綿糸、残り 1 割ほどを化繊や麻などとしている。

綿糸もリング糸と呼ばれるリング精紡機によって作られる糸を主に用いている。もう一つ帆布には、出来上がった帆布の手触り感がなめらかと言われる空紡糸も使われるが、丸進工業では伝統のリング糸を使った帆布に拘っている。

最初の工程は、合糸と撚糸である。例えば 6 号帆布では、経糸、緯糸とも合糸機で 4 本を合わせ、次いで撚糸機に掛けて撚り掛けを行う。この撚糸機では、現在は最新のダブルツイスターと呼ばれる機械で行っている。同社には、5 台で計 492 錘が設備されている。

なお丸進工業では、20 年近く前の二交代制を採っていた時代までは、この合糸と撚糸は外注に出していたが、二交代を辞めてから自社で行うようにしたとのことである。

次の経糸を準備する整経工程では、3 台の大型の整経機を用いて行う。経糸の本数は、例えば 6 号帆布の場合、1 インチ（約 2.54mm）当たりの密度が JIS では 32～36 本であるので、織り幅 38 イ



写真 3 丸進工業の整経工場（鋸屋根工場）  
（2019. 2. 28 筆者撮影）

ンチ（96.5cm）では、計算上は 1216～1368 本となる。実際には縮み代などを見て多めに入れている。経糸の長さは綿帆布の 1 反分となる 50m に作るが、こちらも縮み代を見て少し長めの 53m ほどにして準備する。

整経した糸は織機に取り付けるビームと呼ばれる装置に巻き取っておく。これを新規に織機に掛ける場合は経通しに回す。

次が織布である。丸進工業では綿帆布は全てシャトル織機で織っている。遠州阪本製の自動織機を 60 台設備し、現在は 58 台を稼働させている。厚手の重布用と薄めの軽布用とに分けて使っている。織り方はここも全て平織りである。

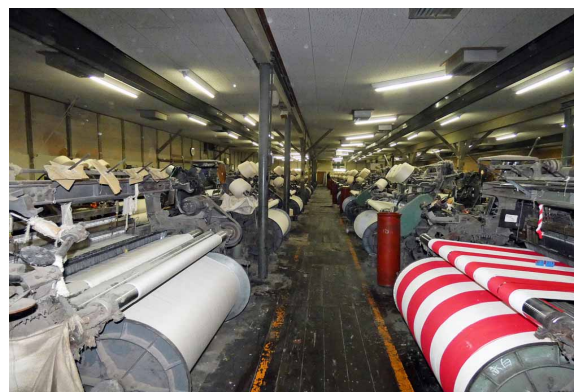


写真 4 丸進工業のシャトル織機  
（2019. 2. 28 筆者撮影）

1970 年頃に現在の自動織機に更新し、今は 58 台を 3 人の女性従業員で担当している。以前の動力織機の時代には、1 人 4 台持ちが限度であったが、自動織機に替え省力化につながった。ほかに



織付けと呼ばれる経糸の準備を含む、機械の保全作業に男性従業員3人が配置されている。稼働する機械では常に修理も必要となるための配置である。

シャトル織機を使う織布工場では、近年は大体どこも同じであるが、国内でシャトル織機を製造しているところがなくなり、修理も自前で行うしかない状況である。丸進工業でもそのために、部品交換用として5、6台の使われなくなった阪本式織機を社内にストックしている。必要不可欠の対応である。

そして検反、畳み機にかけて仕上がりとなる。

丸進工業での主な生産品は、綿帆布の6号から11号で、中でも6号と9号をメインにしている。汎用のものでは今も11号が広く使われている。織り幅の定番は38インチ(96.5cm)幅であるが、注文に応じて92~130cm幅のものまで各種を織っている。

かつての丸進工業では、9号から11号の帆布の需要が多く、とくに11号は製織時間が長いため外注に出すことが多かった。今ではこれらを含め全てを社内で行っている。1日の帆布生産量は、8号帆布を例にすれば、大体1日1台1反半ほどという。

販路は全国に出回っているとのことだが、自前で倉敷頒布の商標で販売も行っている。染めは関西方面に出し、縫製は兵庫県や東京にも出している。現在国産もので市場に出回っている綿帆布の多く(約7割)は同社を含めた倉敷帆布とのことである。

### 3) 丸進工業の産業遺産

1933(昭和8)年の創業の丸進工業には、同社の武鑑篤志社長によれば、工場は順次建て増しをしていったが、創業時に建てた建物が残っているようだという。詳しくは社内にも資料がなく不詳だが、そのうちの一つが鋸屋根の工場と思われる。同社敷地の南東側に5連の鋸屋根(南東側に窓)、その北東側に隣接して3連(北西側に窓)と2連(南東側に窓)の鋸屋根が続き、敷地中央付近に3連の鋸屋根(南東側に窓)の、計4棟が現役工場として使われている。窓は明かり取りとして南東側に設置したようだが、北西側に窓がある鋸屋

根では、おそらく検反工場用に柔らかな光が差し込むよう配慮されたものと思われる。当地に残る現役の歴史的工場建物といえよう。



写真5 丸進工業の鋸屋根工場(検反と畳み機の工程)(2019.2.28 筆者撮影)

機械設備のうちでは、1970年頃に更新した遠州阪本式のシャトル織機が、同社にとって唯一かつメインの織機である。中には更新された織機もあるであろうが、その多くが50年近く使われ続ける歴史的機械でもある。綿帆布用の希少な国産織機として位置づけることができよう。

丸進工業もこうした現役の産業遺産を持つ、稼働遺産として位置づけられる工場である。

### (3) 日真産業株式会社(倉敷市木見)

日真産業の創業は1949(昭和24)年頃で、タケヤリの下請け工場として、帆布の賃織りをしていたところである。一方で、綿番手の30番や40番の細糸を使った衣料用の織物も作っていた。いつから帆布生産をしていたかは不詳だが、1966(昭和41)年にタケヤリ帆布協同組合(今は解散)ができたときは、ここに入り、組合に所属する20数社とともに共同受注していたようである。

同社が株式会社として独立したのは、1970(昭和45)年である。

現在同社では、シャトル織機32台を設備し、綿帆布を中心に生産している。このうち阪本式が22台、豊田自動織機製の同社ではナインと呼ばれる、GU9型と思われるコップチェンジの織機が10台である。GU9型であれば1979~85年の製作<sup>(54)</sup>であるから、この頃かこれ以後の設置となろう。いずれも自動織機である。



写真6 日真産業のシャトル織機  
(2019.3.1 筆者撮影)

日真産業では綿帆布だけでなく各種の製品を作っている。その割合は、綿帆布が約6割、ポリエステルと綿の混紡糸の帆布が約3割、帆布以外の各種製品が約1割である。綿帆布でも2種の綿糸を使い分けている。すなわち、空紡機の機械の名前から採った綿BD糸と呼ばれる空紡糸が、綿帆布6割のうちの4割強、リング糸と呼ばれる綿糸が2割弱である。空紡糸の方が手触り感がなめらかなので、そちらの需要が大きいという。

綿のリング糸は、9号から11号の3種の綿帆布用に使い、綿BD糸は6号及び、8号から11号の4種の綿帆布に使用している。いずれも綿番手の10番の糸を号数に合わせて合糸と撚糸を行い使用している。

原料の綿は、リング糸はパキスタン綿を商社から輸入したものを使い、綿BD糸は大阪泉南の紡績会社から購入。合糸と撚糸は同社近くの撚糸工場3社に依頼している。同社のある木見地区は、かつては撚糸産業が盛んだったところで、今もその名残を示す撚糸工場が点在している。

製織する綿帆布の幅は、36インチ(91.5cm)、38インチ(96.5cm)、47インチ(119.5cm)の3種類である。このうち、同社では9割が38インチ幅、1割が47インチ幅である。また36インチ幅を主に各種のものを、近くの織布工場に外注している。その外注工場でもシャトル織機15台ほどを設備しているという。

なお、日真産業及びこの外注工場で作られた帆布は、倉敷帆布の商標は使っていない。出来上がった帆布は全て商社を通して販売とのことである。

## 5. 倉敷の帆布と日本遺産

「一輪の綿花から始まる倉敷物語」として倉敷市が2017(平成17)年4月28日に、日本遺産として認定された。副題に、和と洋が織りなす繊維のまち、とあるように、歴史的にも繊維で発展してきた倉敷の特徴を浮き出させた認定といえよう。具体的には、本稿冒頭でも概略触れたように、江戸時代の真田紐や小倉織に始まり、明治期の足袋生産、昭和初期から始まる学生服や作業服、そして高度経済成長期に国産最初のジーンズが生産されるなど、倉敷が繊維を中心に発展してきた流れがよく分かる。

帆布もこうした中の大正初期に倉敷での生産が始まる。わずか2工場での生産からであったが、昭和の時代になると、現倉敷市となる旧児島郡を中心に帆布工場が増え、この地は帆布の町として発展するようになる。しかし倉敷の帆布が全国的に知られるようになるのは、しばらく時を置いてからであった。

それはどの製品もそうであるが、身近な最終製品として使われることによって、意識されるようになるのだが、それまでの帆布は、初期の帆掛け船の帆、体育館用のマット地、かつてよく使われた酒屋の酒瓶の袋や酒造りの搾り袋、トラックの幌、工具袋など、どちらかというと言業用の用途に多用されていたことから、帆布としてそれを認識することは稀であったと思われる。

その点では、2003(平成15)年に「倉敷帆布」を商標登録して全国展開した意味は大きいと思われる。お洒落なバッグ、カバン、トートバッグ、帽子、エプロン、買い物袋など、いずれも身近な商品として使われることによって、素材としての帆布に関心が集まり、帆布として意識されるようになってきたと思われる。

しかし日本遺産申請時の構成文化財の位置図に、帆布生産の中心地域である旧郷内地域が記されていない<sup>(55)</sup>。撚糸を含め、帆布生産が全国の7割も占めるこの地域が入っていないことは、寂しい限りである。

日本遺産の認定は、帆布のさらなる認識醸成にも追い風になるであろう。むしろそれを後押しする役割を持つことも必要であろう。その期待は大きいと思われる。



写真7 倉敷帆布の商品（倉敷の「バーストン」）  
(2019.3.1 筆者撮影)

## 6. おわりに

筆者が倉敷の帆布調査に関わってまだ極めて日の浅い段階であったが、2018年3月と2019年2月から3月と2度にわたって、本稿で述べた倉敷で稼働する3社の帆布工場を調査する機会に恵まれた。下請けの1社を除くこの3社のみが倉敷で帆布を生産する工場であることを知り、その点では短時間ではあったが、これらの全てで調査できたことは幸いなことであった。調査に当たって協力いただいた3社の特別の厚意に感謝するところである。

この調査を通じて、3社の帆布工場のある旧児島地区をざっと巡ることができたが、その中で、新たにここが帆布だけでなく撚糸工場が林立する一大産地であったことも知ることになった。撚糸工場は帆布生産には欠かせない工程となる重要な工場であるが、その存在は最終製品を作るところでないだけに、余り表に出てこない工場でもある。しかし今もその撚糸工場が何カ所か連綿として続いているようである。帆布工場に合わせて撚糸工場の調査も不可欠の課題と感じたところである。

最後となったが、今調査では多くの方にお世話になった。順不同であるがお名前を記して感謝の意としたい。武鍬澄治株式会社タケヤリの相談役、枝松まな美氏、武鍬篤志丸進工業株式会社代表取締役、藤本豊子日真産業株式会社代表取締役をはじめとするみなさまには格別のご協力と種々のご教授を頂いた。あらためて御礼を申し上げます。

注

- 1) 『備前織物の今昔』 備前織物同業組合、大正8年3月、1頁。
- 2) 富澤修身「倉敷市児島地区アパレル産地の分析」『経営研究』48巻3号(1997年11月)、21頁。
- 3) 多和田彦『児島産業史の研究』児島の歴史刊行会、1959年11月、219～220頁には、大正3、4年頃には岡山県下で460の足袋製造業者が数えられ、その大部分は児島郡一円に存在とある。及び、前掲「倉敷市児島地区アパレル産地の分析」27頁。
- 4) 『岡山県の繊維産業』岡山県産業労働部産業振興課、2011年2月、3頁。及び、中島茂「岡山県児島地方の繊維産業と地域経済-学生服生産を中心として-」『山陽論叢』14巻、2007年、11～13頁。
- 5) 井上近子「倉敷市児島地区における地域産業に関する研究-ジーンズ産業を中心として-」『目白大学短期大学部研究紀要』50号、2014年2月、70頁。
- 6) 前掲、「岡山県児島地方の繊維産業と地域経済-学生服生産を中心として-」5頁。
- 7) 前掲、『備前織物の今昔』40頁。
- 8) 魚谷勝『帆布の今昔』関西重布会、1977年11月、5～6頁。
- 9) 前掲、『帆布の今昔』11頁。なお、かごしまデジタルミュージアムの田上水車館機職場所跡 (<http://kagoshima.digital-museum.jp/>、2019年3月3日検索) には、1台の水車で4台の織機を動かし1867年まで約10年間続くとある。
- 10) 薩摩のものづくり研究会『薩摩藩集成館事業における反射炉・建築・水車動力・工作機械・紡績技術の総合的研究』2004年3月、96～97頁。
- 11) 1日1台10反の織上げには疑問がある。石井正『近代日本の技術と技術政策』(1986年)によれば、力織機の性能は1日10時間として3反から5反の織立てとあり、当時は織子1人につき2、3台受持っていたから織子1人あたりの生産は平均1日9反前後といわれる。したがって幕末期の木製織機と織り速度の遅い水車動力の時代では、太糸使用と織り密度の薄い織物としても、1台10時間作業の場合、多く見ても2～3反程度と思われる。おそらく4台設置されたという織機すべてを合わせて1日10反、の誤りとも思われる。
- 12) 前掲、『帆布の今昔』16～19頁。
- 13) 前掲、『帆布の今昔』24頁。



- 14) 前掲、『帆布の今昔』24～48 頁。
- 15) 『工場通覧 I』(明治 35 年 12 月末調査、明治 37 年 3 月刊)』(農商務省商工局工務課編纂『全国工場通覧』明治 37 年 3 月 31 日の復刻) 柏書房、1986 年 1 月、89～124 頁。
- 16) 前掲『工場通覧 II』(明治 37 年 12 月末調査、明治 39 年 12 月刊)、98～143 頁。
- 17) 前掲『工場通覧 III』(明治 40 年 12 月末調査、明治 42 年 5 月刊)、46～82 頁。
- 18) 前掲『工場通覧 V』(大正 5 年 12 月末調査、大正 7 年 11 月刊)』61～116 頁。
- 19) 前掲『工場通覧 VII』(大正 8 年 1 月末調査、大正 9 年 12 月刊)』67～133 頁。
- 20) 前掲『工場通覧 VIII』(大正 9 年 1 月末調査、大正 10 年 1 月刊)』133 頁。
- 21) 商工省編纂『全国工場通覧(昭和 6 年版)』(昭和 4 年 12 月末調査、昭和 6 年 9 月刊) 日刊工業新聞社、1931 年 9 月、157～161 頁。
- 22) 商工省編纂『全国工場通覧(昭和 9 年版)』(昭和 7 年 12 月末調査、昭和 9 年 9 月刊) 日刊工業新聞社、1934 年 9 月、142～145 頁。
- 23) 「近江帆布の撤退」(「山陽新聞」昭和 9 年 8 月 21 日)『新修倉敷市史 第 12 巻 史料 近代(下)・現代』2001 年 3 月、653～654 頁。
- 24) 前田正義「近代における岡山県織物業の地域的構成」『倉敷の歴史』第 13 号、2003 年 3 月、41 頁。
- 25) 前掲『工場通覧 VI』(大正 6 年 12 月末調査、大正 8 年 10 月刊)、116 頁。
- 26) 前掲『工場通覧 VII』122 頁。
- 27) 前掲、『備前織物の今昔』40 頁。
- 28) 前掲、『備前織物の今昔』35～44 頁より計算。
- 29) 前掲、『備前織物の今昔』103 頁。
- 30) 前掲、『備前織物の今昔』103 頁。
- 31) 前掲、『備前織物の今昔』52～59 頁。
- 32) 前掲、『備前織物の今昔』35～44 頁より集計。
- 33) 前掲、「近代における岡山県織物業の地域的構成」、52 頁。
- 34) 前掲、『帆布の今昔』39～43 頁。
- 35) 「綿帆布」JIS(日本工業規格) L 3102-1957。
- 36) 綿番手とは、1 ポンド(約 454g) で長さ 840 ヤード(約 768m) を 1 番手とする。10 番手は、その 10 倍の長さ約 7680m で 1 ポンドの重さになるものを言う。綿番手では数字が大きくなるほど細番手となり、20 番手以下を太番手としている。
- 37) タケヤリの資料「綿帆布コンストラクション」(2018. 3. 9 同社提供) 及び、丸進工業の資料「サイズ資料」(<http://hanpu-ya.com/pg63.html>) (2019. 2. 27 検索) より。
- 38) 倉敷が全国の 7 割を占める帆布生産については、2019 年 2 月 28 日に丸進工業の武鍵篤志社長より、国内で帆布生産をするメーカーのシャトル織機の設定台数から割り出した数字である、このことを伺う。
- 39) (株)タケヤリのパンフレットより (2018. 3. 9 同社提供)。
- 40) 前掲『工場通覧 IV』(明治 42 年 12 月末調査、明治 44 年 7 月刊)』191 頁。
- 41) 前掲『工場通覧 V』109 頁。
- 42) 前掲『工場通覧 VII』122 頁。
- 43) 前掲、『備前織物の今昔』52～59 頁。
- 44) 前掲、『備前織物の今昔』108 頁。
- 45) 前掲、『児島産業史の研究』112～113 頁。
- 46) 前掲、『全国工場通覧(昭和 6 年版)』161 頁。
- 47) <https://www.kurashikihampu.co.jp/corporate-history>、倉敷帆布、沿革 (2019. 1. 30 検索)
- 48) 前掲、『全国工場通覧(昭和 9 年版)』143 頁。
- 49) 角田直一『児島機業と児島商人』児島青年会議所、1975 年 8 月、287 頁。
- 50) (株)タケヤリ相談役の武鍵澄治より (2019. 3. 1 調査)。
- 51) (株)タケヤリのパンフレットより (2019. 3. 1 同社提供)。
- 52) (株)タケヤリのパンフレットより (2018. 3. 9 同社提供)。
- 53) 前掲、『全国工場通覧(昭和 9 年版)』143 頁。
- 54) トヨタ産業技術記念館より教示。
- 55) [http://www.bunka.go.jp/seisaku/bunkazai/nihon\\_isan/pdf/nihon\\_isan49.pdf](http://www.bunka.go.jp/seisaku/bunkazai/nihon_isan/pdf/nihon_isan49.pdf) (2019. 3. 3 検索)

## 倉敷市児島地区における繊維産業発展の概要

唐澤克樹(倉敷市立短期大学)

はじめに

本稿では、倉敷市における繊維産業が発展した背景について、主に児島地区<sup>1)</sup>(以下、児島)に焦点をあて、年代ごと<sup>2)</sup>に考察する。

### 1. 1600年代以前(～江戸時代前期頃)

日本における綿の歴史は諸説あるが、麻や絹に比べて保温や吸湿が優れているなどの理由から、おおよそ1500年代～1600年代にかけて日本国内で栽培が始まり、人々の間に普及したとされている。倉敷市内においても、おおよそ1600年代に入ってから綿の栽培が始まったとされている。綿の栽培が始まった背景についてみていこう。

#### (1) 綿栽培のはじまり

現在の倉敷市をはじめとした岡山県南部地方は、吉備の穴といわれる浅海があり、そこに島々が点在していた。1600年代以降になると、その島々は干拓によって陸地で結ばれるように新田が開発された。とりわけ、現在の玉島地区(以下、玉島)や児島には広大な新田が開発された。しかし新田は、多量の塩気を含んでいる上に、砂目が荒く乾燥しており、稲作には不向きな土壌であった。そこで、塩気に強い綿が栽培されるようになった。当時、原則として綿やイ草などの栽培は許されなかった。しかし、新田では綿などを栽培することが許可されていた。農民は還元率が高いこともあって綿を栽培するようになった。この時期の綿が人々に普及していく時代であり、綿の栽培は時代の要求に応えるとともに、農民にとっての貴重な収益源となっていた。

#### (2) 綿と北前船

とりわけ、玉島や児島は、土壌が綿の栽培に適していたことに加えて、北前船の寄港地である玉島港(玉島)や下津井港(児島)が綿の出荷を担った。北前船は、北海道でニシンやコンブなどを積み込み、船団を組んで日本海沿岸の各地に寄港しながら西へ横断した後、瀬戸内海に入り、玉島港や下津井港に寄港した。北前船は、綿の出荷を

担う一方、ニシン粕(ニシンを原料とした肥料)を受け入れた。ニシン粕は、船から陸揚げされニシン蔵に運ばれた後、周辺地域で販売された。この時期、ニシン粕は綿花を栽培するために必要な肥料として重宝されたのである。そうしたこともあって、港周辺の街には問屋、金融業者、飲食店などが集積していった。問屋などは富を蓄積し、虫籠窓(むしこまど)やなまこ壁など特徴的な母屋や蔵などを建築した。また、街全体は人で賑わい活況を呈していた。

現在でも、玉島や下津井の街には、虫籠窓やなまこ壁など特徴的な建築物が残されており、当時の面影を知ることができる。なお、下津井は1986年に、玉島は1995年に、それぞれ岡山県の町並み保存地区に指定されている。また、日本遺産「一輪の綿花から始まる倉敷物語～和と洋が織りなす繊維のまち～」(2017年4月28日認定)ならびに日本遺産「荒波を越えた男たちの夢が紡いだ異空間」(2018年5月24日追加認定)において、下津井町並み保存地区、下津井節(北前船の船頭によって広まったとされる民謡)、むかし下津井回船問屋(回船問屋の建物を復元した資料館)、玉島の町並み保存地区、旧柚木家住宅(西爽亭)(北前船主であった柚木家の邸宅、国登録有形文化財)は、構成文化財として認定されている。

### 2. 1700年代(江戸時代中期頃)

1700年代になると、児島では栽培された綿花を原料とした細巾織物が生産されるようになる。現代の定義に準ずれば、細巾織物とは、「主として綿糸、絹糸、麻糸、レーヨン、スフ糸、合成繊維糸などで幅13.0cm未満<sup>3)</sup>」の織物のことを示し、畳縁、真田紐などがそれに該当する。児島で細巾織物が、どのように生まれ発展したのかみていこう。また、その後に発達した広巾織物の発展についてもみていこう。

#### (1) 機業の発展

敷物新聞社 編『敷物年鑑(1958年版)』によれば、「細巾織物の起源は古く、寛政の頃(筆者注:1789年～1801年)と伝えられており、本県繊維工業(筆者注:岡山県)のうちにあつて最も古い歴史を有するもので、機業地として発展した児島地

方における織物の草分けである<sup>4)</sup>」と述べている。この時期、瑜伽大権現（由加山）は金比羅宮（香川県の金比羅山）とともに有名であり、とりわけ瑜伽大権現と金比羅宮を両参りすることは御利益があるとされていた。それもあって、瑜伽大権現には多くの参拝者が訪れた。児島地区における細巾織物は、参道で袋織五分巾の襟用や前掛用の紐を並べて販売したことが起源であるとされている。

その後、1789年に田之口で眞田紐（眞田織）の製造が始まる。眞田織とは、太い木綿糸を平織りにしたものである。強度があるため帯、紐、羽織の紐、下駄の鼻緒として活用された。眞田紐が製造され始めたのとほぼ同じ時期には、袴地、小倉帯（小倉織）、雲斎織の製造も開始されたといわれている。小倉（こくら）織とは、九州の小倉地方で生まれた厚手の織物である。強度があるため袴地、帯、下駄の鼻緒として活用された。また、後には軍服や学生服にも活用された。雲斎織とは、地の荒い布である。強度があるため、足袋底として用いられた。眞田紐、袴地、小倉帯、雲斎織は、1798年頃になると、田之口だけでなく上村や小川村でも製造されるようになっていく。

## （2）瑜伽大権現と機業

こうして機業が発展することができた背景には、瑜伽大権現の存在がある。瑜伽大権現は、江戸時代が終わる頃まで、神仏混淆の備前で最も大きな霊地であった。その歴史は諸説あるが、700年代～800年代にかけて誕生したといわれている。先述したように、1700年代の瑜伽大権現は、多くの参拝者が訪れる場であり、参道には門前町が形成され、料理店、旅館、土産物店などが立地し、多くの人で賑わっていた。そこで土産物として販売された眞田紐や小倉帯などは、『綺麗で強くて安価』の声価を得て、備前の特産物の雄となった<sup>5)</sup>。

街の賑わい創りや眞田紐などの販売は、瑜伽大権現の存在が大きかったと言えるだろう。これに加えて、瑜伽大権現は眞田紐などの製造においても大きな役割を担っていた。瑜伽大権現が位置する由加山は水源であった。由加山の麓に位置する集落は、由加水系の水で水車を動かし、その動力で撚糸を作る撚糸業を発達させた。そして、その撚糸は織物を生産する者へと供給されたのである。角田直一氏は、由加山と児島の機業の関係を以下

のように指摘している。

「いわゆる『児島機業地』は由加山をとりかこむ周囲の村々で構成された。北から彦崎、川張、片岡、宗津、迫川、宇藤木、用吉、小島地、長尾、木目、広岡、引綱、田ノ口、白尾、下村、上村、小川、味野、赤崎、柳田、稗田、塩生、宇野津、串田、木見、尾原などの村々である。児島機業地は彦崎—宇野津を結ぶ線より南、由加山を円の中心とする麓の村々に展開された。商売繁昌の神様である由加大権現の御利益が四周にふりそそいだ感である。<sup>6)</sup>」

このように、児島の機業は瑜伽大権現とともに発展したといっても過言ではない。しかし、瑜伽大権現は、1872年に明治政府によって政策的に蓮台寺と由加神社に分離され、現在に至っている。なお、日本遺産「一輪の綿花から始まる倉敷物語～和と洋が織りなす繊維のまち～」(2017年4月28日認定)において、由加神社本殿は構成文化財として認定されている。

## 3. 1800年代（江戸時代後期頃）

1800年代は、綿栽培の耕地拡大や眞田紐などの生産量が拡大した時期である。この時期に、どのような要因で生産量が増大したのかみていこう。

### （1）高機の導入と生産量の増加

1800年代になると、妹尾、興除、早島など児島地区周辺部においても綿栽培が盛んになる<sup>7)</sup>。児島は、これら周辺地域からも綿を受け入れやすい立地にあった。他方、児島の綿栽培は時代とともに地主層（土地をたくさん持った層）、小百姓（土地を持たない層）、小作人（農地を借りる層）といった階層化が進行した。かねてより児島は耕地面積に対する労働力が豊富であった。そのため、余剰となった労働力は、塩田の浜子（塩田で働く労働者）として従事した。その他に余剰となった多くの労働力は、糸の生産や眞田紐など細巾織物の生産に従事するようになり、これらは次第に農家の副業となっていく。また、1800年代初頭になると、京都西陣などから技術を学び、高機（たかばた）が導入された。高機はそれまで使用されてきた地機（じばた）と比べて生産能力が高く、児



島地区では 1800 年代初頭から中頃にかけて急速に普及し、生産量も増大した。

#### (2) 岡山藩による御触書

角田直一氏は、江戸時代後期頃における児島の機業を、①自分で高機を所有して家族労働力を活用して家族労働力だけで自分の原料をもって生産する「独立家内工業型」、②有力な織元が農民達に高機や原料を貸し与えて製品はすべて織元がとって賃金を与える「問屋制家内工業型(出し機型)」、③自分で作業場をもち多くの下人(身分が低い人)を雇用して分業的に生産させる「工場制手工業型」といった 3 タイプに分類している。この時期になると、問屋制家内工業や工場制手工業といった生産形態が登場してくることがわかる。

こうした状況に対して岡山藩は、1841 年と 1842 年の 2 回にわたって下記の御触書（藩主が民衆に向けて公布した公文書）を出したとされる。

「近年村々に小倉真田を多く織り、百姓仕事をおろそかにするようになり、作方にさしつかえもできたため、先だってもお触も出したが、心得ちがいのものが出て、なお小倉を仕入れ賃織出機などしているという。そこで、農業のかたわらおこなうものは、一家一機は勝手次第にし、家内で手間の多いものは二機、他家へ出機することは差留める。したがって賃織してはいけない。たとえ前々から下男下女にさせていたものでも、小倉真田織のための召抱はしてはいけない、また機織奉公や日雇に出てはいけない<sup>8)</sup>。」

しかし、禁止を命じたにも関わらず、特段の効果はなく児島の機業は発展していった。そして 1850 年代になると、岡山藩はついに真田紐や袴地などを「池田家御物産」として大阪などで販売するようになった。この時期における児島の機業は、藩も押さえることができないほど勢いがあつたとみることができよう。

### 3. 1800 年代（明治時代）<sup>10)</sup>

1868 年の明治維新は、人々の生活や文化を変化させた。この時期に、児島をはじめとした倉敷市内でも産業にさまざまな変化が生じた。明治時代

における産業の変化をみていこう。

#### (1) 足袋の生産

江戸時代が終わり明治時代になると、瑜伽大権現の参拝者が減少し、真田紐や小倉帯などの需要も減少していく。児島の人々は、これらの販路を県外へ拡大するとともに、足袋を生産するようになった。1870 年代頃（明治初期）に児島で生産されていた足袋は、津山足袋という小鉤（こはぜ）がない紐付きの足袋であった。この足袋は、上村池尻（現・上の町）をはじめ、田の口、小川、赤崎などでも生産されていた。特に、上村池尻地区は足袋屋が軒を連ねており、そこで多くの足袋が製造されていた。また、上村に隣接する稗田村には足袋に関連する雲斎織の工場や染色場などが立地するようになった。製造された足袋は、作州や九州で販売された。しかし、この足袋は技術的には未熟であったといわれている。そこで、児島の人々は埼玉県忍町行田（現・埼玉県行田市）や長野県松本市などから生産技術や材質を学び取り、徐々に優れた足袋を製造するようになった<sup>9)</sup>。また、1893 年になると、足袋の製造に手回しミシンが用いられるようになり、技術のみならず製造方法も発展していく。

#### (2) 韓人紐や腿帶子の生産と海外進出

明治維新以降、文化や服装の変化によって真田紐などの生産は落ち込み、足袋の生産が開始された。他方、1890 年頃から真田紐などで培った技術は、韓人紐にも応用されるようになった。韓人紐とは、朝鮮半島で使用される腰紐や足紐のことである。その生産や輸出に着目したのが与田銀次郎であった。与田銀次郎は、1890 年に釜山を訪問した際に人々の服装を見て韓人紐の販売を思いついたという。そして、日露戦争（1894 年～1895 年）の頃になると、児島で韓人紐の生産し、朝鮮へ輸出するようになった。その後の日露戦争（1904 年～1905 年）によって朝鮮戦争の支配権を得たことも影響し、韓人紐の生産は増加した。

与田銀次郎は、朝鮮半島で韓人紐を販売したことを契機に、大連を拠点に満州で腿帶子（たいたい）の販売を行うようになる。腿帶子（「満州真田」と表現することもある）とは、中国人向けの袴の裾を縛る足帯のことである。当時の中国国内で販売されていた腿帶子と比べて丈夫だったこと

もあって、生産量は増加した。そのため、販路を大連から上海や漢口へと拡大した。一方、韓人紐はほぼ独占していたが、腿帶子は同じ児島から他の事業者が参入し競争となった。しかし、1910年頃になると、服装の洋装化や反日感情の高まりなどによって低迷していく。

### (3) 殖産興業政策と紡績工場

明治時代は、政府によって殖産興業政策（産業資本を育成するための政策）が展開された時期である。政府は、欧米から産業技術を導入し、産業の近代化を図った。その先駆けとなったのが紡績工場の発展である。政府は、イギリスから二千錘の紡績機 10 基を購入し、それを無利息 10 年払いで民間へ払い下げた。

玉島では岡山第二十二銀行玉島支店長だった難波二郎三郎などが中心となって、1881年に玉島紡績を設立し、翌 1882 年から政府から払い下げた機械を活用し工場の操業を開始した。児島でも渾大防埃二（こんだいぼう あいじ）と渾大防益三郎（こんだいぼう ますさぶろう）の兄弟などによって、1880年に下村紡績を設立し、1882年から政府から払い下げた機械を活用し工場の操業を開始した。また、1888年には倉敷地区（以下、倉敷）で、大原孝四郎ら地主たちが中心となり、倉敷紡績が設立される。翌 1889年には、イギリスから購入した紡績機を活用した工場が操業を開始した。その他にも、1895年には敷島紡績が、1896年には味野紡績が設立され、それぞれ操業を開始した。

このように、1800年代になると政府による殖産興業政策や民間による動きが活発となり、倉敷市内では紡績工場が誕生していった。

### (4) 錦莞莖

児島を中心に綿が栽培され、眞田紐などが発達したことは、先述した通りである。綿の栽培とほぼ同じ時期から栽培が始まったのが藺草（いぐさ）であった。藺草は、茶屋町や都窪郡早島町などで栽培され畳表が生産されるようになった。一方、茶屋町では磯崎眠亀によって 1878 年に錦花筵織機が開発され、錦莞莖（きんかんえん）が誕生する。錦莞莖とは、染色した藺草に麻や木綿を編み込んだ模様織物である。

### (5) 帆布の生産

1888年に、武鑑石五郎と梅によって児島の郷内

で帆布の生産が始まる。帆布とは、綿糸を何本も撚り合わせた糸を平織りにした織物である。生地が厚く強度があるため、船の帆などに活用されている。この時期の帆布は手織りであったが、その後、1900年代以降になると水力や電力を活用するようになる。

### 3. 1900年代～2000年代（大正時代～現在）

このように 1800 年代（明治時代）は、文化や産業が大きく変化する時代であった。その後 1900 年代になると、児島では現代においても身近な学生服、作業服、ジーンズなどが生産され始める。それらが生産され始めた背景と現状についてみていこう。

#### (1) 足袋の動力化

先述したように、足袋は行田市や松本市などから技術を学び優れた製品へと変化していった。また、足袋は児島のみならず、玉島、岡山市、総社市などでも生産されていた。もっとも、そのほとんどは 1870 年代の頃と同じく、上村池尻地区で生産されていた。足袋の製造は、手縫いから手動ミシンへと変化し、1900 年に入ると足踏ミシンへと変化していった。1906 年になると、この地区で足袋を製造していた松三曙が足袋製造において日本で初めて動力ミシン（シンガー社製 44-3）を導入する。この時期は足袋の需要が増加しており、手回しや足踏といった人力を要するミシンは生産量に限界があった。そのため、動力ミシンを導入する必要が生じていた。しかし、この時期はまだ電力が普及していない時代であった。それでも松三曙は、自ら通訳を引き連れて大阪にあるシンガー社の支店に赴き、直接交渉しミシンを購入した。

1916 年～1918 年の間、岡山県では年間約千万足の足袋が製造され、日本一の生産量を誇った。しかし、1920 年頃になると、人々の服装が和装から洋装へと変化したことや足袋製造業者の家内工業的な生産体制などの問題から生産量は徐々に減少していった。

#### (2) 学生服の生産

児島では足袋の生産量が減少したとはいえ、そこで培った厚手の生地を縫う技術や設備、労働力は学生服の生産へ受け継がれた。児島の企業家達は、足袋に代わる新たな製品として学生服に着目

するようになった。1900年代初頭（大正時代）の学生服は、都会など一部地域の恵まれた子どもが着用する贅沢な服であった<sup>11)</sup>。おおよそ1920年前後の頃に、児島の企業家達は、学生服を見て研究を重ね量産化させていった。なお、児島での学生服製造に関しては、後述する角南周吉が学生服を製造したことが起源とする見方が濃厚である<sup>12)</sup>。しかし、それについては諸説あることに留意する必要がある。本稿では、郷土史や社史などの研究をまとめた上で主な人物を紹介したい。

角南周吉は九州で学生服を見たのを機に、1918年に角南洋服裁縫実習所を作り、学生服の生産を開始した。また、1896年に家守喜平が児島で初めて民衆によって株を集めた織物会社「児島織物合資会社（通称：児島社）」は、1921年に霜降りの学生服の生産を開始する。その後の1924年には、動力ミシン40台を導入し、量産化を開始した。児島社から独立した西山改一は、武内熊一と共にテーラーでない学生服の製造を開始した。背板富士太郎は、兄の背板松太郎と共同で背板兄弟商会を設立し、1926年に学生服の製造を開始した。その他にも、この時期には尾崎東吾や森荒太郎など個人や小規模事業者が学生服の生産を開始した。その後の1920年代（昭和初期）になると、当時の大手事業者が学生服の生産を開始した。

このようにして、1918年以降、それまで足袋などを製造していた個人や企業の多くが学生服の製造へと転身していった。その理由は、先述したように技術や設備などに加えて、学生服の市場が確立されたこと、児島という地域の中で縫製や染色など一貫した生産体制を構築できたことが要因としてあげられる。

1945年までの間は、戦争による影響で学生服の生産に浮き沈みはあったが、戦後1950年代になると再び生産量が増加した。また、この時期になると、合成繊維が誕生して学生服の生地に変化が生じるようになる。これによって、生地の仕入れや製造方法が変化し、地域内の一貫生産は崩壊した。また、東レやクラレなど大手資本によって、いくつかの学生服メーカーは系列化された。生産量の増大は大量の労働力を必要としていた。児島では、組縫（くにゅう）といわれるメーカーごとに製造工程の一部を外注化するシステムが成り立

っていた。また、1950年代頃からは地域内だけで労働力を確保することができず、山陰や四国などから集団就職によって大量の女性労働力を確保していた。

### （3）ジーンズの生産

1960年代になると学生服の競争は激化し、市場から淘汰される企業も相次いだ。また、その頃から少しずつ学生服の需要も減少をしていった。

そこで、児島の企業家達は新しい市場としてアメリカで開発されたジーンズに着目するようになる。児島でのジーンズ製造に関しては、マルオ被服が起源とする見方がある。しかし、それについては諸説あることに留意する必要がある。

1960年代にマルオ被服（現・ビッグジョン）の尾崎小太郎は、アメリカで流行っていたジーンズが日本でも流行ると考え生産を開始した。学生服の製造などで培った厚手の生地を縫う技術があるものの、それ以上に分厚いジーンズを縫うことは困難であった。そのため、ミシンをジーンズのような厚手の生地でも縫えるよう改造した。そして、アメリカから輸入したデニムを縫製し、1965年に国内初のジーンズを生産した。これが「国産ジーンズ発祥の地 児島」といわれるゆえんである。当初は、「アメリカの中古品なんて、まともな学生服メーカーやファッションメーカーが作るものではない<sup>12)</sup>」としていた事業者もあった。しかし、ジーンズの市場が確立されたこともあり、学生服メーカーなどが相次いでジーンズを生産し始めるようになった。そして、1973年には生地などほぼ全ての原料を児島で生産したものを利用したジーンズが誕生する。洗い加工の分野でも、1982年にはストーン・ウォッシュ、1988年にはケミカル・ウォッシュなどの技術が進化していった。また、近年においてはレーザー加工による加工など新たな加工技術も生まれている。

ジーンズは、生産や販売において学生服とは異なる形態を取った。生産面では、原則として紡績→撚糸→染色→織布→洗い加工→縫製という垂直統合システムであった。ジーンズにおいても系列化は進んだが、ジーンズメーカーの主体性が生かされていた。これは当時、ジーンズメーカーが直営店を設置した販売網を確立したためである。

### （4）光輝畳縁の生産

足袋から学生服へと変化する 1900 年代初頭は、腿帯子など細巾織物から畳縁へ転業が増えた時期でもあった。畳縁とは、畳や花ござなどの側面を補強し装飾する役割をもった細巾織物である。児島では、1921 年頃に唐琴の松井武平が浜松から光輝縁の技術を学び、児島に取り入れたことが起源とされている。そのため、畳縁は唐琴に多く集積している。1955 年以降、岡山県の畳縁生産量は国内第 1 位となったが、ほとんどは児島唐琴地区で生産されている。

おわりに

倉敷市の繊維産業について、主に児島に焦点をあてながら年代ごとに見てきた。倉敷市に根付いた繊維産業は、気候、土壌、水、立地から自然発生的に生まれた産業であることがわかる。それが歴史の中で進化し、現代においも倉敷市の地域産業として根付いていることは興味深い事実である。また、児島の企業家達の先見性も着目すべき点である。他地域をモデルとしながら、常に時代を先読みし、児島独自の新しい製品を根付かせることで産業そして地域を発展させてきた。

現代においても、学生服、ジーンズ、畳縁などを製造する企業は、機能性やデザイン性に優れた製品を次々と開発している。そうした製品は、国内外から高い評価を得ている。また、児島ジーンズストリートのように地域の工業と商業が結びついた全国的にも珍しい取り組みも展開されている。児島を中心とした倉敷市の繊維産業は今後も進化し続けるであろう。

注

- 1) 本稿でいう児島地区とは、特段の断りが無い限り、2019 年時点における倉敷市児島地区のことを示す。同様に、倉敷地区などの他地区についても、2019 年時点における地区を示す。また、随所で地名が登場するが、その時代に用いられていた地名を用いることとする。
- 2) 年代は、おおよその区分である。これは、年代をまたぐ出来事や年月が特定できていない出来事もあるためである。
- 3) 細巾織物は細幅織物と明記することもある。定義は、日本標準産業分類(2013 年 10 月改定)に

基づく内容である。

- 4) 敷物新聞社 編 (1957) 『敷物年鑑 1958 年版』 畳糸・畳縁篇, p. 5。
- 5) 大谷壽文(2009) 『上の町 遠近』 p. 12。
- 6) 角田直一 『児島の日本一物語』 p. 22。地名は当時の名称であるが、現在は倉敷市児島もしくは岡山市南区に属する地域である。なお、瑜伽大権現は由加大権現と表記されることもある。
- 7) 妹尾と興除は現在の岡山市南区に位置し、早島は現在の都窪郡早島町に位置する。
- 8) 角田直一 『児島機業のうつりかわり』 p. 12。
- 9) 埼玉県行田市は、1700 年代初頭に足袋の生産が始まったといわれている。なお、行田足袋やそれらに関連する蔵などは、「和装文化の足元を支え続ける足袋蔵のまち行田」として、2017 年 4 月 28 日に日本遺産に認定されている。長野県松本市は、信州底というコール天の底地の産地であった。
- 10) ここでは、明治時代について触れていく。そのため、おおよそ 1912 年頃までのできごとをまとめる。
- 11) 学生服そのものの起源は明治時代であるといわれている。
- 12) 岡山県中小企業研修情報センター 『文化性豊かな児島繊維産業へのシステム研究』 pp. 22-23。

参考文献

- 明石被服興業株式会社 (2012) 『Akashi Hifuku Kogyo co., ltd』
- 大谷壽文 (2011) 『児島の歴史 彩彩』
- 角田直一 (1968) 『児島機業のうつりかわり』
- 角田直一 (1988) 『児島の日本一物語』 児島ライオンズクラブ
- 倉敷市史研究会 (2003) 『新修 倉敷市史 4 近世 (下)』 山陽新聞社
- 児島株式会社 (1992) 『ぼとぼとでええ』
- 児島商工会議所・児島産業振興センター 『児島の繊維産業発展の歴史』 (年表資料)
- 敷物新聞社 編 (1957) 『敷物年鑑 1958 年版』 敷物新聞社
- 十河直樹 (2004) 『倉敷市児島歴史年表史(改訂版)』
- 吉原睦 (2008) 『磯崎眠亀と錦菟菰』 日本文教出版

## 学生による繊維製品の調査研究

唐澤克樹(倉敷市立短期大学)  
井上実子(倉敷市立短期大学学生)  
渡部菜々子(倉敷市立短期大学学生)  
雑賀優衣(倉敷市立短期大学学生)  
木之下樹(倉敷市立短期大学学生)

### はじめに

本稿では、倉敷市立短期大学服飾美術学科ないし専攻科服飾美術専攻の学生達が倉敷市内の繊維に関連する企業や資料館などを訪問し、見学、ヒアリング調査、体験を通じて見聞きしたことを学生の視点から考察する。その上で、学生たちが見聞きした内容から、将来に関するいくつかの提言をしてみたい。

### 1. 繊維関連事業所数、従業者数、製品出荷額等

倉敷市内の繊維関連の事業所（企業の支店、工場、店舗等を含む）がどのくらいあるのだろうか。データを基に、倉敷市の繊維関連事業所の状況についてみていこう。

経済センサス（2014年）によれば、倉敷市内には1,284箇所の繊維関連事業所があり、そこでは10,879人が働いている（図表1）。倉敷市全体でみると、市内の民間事業所のうち6.8%は繊維関連事業所であり、市内の民間事業所で働く人のうち5.3%は繊維関連事業所で働いている。

工業統計（2016年）を手がかりに繊維工業（繊維物業、染色整理業など）の製造品出荷額等をみると、11,037,005円であることがわかる。倉敷市全体でみると、製品製造出荷額等の2.8%を占めており、伝統的な地域産業としての地位を築いている。

図表1 繊維関連事業所の数と従業者数

| 区分               | 事業所数  | 従業者    |
|------------------|-------|--------|
| A.繊維工業           | 540   | 6,799  |
| B.繊維・衣服等卸売業      | 93    | 626    |
| C.織物・衣服・身の回り品小売業 | 651   | 3,454  |
| 繊維関連事業所合計(A+B+C) | 1,284 | 10,879 |

（資料：総務省・経済産業省（2014）『経済センサス基礎調査』）

（出所：倉敷市（2018）『倉敷市統計書』より作成）

### 2. 倉敷市内における繊維関連の老舗企業

倉敷市の繊維産業は、江戸時代の綿栽培から始まり、真田紐、足袋、学生服、作業服、畳縁、ジーンズなどの製品を次々と生み出してきた。こうした長い歴史の中で、家内工業的な生産から問屋制手工業的な生産、そして工場制手工業的な生産へと変化してきた。このことを踏まえて、2018年時点において倉敷市内に本社を置く繊維関連の企業は、どのくらいの歴史があり、現在はどういう事業を営んでいるのか調べてみた。

調査方法は、①2018年時点において創業から80年以上経過した企業、②2018年時点で倉敷市内に本社・本店を置く企業、③繊維に関連した事業（繊維製品の製造や販売など）を営んでいる企業、の3点すべてに該当する企業を繊維関連の老舗企業と位置づけ、倉敷市資源ミュージアム（Webサイト）に掲載されている老舗企業、岡山企業年報（2018年版）に掲載されている企業から該当する抽出した<sup>1)</sup>。

図表2は、倉敷市における繊維関連企業の企業名、創業年、創業年数、住所、事業内容を示している。繊維関連の老舗企業数は61社である。創業年と創業年数をみると、最も古い企業は、206年前の1812年に創業している。その他にも1800年代に創業した企業が27社存在する。この時期は、児島や玉島で綿や蘭草の栽培が始まった頃であり、まさに倉敷市において繊維産業の発展とともに今日まで歩んできた企業といえよう。1900年代前半に創業した企業は34社である。この時期は、足袋、足袋から学生服の時代へと変化していた頃である。地区別にみると、各地区に老舗企業はあるが、児島が最も多いことがわかる。事業内容をみると、一般消費者に向けて蘭草製品、畳縁製品、帆布製品、介護服、学生服、靴などを製造や販売する企業だけでなく、企業等へ向けて産業用資材、染色整理加工、撚糸などを製造や販売する企業もある。ひとことに繊維関連企業といっても、その事業内容は多岐にわたっていることがわかる。企業名を基にWebサイトを確認すると、抽出された企業のほぼすべてが中小企業・小規模企業であった。すなわち、倉敷市の繊維を支えてきたのは中小企業・小規模企業なのである。



図表 2 倉敷市における繊維関連の老舗企業

| 企業・事業者名                  | 創業年  | 創業年数 | 住所                          | 事業内容                                                           |
|--------------------------|------|------|-----------------------------|----------------------------------------------------------------|
| 大川被服株式会社                 | 1936 | 82   | 倉敷市児島下の町6-8-44              | ユニホームの企画・製造・販売、学生服の製造・販売                                       |
| 丸進工業株式会社                 | 1933 | 85   | 倉敷市曽原439                    | 帆布をはじめとする綿・混・合織・厚織物など製造                                        |
| 中国産業株式会社                 | 1933 | 85   | 倉敷市児島下の町8-1-11              | 作業服製造卸                                                         |
| 株式会社ラインワールド              | 1932 | 86   | 倉敷市児島赤崎2-7-57               | 各種組紐製造販売                                                       |
| 日本被服株式会社                 | 1930 | 88   | 倉敷市児島下の町5-5-3               | 学生服、カッターシャツ、体操服製造                                              |
| 有限会社亀高                   | 1927 | 91   | 倉敷市玉島1-8-27                 | 民芸諸材料、縫製付属品、制帽材料販売、タキシロン糸販売、ユニチカカタン糸販売代理店                      |
| 永井鉦株式会社                  | 1927 | 91   | 倉敷市児島柳田町2498                | 学生服金ボタン、婦人服ボタンおよび縫製付属品製造販売                                     |
| 株式会社出口屋                  | 1927 | 91   | 倉敷市児島唐琴2-10-52              | PE、PPモノフィラメント糸製造販売、光輝緑用、経・緯糸の製造販売                              |
| 河合産業株式会社                 | 1927 | 91   | 倉敷市児島田の口69-3                | 体育衣料製造販売                                                       |
| 有限会社多和                   | 1926 | 92   | 倉敷市児島味野城2-9-14              | 靴・履物・バック小売                                                     |
| 株式会社スワ商店                 | 1925 | 93   | 倉敷市水江999-5                  | 衣草製品製造、加工、販売                                                   |
| 株式会社モリ・フロッキー             | 1924 | 94   | 倉敷市児島下の町9-13-24             | Tシャツ・トレーナー・ブルゾン・キャップ等のプリント加工                                   |
| 株式会社麻原産業商会               | 1924 | 94   | 倉敷市玉島734                    | メンズ、レディース、子供ズボン製造卸                                             |
| 有限会社平田呉服店(アムゼ)           | 1924 | 94   | 倉敷市児島赤崎1-12-9               | 婦人服販売                                                          |
| 株式会社モリ・フロッキー             | 1923 | 95   | 倉敷市児島小川3-7-8                | ゼッケン、アイロンネーム、イベントグッズ、Tシャツ、トレーナー、キャップなどのプリント入れ、体操服などのフロッキーマーク入れ |
| つちや産業株式会社                | 1923 | 95   | 倉敷市児島味野6-9-2                | オフィスユニフォーム                                                     |
| 株式会社吉岡屋                  | 1921 | 97   | 倉敷市児島味野2-2-43               | 衣料品小売、介護衣料品宅配・ネット販売、ジーンズストリートの不動産業務                            |
| 備南染工株式会社                 | 1921 | 97   | 倉敷市児島唐琴4-10-10              | 繊維染色・整理、製品洗い・染色                                                |
| 荻野製織株式会社                 | 1921 | 97   | 倉敷市児島味野3-2-28               | 帆布、その他生地企画、製造、販売                                               |
| 株式会社丸五                   | 1919 | 99   | 倉敷市茶屋町1680-1                | 足袋、安全作業用品製造、ゴム製履物、自動車用ゴム部品・化成品などの製造販売                          |
| 角南被服有限会社                 | 1918 | 100  | 倉敷市児島上の町3-5-5               | ジーンズ、カジュアルパンツの縫製                                               |
| 株式会社マルヲ呉服店               | 1917 | 101  | 倉敷市阿知2-12-18                | 呉服店                                                            |
| 株式会社杉屋ダイワークス             | 1916 | 102  | 倉敷市児島下の町9-8-10              | 糸染め加工並びに各種繊維製品染色特殊加工                                           |
| 株式会社ユニアート・ヤモリ            | 1916 | 102  | 倉敷市児島小川7-13-9               | 学生衣料製造、カジュアル衣料製造                                               |
| 株式会社杉屋ダイワークス             | 1916 | 102  | 倉敷市児島下の町9-8-10              | 各種繊維チーズ染色・晒・仕上加工、ジーンズ洗い加工、製品染めならびに特殊加工                         |
| 河合商事株式会社                 | 1913 | 105  | 倉敷市児島田の口1-3-27              | 女子作業服90%、事務・作業服10%の縫製卸                                         |
| 荻田懋有限会社                  | 1913 | 105  | 倉敷市尾原1438                   | 綿糸、化繊糸、合繊糸など各種撚糸加工                                             |
| 株式会社羽黒屋                  | 1912 | 106  | 倉敷市玉島中央町1-16-8              | 婦人服販売、寝具インテリア販売・取付、美容サービス                                      |
| 有限会社シントラ洋品店              | 1912 | 106  | 倉敷市玉島中央町1-17-23             | 洋品店                                                            |
| 日の出屋商店                   | 1911 | 107  | 倉敷市呼松2-10-18                | 学生服・学校用品及び婦人服の販売                                               |
| 春陽繊維株式会社                 | 1909 | 109  | 倉敷市児島田の口2102                | コンテナバッグの吊りベルトを主力とした細幅織物の製造                                     |
| 三宅松三郎商店                  | 1908 | 110  | 倉敷市西阿知町422                  | 衣草製品製造業                                                        |
| 株式会社田辺商店                 | 1906 | 112  | 倉敷市玉島長尾2375                 | 足袋                                                             |
| 有限会社丸岡                   | 1904 | 114  | 倉敷市呼松2-10-15                | 呉服・婦人服販売、ダンボール加工事業                                             |
| 石井織物工場                   | 1899 | 119  | 倉敷市児島田の口2883                | 織物(平織り、ギャバジン)製造                                                |
| 有限会社ミヨシ洋品店アヌ             | 1899 | 119  | 倉敷市阿知2-11-8                 | 婦人服店                                                           |
| 株式会社トクラ                  | 1898 | 120  | 倉敷市水江1599                   | 晝表、晝資材、衣草製品、カーペット、クッションなどインテリア製品卸売                             |
| 倉敷いづき今吉商店                | 1897 | 121  | 倉敷市西阿知町1016                 | 衣草製品製造業                                                        |
| 金森株式会社                   | 1895 | 123  | 倉敷市連島町西之浦425-1              | 寝具製造卸                                                          |
| いぎ呉服店                    | 1894 | 124  | 倉敷市玉島2-7-28                 | 呉服・帯・ちりめん和雑貨等販売、着物各種クリーニング、着付け教室                               |
| サキヤクワイト株式会社              | 1894 | 124  | 倉敷市笹沖1162-2                 | 婦人服小売、中部、西日本を中心に40店舗展開                                         |
| 株式会社白神商店                 | 1894 | 124  | 倉敷市本町2-13                   | 荒物、雑貨、蘭草製品                                                     |
| 有限会社藤孫商店(あかい靴)           | 1892 | 126  | 倉敷市児島駅前2-35 天満屋ハビータウン トピア1階 | 靴販売                                                            |
| 萩原株式会社                   | 1892 | 126  | 倉敷市西阿知町西原884                | 晝表など衣草製品、その他敷物の販売、籐製品、パイプ家具などの輸入販売、高級家具の輸入卸                    |
| 高田織物株式会社                 | 1892 | 126  | 倉敷市児島唐琴2-2-53               | 晝縁製品                                                           |
| 株式会社齋藤岩吉商店               | 1891 | 127  | 倉敷市船徳町水江1281                | 衣草・上敷き・PP敷物の製造販売                                               |
| 株式会社タケヤリ                 | 1888 | 130  | 倉敷市曽原414                    | 綿帆布・合成帆布合わせると日本一の生産量を誇り、極厚の綿帆布を使用したバッグ等の雑貨商品の製造販売              |
| 早沖〇百花蒔須浪亭商店              | 1886 | 132  | 倉敷市茶屋町早沖178                 | いづきのかご「いかご」製造販売                                                |
| 正織興業株式会社                 | 1880 | 138  | 倉敷市茶屋町234                   | 綿・合化繊維物の晒、染色整理加工                                               |
| 四十瀬屋小河原呉服店               | 1879 | 139  | 倉敷市阿知3-18-10                | 呉服店                                                            |
| 大熊綿業株式会社                 | 1873 | 145  | 倉敷市連島中央2-3-20               | 寝具製造、販売                                                        |
| 大倉呉服店                    | 1871 | 147  | 倉敷市連島町西之浦23-2               | 婦人服、おしゃれ洋品、その他、着物クリーニング用洗剤の販売                                  |
| 株式会社はしまや呉服店              | 1869 | 149  | 倉敷市東町1-20                   | 呉服販売                                                           |
| 糸ミヤク株式会社                 | 1868 | 150  | 倉敷市阿知3-18-6                 | 毛糸の卸売、小売                                                       |
| 松井織物株式会社                 | 1868 | 150  | 倉敷市児島唐琴3-6-77               | 晝縁製品                                                           |
| 崇神紡織物有限会社                | 1868 | 150  | 倉敷市児島唐琴4-14-40              | 合繊細幅織物の製造販売、晝縁の製造                                              |
| 明石被服興業株式会社(AKASHI.S.U.C) | 1865 | 153  | 倉敷市児島田の口1-3-44              | スクール、オフィス、ファクトリーユニホーム、スクールスポーツ、メディカルウェアの企画、製造、販売               |
| 富士商事有限会社                 | 1863 | 155  | 倉敷市児島田の口3-3-28              | スポーツウェア・介護服等デザイン、パターン、製造、販売                                    |
| 三宅製襪株式会社                 | 1855 | 163  | 倉敷市連島町西之浦                   | デザインすだれ、包装資材、農業資材、自動車部品の生産加工                                   |
| 有限会社沖宗                   | 1818 | 200  | 倉敷市茶屋町早沖                    | 衣草製品製造業                                                        |
| 難波産業株式会社                 | 1812 | 206  | 倉敷市児島上の町                    | 化学工業製品、合成樹脂、食品原料、産業資材、染料顔料、繊維加工助剤、繊維加工関連機器の販売                  |

(出所：くらしき資源ミュージアム、瀬戸内海経済レポート (2018)『岡山企業年報』より作成)

#### 4. 繊維製品の調査

実際に、倉敷市内の企業はどのような事業を展開しているのだろうか。企業や資料館を訪問し、調査を行った。なお、本稿ではあえてジーンズや学生服以外の製品について記している。これらは、注目度が高く、学生も授業で触れ見学する機会が多いためである。

##### (1) 畳縁製品

畳縁を製造している高田織物株式会社で見学と体験を行った。高田織物は 1868 年に児島唐琴で創業し、昭和初期の頃から畳縁の生産を始めた老舗企業である。工場に併設された場所でミニ畳作り体験、ショップ、資料館があり、畳縁を身近に感じることができる。最近、畳の無い住宅が増えたことで畳の需要が低迷している。また、畳縁を不要とする畳が増えていく。こうした理由で畳縁の需要が少なくなっているとのことであった。しかし、畳縁には畳を保護したり、畳と畳の隙間を狭めたりする機能がある。かつての畳縁は、人々の身分を示すような時代もあったというが、今はそうではない。畳縁のデザインは多用で住宅に合ったものを選ぶことができる。

ショップを実際に見学してみると、畳縁のデザインは、おしゃれ、かわいらしさ、たくましさ、キャラクター、伝統、古風などさまざまだった。畳縁は畳に利用されるものだと思っていたが、ポーチやカードケースなどいろいろな製品に活用されていた。畳縁のデザインは、どこか見ているだけでワクワクし、楽しい雰囲気であった。

ミニ畳を実際に作ってみた。まず畳縁を 2 つ選ぶのだが、どのデザインもキレイなので迷った。それだけ魅力的なデザインなのだろう。実際に畳作りを行ってみると、簡単そうに見えて熟練の技術が必要な作業だと感じた。今回は、ミニ畳だったが、1 畳分だったら、何枚もあったら大変な作業である。工場を見学すると、機械が複雑で、その機械からきれいな畳縁ができあがっていた。糸の調整など人の機械だけでなく人の動きも必要であるように見えた。

畳縁については、詳しく知らない人が多いかも知れない。しかし、多種多様なデザインがあることやポーチなどにも使われている。販路を広げることで新たな畳縁ファンを作り出せるだろうし、

喜び楽しんでくれる人が増えるのではないだろうか。また、倉敷・児島といえば、ジーンズや学生服のイメージが強いが、それに並ぶような存在つまり「倉敷・児島といえば、ジーンズ・学生服・畳縁の街」というイメージが根付けばいいのではないだろうか。

##### (2) 足袋

足袋は倉敷市の伝統的な繊維製品であるし、児島では学生服やジーンズが台頭しているとはいえ、何社かが製造しているものだと思っていた。ところが、調べてみると児島の中に足袋を製造している企業がない。地域で詳しい人に聞いても「児島にはもうないと思う」という答えだった。調べてみると、玉島には 1 社あることがわかり、株式会社田辺商店でお話を伺うことができた。

田辺商店は 1906 年に創業し、足袋の製造を行っている。田辺商店が立地する倉敷市玉島長尾地区は、古くから足袋が製造されている地域であった。最盛期には約 20 件の足袋製造業者があったというが、海外との競争や洋装化などによって足袋を製造する企業は減少したという。伝統的な建物の中にある工場生産される足袋は、白地のものだけでなく柄物や刺繍を施したものなど多用である。これらは、全国の呉服店などで販売される他、居酒屋や和食店などでも使用されることがある。製造方法をみると、伝統的な道具や古いミシンを用いていることがわかった。

足袋の需要は減少している。しかし、日本遺産に認定された埼玉県行田市の足袋は小説やテレビドラマで取り上げられ、注目を集めた。倉敷市でも足袋など伝統的な繊維産業のものづくりをテレビドラマや映画などで PR することはできないだろうか。または、アニメ文化と絡めて足袋を世界へ発信していくことはできないだろうか。これらは、一過性のイベントにすぎないかもしれない。しかし、人々の注目を集め足袋の歴史や伝統的な技術、製品づくりの大切さをしってもらう機会になるはずである。また、そこから持続的なファンづくりをすることはできるだろう。

足袋に関しては、児島ですでに製造していないことがわかった。また、当時の資料や使用していた道具や機械も少ないことが分かった。足袋製造

の歴史を残すことも必要である。地域全体で資料や道具を収集し、それを展示したり保管したりすることも大切であると感じた。

### (3) 磯崎眠亀記念館

磯崎眠亀記念館は茶屋町駅近くに立地する。もともと、茶屋町は綿の栽培が始まった江戸時代頃から蘭草を栽培していた地域であった。戦後から1960年代にかけては茶屋町をはじめとした岡山県南部は、蘭草は県を代表する農作物となり、それを加工した畳表が全国に出荷されていた。しかし、時代の変化とともに蘭草農家は減少し、残念ながら現在では蘭草の栽培は行われていない。しかし、磯崎眠亀記念館では蘭草栽培が盛んだった頃の様子を知ることができる。また、そこに展示されている磯崎眠亀の功績は、倉敷市における繊維産業の歴史・伝統として認識する必要があるのではないだろうか。

磯崎眠亀は、1834年に茶屋町に生まれた。江戸へ行ったものの武家社会になじめず、茶屋町へ戻る帰路の大阪で、イギリス製の絹のような紡績糸を見つけ、織物を作ることを思い立ったという。そして、茶屋町へ帰り、織機を自作して帯地を作ったことをきっかけに、広巾織物の織機などを製造するようになる。

研究熱心で地域をよくしようという思いが強かった磯崎眠亀は、ウィーン万国博覧会（1873年開催）に出品されたセイロン産の竜鬚苳（りゅうびんえん）を見て、蘭草を使った織物の可能性について考えるようになった。そして、自宅2階で研究に没頭し試行錯誤の上、1878年に錦莞苳と錦莞苳織機を開発した。また、蘭草を赤や青などに染めるための方法も開発した。錦莞苳は、縦糸を畳の4倍使用しており、織目が小さいことが特徴である。磯崎眠亀が開発した錦莞苳は、国内外から高く評価され、さまざまな賞を受賞した。

磯崎眠亀記念館は、磯崎眠亀の旧宅である。現在は、倉敷市の施設となり、磯崎眠亀顕彰会の方々が管理されている。磯崎眠亀顕彰会の方々から、お話を伺い、体験をさせていただいた。

記念館に入り、展示されている当時の建物や資料を拝見した。2階部分を研究室としていたというが、これが特徴的だった。2階へは重い荷物を出し入れできるようスロープが設けられ、吹き抜

けからも滑車を使って荷物を上げられるように工夫されていた。2階に研究室を設けたのは他者に真似されないためだということも特徴的だった。建物、展示されている資料や復元した織機などどれも素晴らしかった。

蘭草の手織り体験をしてみると、さらにその素晴らしさを理解することができた。筆者達は、日ごろ、授業などで縫製や織物をする機会がある。糸や生地、織機には慣れている方だと思っている。しかし、蘭草の選別、染色、織のいずれも手作業であり、1本1本が堅く太さも異なるため難しい。同じ繊維素材でも綿と蘭草は全く別物である。そして、織る際に手間が多く、力の加減が難しく時間を要する。蘭草がちぎれることにも怖さを感じた。そこから大きな製品を作り出すのだから、これぞ職人技という世界である。

「きれい」「すごい」「でも難しい」「職人技」というのが率直な感想である。これまで授業などでも体験したことのないものを得ることでできた。また、磯崎眠亀の研究や地域に対する情熱を感じ取ることができた。そして、その意志が磯崎眠亀顕彰会の方々を中心に地域の中で引き継がれ、建物や資料などが残っていることはすごいと思う。この先、どんなにAIなど機械化が進んだとしても、人が作ったぬくもりや人の手で受け継がれていく良さは機械化できないだろう。

### (4) クラボウ記念館（紡績業）

クラボウ記念館は、美観地区のアイビースクエアにある。館内は5つの展示室に分かれており、第1室は明治時代、第2室は大正時代、第3室は昭和時代、第4室は戦後の昭和時代と平成時代、第5室は年表コーナーとなっていた。倉敷紡績の歴史が年代順に展示されておりクラボウの歴史、紡績産業の歴史を学ぶことができた。1888年、大原孝四郎が初代頭取を務めた「有限責任倉敷紡績所」が設立された。1年7ヶ月後の1889年窪屋郡倉敷村域の内、倉敷代官所跡（現・アイビースクエア所在地）約1万6700平方メートルに、英プラット社製最新式のリング紡績機4472錠が据え付けられ昼夜2交替24時間操業で生産を開始した。英プラット社製の機械のいくつかは記念館でも見るができる。実際の機械をみることで当時の様子がより鮮明に伺えた。創業者の大原孝四

郎は倉敷紡績だけでなく倉敷銀行創立にあたって初代頭取に就任し、地方産業の振興に貢献した。また、教育にも意を注いだ。孝四郎は1906年に倉敷紡績頭取を退任し、後任は長男の孫三郎に託された。孫三郎は特に労働問題の改革に情熱を注いだ。労働環境を改善するために飯場制度を全廃し、従業員たちを中間搾取の弊風から解放した。その後も業績不振の中小紡績会社を次々と合併したり、自家発電設備をつくり動力を蒸気から電気に転換したりして、倉敷紡績を全国規模会社に成長させた。また、労働科学研究所や大原社会問題研究所を設立した。

クラボウ記念館を訪れて、倉敷における大原家の存在の大きさを改めて感じた。また、倉敷の繊維産業の発達においても大原家や倉敷紡績の果たした役割は大きいものだったと知ることができた。

おわりに

倉敷市の歴史を見て、また、調査から名実ともに倉敷市は「繊維の街」であることを認識した。それと同時に、名実ともに繊維の街へと発展することができたのは、先人達が築き上げてきた成果であることを忘れてはならないだろう。その歴史を今後さらに発展させるために何が必要だろうか。調査を踏まえて以下のことを提言してみたい。

第一に、繊維産業の担い手である中小企業・小規模企業の育成である。繊維産業を牽引しているのは地域に根ざした中小企業・小規模企業である。こうした中小企業・小規模企業に対して、「行政、大学、業界団体、商工団体に対する要望はありますか」とお尋ねすると、大学に対しては「共同研究」や「人材育成」があげられた。一方で、企業としても若い人が就職してもらえよう環境づくりが必要との意見があった。行政に対しては、「補助金」という回答があった。

第二に、デザイン性や機能性が高い商品の開発と販売である。デザイン性が求められる時代の中で、ファッションや雑貨には伝統を残しながらも新しいデザインを生み出すことが求められている。そこで、地域の大学、デザイナー、企業等が連携する仕組み作りによるデザインの強化が必要だと考えられる。中小企業・小規模企業の場合には資

金が必要となることもあり、そうした面での支援も必要になるかもしれない。

第三に、繊維の歴史に関する資料や設備を保管する場を設けることである。現在は、学生服資料館、ジーンズミュージアム、磯崎眠亀記念館など繊維に関する資料館が存在する。しかし、地域の中には眠っている資料や設備など貴重なものがまだ多くあるかもしれない。それらを集めて新たな資料館を作ることや既存の資料館同市のネットワークを作ることが必要になるかもしれない。そうすることで、観光のPRにもつながるはずである。地域の歴史を残すという意味でも必要だろう。

第四に、日本遺産を活用した地域内観光の強化とPRである。第三と重なるが、今、倉敷市を訪れる人は美観地区など特定の場を訪れている。それは時間などの問題もあるが、観光客が電車やバスを使って市内を回ることができないという事情もあるように思う。そこで市内の日本遺産モデルコース作りや公共交通の整備が求められるであろう。また、日本遺産に認定されたスポットを参考にして地域内での連携が必要であろう。

第五に、繊維の街のPRを国内外に向けて、これまで以上に発信することである。それは観光にも結びつくと考えられる。また、倉敷市役所で働く人たちがもっと繊維の街をPRしてもよいのではないか。そこで、倉敷市立短期大学の卒業研究の一環として、繊維の街倉敷をPRすべく倉敷市役所の制服と作業服を考えてみた。市役所の方にお話を伺ったところ、2005年まで制服が着用されていたが、財政や他市が廃止しているという世間の流れを考慮して制服の貸与を廃止したということがわかった。しかし、現在でもその当時の制服を着用されている方が少なからずいる。また、作業服は型が古いということがわかった。それらを踏まえて、日ごろの業務をしながら繊維の街をPRできる制服と作業服を考えた（本章末に掲載）。

さいごに、倉敷市にはジーンズや学生服以外にも多くの製品があり、そこにはストーリーがあった。今後も、それらを深く発見することが必要である。そのことは今後の研究課題としたい。

参考文献

倉敷地域資源ミュージアム

<http://www.kurashiki-shigen.com/index.html>

(2019年3月2日閲覧)

瀬戸内海経済レポート (2018)『岡山企業年報』

注

1) 老舗企業に関してはさまざまな議論がある。本稿では、倉敷市とくに児島地区の繊維産業の歴史などから 80 年程度が妥当と考え老舗企業の年数とした。なお、本稿では2つの媒体を用いて老舗企業を抽出したが、媒体に掲載されてい

ない情報の中にも老舗企業が存在する可能性が考えられる。また、かつては繊維関連の事業を営んでいたが、現在は繊維関連の事業を営んでいない場合は、この条件には該当しない。

## ■制服と作業服のデザイン







デニム生地の作業服  
倉敷らしさが前面に出ることにより、一人一人の職員の  
存在が倉敷全体の広告になる  
また人によって変わる色落ちで  
着用している職員にも愛着を持ってもらえる  
また、汚れが目立ちにくいメリットがある

キャメル色の作業服  
温かさと安心感を与えることのできる茶色を使用することにより  
作業している姿を見る方々に信頼感をあたえる  
また謙虚で控えめなイメージをもたれるため、市役所の作業服としては  
ふさわしい色である

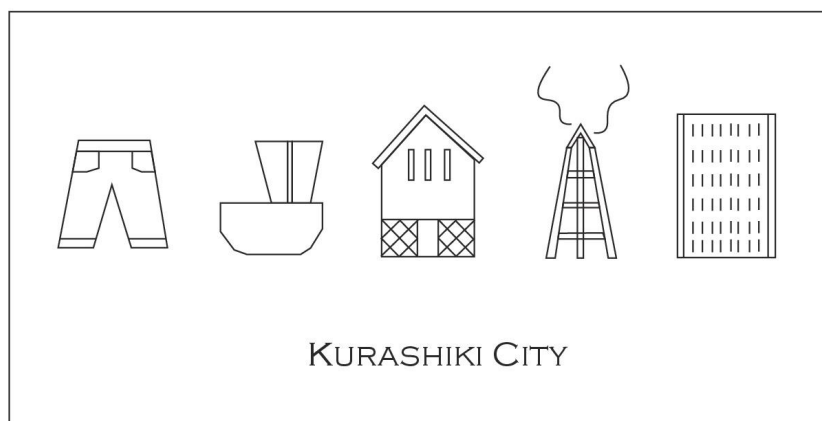
拡大図



左からデニム、北前船、白壁、コンビナート、豊  
倉敷市の名産、日本遺産をモチーフにした



ジャケットにはボタンではなく、ジッパーを使用しているため見た目がすっきりしてる  
現在使われている作業服以上のポケットの数で収納しやすいということを意識  
(ジャケットに5つ、パンツに6つ)



左からデニム、北前船、白壁、コンビナート、畳  
倉敷市の名産、日本遺産をモチーフにした

※制服、作業服、ピクトグラムデザインは、倉敷市立短期大学の卒業研究として発表したものである。  
繊維の街倉敷らしさが強調されている。作業服のデザインについて、「倉敷市」の文字を背中に入れると  
よいのではないかといったご意見をいただいた。なお、デザインは渡部菜々子が担った。

## 倉敷市街地の日本遺産構成文化財と近代建築

小西伸彦(産業考古学会理事)

### はじめに

倉敷市街地の洋風建築は 1889(明治 22)年に創業した倉敷紡績倉敷工場をして嚆矢とする、倉敷市街地における日本遺産「一輪の綿花から始まる倉敷物語-和と洋が織りなす繊維の町-」は、現在の倉敷アイビースクエアから始まると言って間違いないと思う。大正時代になると、倉敷幼稚園園舎(現在の倉敷市歴史民俗資料館)、倉敷町役場(倉敷館)、第一合同銀行倉敷支店、倉敷教会堂、倉紡中央病院(倉敷中央病院)、若竹の園園舎、奨農土地本社(喫茶エル・グレコ)などが建てられた。昭和時代には有隣荘や大原美術館本館が完成するなど、近世の家並みに暮らす倉敷の人々にとって、洋風建築、西洋建築は既にアヴァンギャルドではなかったと考えられる。

昭和 30 年代始まった水島臨海工業地帯の造成で、倉敷は紡績業や機業、蘭筵業といった軽工業の町から重工業の町へと発展した。市街地には昭和 30 年代、倉敷市役所(倉敷市立美術館)、大原美術館分館、大原美術館工芸館・東洋館、倉敷国際ホテルが誕生し、昭和 40 年代には倉敷市民会館や倉敷紡績倉敷工場を改修した倉敷アイビースクエアが開館した。倉敷市は 1968 年 9 月 30 日、条例第 63 号「倉敷市伝統美観保存条例」を公布したが、汐入川であった倉敷川の沿岸、現在の倉敷美観地区を中心とする家並みを守る考えは昭和 30 年代既に、大原總一郎らによって進められていた。小稿では、倉敷市街地の近代建物の誕生と特徴を考察する。

### 大原美術館本館

日本遺産構成文化財。1929(昭和 4)年 3 月 8 日、児島虎次郎が 48 歳で逝去した。児島は 1881(明治



14) 年、川上郡下原村(高梁市成羽町下原)に生まれ、大原奨学生として東京美術学校(東京芸術大学)に学び、大原美術館の基礎コレクションを築いた洋画家である。児島の画業を支え、児島を美術品蒐集に専念させた倉敷紡績二代目社長・大原孫三郎が、児島の逝去を悼み、児島の作品と児島が蒐集した美術品を展示するために建設したのが大原美術館本館である。

美術館構想をあたためていたのは生前の児島であった。児島は 1927 年、1926(大正 15)年に竣工した聖徳記念絵画館に飾る「対露宣戦布告会議」の揮毫を公爵・松方巖から依頼された。その制作と並行し、住居兼アトリエのあった酒津の無為村荘にフランスの田舎風石灰石造りの美術館を思い描き、大理石の見本などを集めていた。孫三郎もその計画に賛同し、薬師寺主計<sup>やくしじかずえ</sup>を交えて設計を打ち合わせたが実現には至らなかった。有隣荘の建設途上、さらなる多額の予算を組むことがはばかれたことと、孫三郎が病床に臥したことが理由であった<sup>1</sup>。

美術館建設の意向は 1929 年 6 月 13 日、鶴形の池田屋旅館で、児島の逝去を悼む孫三郎の口から 4 人の画家・藤島武二、満谷国四郎、太田喜二郎、吉田 苞<sup>しげる</sup>に出された。日本経済は、1923 年に起こった関東大震災からの不況が深刻さを増していた頃であった。町には失業者があふれ、東京帝国大学の学生就職率が 30%程度と言われた就職難時代であった。減益をつづける倉敷紡績に追い打ちをかけたのが、1928 年に創業した倉敷絹織にフランス

から導入した機械の不具合、1930年に実施される深夜操業廃止をにらんだ多額の設備投資費であった。借入金は1,800万円(現在の約400億円)に達していた。そして1929年10月、ニューヨーク・ウォール街大暴落が起こった。しかし孫三郎は美術館の設計を葉師寺主計に託し、建設場所を大原家の別邸地・新溪園に決めた。無為村荘だけでは広さが不十分で、周囲に取得できる土地がなかったのである<sup>2</sup>。

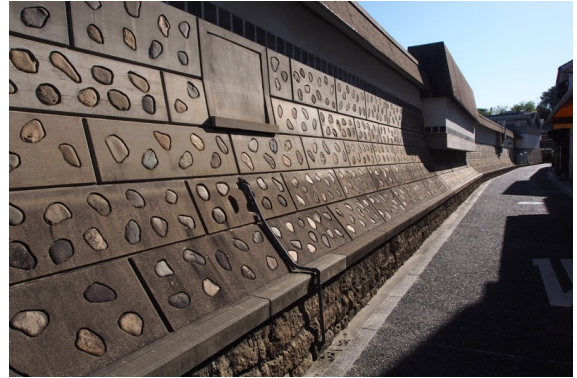
児島画伯記念館の地鎮祭は1930年4月19日、新溪園で行われた。しかし、胆石症の病状が深刻度を増していた孫三郎の妻・寿恵子が25日未明、47歳の生涯を閉じた<sup>3</sup>。孫三郎は不況にあえぐ倉敷紡績の経営、妻の逝去、親友・児島の死、という苦境の中、美術館工事を見守ったのである。

1930年11月5日、日本初の西洋美術館・大原美術館が開館した。ファサードの両側にはロダンのブロンズ像2体が配され、縦長の窓から自然光が差し込む一階には児島の作品105点、二階には西洋絵画61点が展示された。児島が蒐集したエジプトやペルシア、トルコ、中国などの古陶磁や銅器など100余点は別室に展示された<sup>4</sup>。入館料30銭は、コーヒー3杯分に相当した。初代館長・武内潔真時代の1931年12月17日、女子事務員が綴った日誌には「今日は唯一人の来館者もございませんでした」と書かれた。開館から10年間の入館者数は年平均6,000人足らずで、入館者ゼロの日が31日あった<sup>5</sup>。1943年、死を前にした孫三郎は「わしのはじめた事業でいちばん重荷にあるのは、美術館じゃ」と語ったという<sup>6</sup>。

本館の躯体は鉄筋コンクリート造りで、外壁は粉砕した石灰石を着色セメントに混ぜた人造石塗りである。セメントが固まる直前、表面を軽く叩いたり搔いたりして仕上げ、化粧目地を入れて石積みのように見せている<sup>7</sup>。ノートルダム清心女子大学教授・上田恭嗣の研究によると、本館前の石垣は新溪園の外壁を残したもので、孫三郎の干支である辰を中国趣味にデザインし、有隣荘と今

橋に調和させたものであるという。また、水を現す辰(龍)が美術館と大原家の間にある倉敷川を象徴するとも話す。

#### 大原美術館分館



日本遺産構成文化財。1961(昭和36)年に竣工した大原美術館分館と、1963年に創業した倉敷国際ホテルを設計したのは浦辺鎮太郎である。浦辺と同郷の大原總一郎は、同級生で、共に岡山一中と第六高等学校に通った。浦辺は京都大学建築科を卒業した1934年、倉敷レイヨンに建築技師として採用され、總一郎の指示で1962年、倉敷建築研究所を開設して代表取締役役に就任した。

京都大学で浦辺は、時代にこだわらず、その土地の風土や文化に根ざした建築思想「ヴァンキュラー・アーキテクチャ」に魅せられた。19世紀後半、イギリスの建築家たちが掲げたその美学は、倉敷基督教会堂や若竹の園を設計した西村伊作にも影響を与え、西村は「今後の新しい日本の住宅のために、私は日本の昔からその土地にある民家の様式をなるべくそのまま用いたい」と語っている<sup>8</sup>。浦辺が特に注目したのがオランダ人建築家ウィレム・マリヌス・デュドックである。デュドックは、ヒルヴェルス市庁舎を設計し、幾何学的で整合性に富んだ合理主義的作風を表現したことで知られるが、浦辺の興味を引いたのは、柔らかな草葺屋根をのせた、小さなヒルヴェルスムのファブリティ



ウス小学校であった。イギリスのアーツ・アンド・クラフツの流れを汲むデュドックの哲学は、大都市への人口集中を否定し、田舎や自然を守る多極的で分散的社会、その土地の材料や技術、表現方法を使い、綿々と受け継がれる方言的社会の建築を目指すというものであった。浦辺の強い勧めで総一郎は1937年、ヒルヴェルスムのファブリティウス小学校を見学し「ことにナイーブな印象を受けた」と語った<sup>9</sup>。

浦辺は大原美術館分館南壁のデザインを砦(城壁)とすることで、水島臨海工業地帯と、軽工業から重化学工業の町へと変貌する倉敷のランドマークとなる倉敷市役所が起こすモダニズムの波から、近世と近代が同居する繊維の町・倉敷の家並みを守ろうとしたのである<sup>10</sup>。浦辺は1963年、倉敷建築研究所で次のように述べている<sup>11</sup>。

この新館は保存区域としての元倉敷と今後開発さるべき新倉敷(市庁舎を先頭に後に水島工業地区をもつ)のボーダーラインにある。私としては、この線をもって保存区域を守る城壁にしたいという発想であった

分館の屋根は波打つような曲線とされ、屋根の上には一面、青色の玉砂利が敷き詰められている<sup>12</sup>。石垣の上に自然石と瓦を埋め込んだ姿の外壁は、白壁と海鼠壁なまこかべ、戦国時代の城に採用された石落としを思わせる。

総一郎は、中世の面影を残す南ドイツのローテンブルクのたたずまいに関心を寄せていた。現在はロマンティック街道の観光地であるローテンブルクの市街地は、第二次世界大戦で破壊され、戦後、市民の協力のもとかつての姿に復興された。市庁舎を中心にして形作られた町並は古い城壁で囲まれ、市民生活は景観に融合したものであった。総一郎は倉敷をローテンブルクのような町にしたいと、浦辺と共にその構想実現策を話し合った<sup>13</sup>。大原美術館分館に浦辺は、ローテンブルクの城壁と同じ意味を込めたのかもしれない。

大原美術館分館には、日本の近代芸術品が展示されている。日本に西洋美術が紹介されたのは江戸末期である。近代産業、近代建築と時を同じくして西洋から渡来したのである。大原美術館の前館長・小倉忠夫は「大正時代は日本洋画の青春期」と話す。「15年の短い期間ではあったが、模倣の明治を過ぎた大正は、表現の時代」であったという。竹久夢二や高島華宵たかばたけかしやう、ふきやこうじ、ふきやこうじら名を馳せたのも大正時代である。近代産業と近代建築も明治は模倣の時代、大正は表現の時代であり青春時代であった。建築様式が擬洋風からクラシック、バロックへと変遷したのも同じ時期である。大原美術館分館を飾るのは、同じ時代を駆け抜けた芸術家たちの作品である。

#### 大原美術館工芸館・東洋館



日本遺産構成文化財。大原美術館工芸館と東洋館をデザインしたのは芹澤銈介せりざわけいすけである。大原家の米蔵を改装し1961(昭和36)年完成した。東洋館となった蔵は90度向きを替えて工芸館に接続され、倉敷川と伝建地区に対してカギ型の平面図とされた。

工芸館の計画が持ち上がったのは1960年頃である。大原総一郎は、倉敷民藝館館長・外村吉之介とむらきちのすけに民藝運動に参加した作家の展示スペースを設けることを持ちかけたが、「それと民藝は別。作家の作品を他の民藝品と一緒に置くと、民藝そのものが一般の人たちから誤解され

る」と断られた。そこで總一郎は、大原美術館に工芸館を造ることを決めたという<sup>14</sup>。

工芸館の意匠で注目すべきはまず、浜田室・リーチ室・河井室一階の床に敷き詰められた栗のブロックの並べ方である。次に、浜田室・河井室の土壁と柱や梁を露出させた姿、リーチ室・富本室の白い広い壁面とのコントラストである。作品の個性によって背景を使い分けた芹澤の、芸術家に対するオマージュにほかならない。三つ目は、河井室二階の床である。長さの異なる板を貼り合せた「乱張り」は韓国の古い民家に採用されていた手法で、李朝家具を好んだ河井の部屋に相応しいと選んだものである<sup>15</sup>。棟方室の梁と壁の処理、自室を最も簡素にした謙虚な姿勢、建具・扉・展示什器・照明・縄暖簾・椅子・窓のデザインなどにも芹澤特有のセンスが溢れている。

東洋館がオープンしたのは1970年である。總一郎の「金に糸目はつけないから、自由にやってください」に応えた芹澤の発想には目を見張るものが多い。工芸館と東洋館をつなぐ廊下には、円形の黄色いガラスウォールが埋め込まれ、扉に使われているのは足場にわたされていた鉄板である。しかも、ペンキ職人が鉄板の中央を塗り残したのを見た芹澤は「あっ、それがおもしろいから、それでやめてください」と塗装を止めさせ、斑状態のままにさせた。壁の表面もモルタルがゴツゴツした状態で止めさせている。施工を請け負った藤木工務店倉敷支店長・和田が「先生、こんなことやったら、藤木が手を抜いて中途半端にやったって間違われます」と困った表情を見せると芹澤は、「何言っとるんだ和田君、これがおもしろいんだ」と返したという。北魏の「一光三尊仏」など石仏が並ぶ石仏室の壁材に、古墳時代の石棺に使われた庵山石を選んだ。ところが、運ばれてきたタイルの表面が綺麗過ぎたため、裏面を見せるように貼り合せた。さらに、通所は長辺を横にするタイル貼りではなく、短辺を横に貼らせ、建築の非常

識を覆した。展示什器と脚、階段手摺のデザイン、ガンダーラ仏を壁面に展示した展示手法などにも、芹澤のこだわりが現れている。東洋館の建設予算は3,500万円であったが竣工額は5,500万円であった。当時の館長・藤田慎一郎も、50万円程度の予算超過は覚悟していたが、2,000万円には舌を巻いた<sup>16</sup>。

開館当初、浜田室、リーチ室、富本室、河井室は「陶芸館」と呼ばれていた。それは、大阪の「日本工芸館」を意識した總一郎が「工芸館」という名前を嫌ったからだという。1963年に開館した2部屋も「棟方志功板画館」、「芹澤銈介染色館」と命名されたが、總一郎の逝去後、「工芸館」に改称された。藤田は著書『大原美術館と私-50年のパサージュ』で、「總一郎さんが生きていたら、大変叱られたでしょうね」と著している<sup>17</sup>。

#### 倉敷市役所(倉敷市立美術館)



倉敷市役所は1958(昭和33)年、水島臨海工業地帯を誘致し近代都市として発展しようとする倉敷市の都市構想の一環として計画された。1960年5月、丹下健三計画研究室の設計、大林組の施工により、大原美術館西側に落成した<sup>18</sup>。

丹下は1950年代、瀬戸内海沿岸で多数の公共建築を設計し、プレストレスト・コンクリート造りで完成させた。その最初が1954年に竣工した広島平和会館原爆記念陳列館である。広島平和会館本館や香川県庁で柱梁構造、広島子供の家や愛媛県民館ではシェル構造、今治市公民館では折板構造、



倉敷市役所ではプレストレスト・コンクリートの  
大スパン化を実現させた。倉敷市役所の図面は大  
谷幸夫が引き、西原清之が最終案を担当したと言  
われている。

倉敷市役所は建坪約 7,000 m<sup>2</sup>、鉄筋コンクリー  
ト造、地上 3 階、地下 1 階、高さ 23.66m、幅 56.25m、  
奥行き 37.72m である。主構造は、梁を縦横に組み  
合わせ、その接合部に柱を配するコンクリートラ  
ーメン構造、副構造として部材を積み木のように  
組み立てるプレキャスト・コンクリート工法が応  
用された。特に注意を引くのが外壁にわたされた  
約 20m の梁である。玄関ホールは高さ 10m を超え  
る吹き抜け空間とされている。設計段階では市役  
所の北側は市民広場とされ、広場の北側に置かれ  
るはずであった公会堂の屋根は、広場を見下ろす  
階段状であった<sup>19</sup>。屋上にも小規模なステージが  
造られ、現存する<sup>20</sup>。

市役所としての機能を終えた後、浦辺鎮太郎に  
より改修され 1983 年、倉敷市立美術館として開館  
した。

#### 倉敷国際ホテル



明治時代末期から大正時代にかけて行われた高  
梁川改修工事で東高梁川が廃止された。東高梁川  
の河口跡は、第二次世界大戦中から工業地帯に生  
まれ変わりつつあった。1953(昭和 28)年に大型  
船の入港を可能にする航路地浚渫工事が始まり、  
昭和 30 年代に入ると、三菱自動車製作所や小野  
田セメントなど企業の入植が続き、1961 年 12 月

には三菱石油水島製油所や日本鉱業水島製油所な  
どが操業を開始した。

水島地区で急激な産業都市化が進んだ倉敷で  
は、市街へのホテル建設希望の聲が高まった。倉  
敷を訪れる外国人が 2,409 人と増え、大原美術館  
の入館者が 17 万人を越えた 1961 年 12 月、ホテ  
ル建設に向けた発起人会が開かれ、株式会社倉敷  
国際ホテルの設立が決まった。1962 年には倉敷  
紡績や倉敷レイヨンなどから役員が出され、倉敷  
紡績常務取締役・翁孝文が社長に就任した<sup>21</sup>。

ホテル事業提唱の第一人者は大原總一郎であっ  
た。スコットランドを旅した總一郎は、倉敷のホ  
テルに必要な要素は、旅人の精神的安息の場とな  
り、風景や歴史、人情の窓となり、宿自体が町の  
風物の一部だと感じてもらえることだと考え、

「ウィークエンドハウスのような小ホテルが最も  
好ましい」と結論づけた<sup>22</sup>。總一郎の意を活か  
し設計したのは浦辺鎮太郎で、施行は藤木工務店  
であった。倉敷国際ホテルは 1964 年 11 月、美術  
出版社の建築年鑑賞し、浦辺は 1965 年 5 月 28  
日、日本建築学会の昭和 39 年度日本建築学会賞  
を受賞した<sup>23</sup>。

ホテルの建築にあたり總一郎は、棟方志功に本  
館吹き抜けロビーを飾る作品を依頼した。縦  
1.75m、横 12.84m の大作を木版画で制作せよとい  
うものであった。棟方はベートーヴェンの交響曲  
第 9 番とピカソの「ゲルニカ」にモチーフを求  
め、72 枚の版木を組み合わせた「大世界の柵  
〈坤〉-人類より神々へ」を完成させた<sup>24</sup>。

〈坤〉が彫られたのは、日本万国博覧会に出品さ  
れた〈乾〉の版木の裏面である。

#### 若竹の園

若竹の園は大原孫三郎の「人格主義」を象徴す  
る施設であり、石井記念愛染園ともつながる福祉  
事業の表出でもある。土地は孫三郎が私有地 560  
坪を提供し、発起人代表は孫三郎夫人・寿恵子が  
務めた。相互親睦や自己啓発を目的に 1902(大正



9)年、倉敷紡績社員の夫人らが集まって「倉敷さつき会」を発足し、運営にあたった<sup>25</sup>。「若草」は園長に就任した寿恵子から依頼を受けた小河<sup>おがわ</sup>磁次郎<sup>しげじろう</sup>が、明治天皇の謳から命名した。

すなほにもおほしたてなむいづれにも か  
たぶきやすし庭の若竹  
呉竹のなほき心をためすして ふしある人  
におほしたてな

藤木工務店の施行で1925年に開演したが、設計した西村伊作<sup>にしむらいさく</sup>が保育園の理想としたのは子供たちが楽しい夢を育む、温かい家庭のような空間であった。開園当時は、小さな門をくぐると、松や榎が立つ緩やかな傾斜のある庭が広がり、小川が流れていた。小川に沿っていくと、小さな三角屋根の玄関にたどり着く。その玄関のある平屋の建物を中心に、左側にも平屋の小さな棟、右側には2階建ての棟が配置され、開放的な渡り廊下でつながれていた。建物は簡素なバンガロースタイルで、大きさや向きを変えながらリズムカルに連ねられていた。そうした巧みな空間設計によって、園全体が空想的な美しさで満たされていたため、「おとぎの城」と呼ばれていた<sup>26</sup>。

#### 今橋

大原邸と大原美術館の間、倉敷川に架かる今橋は1926(大正15)年、まだ皇太子であった昭和天皇の倉敷行幸が決まったことから、耐震構造の橋長7mの鉄筋コンクリート造アーチ橋に架け替えられた。表面には花崗岩が貼られ、親柱と高欄上部に



は天皇家を象徴する菊、高欄には孫三郎の干支である辰が彫刻されている。高欄の両面には、辰が線彫りと浮き彫りにされている。設計は薬師寺<sup>やくしじ</sup>主計<sup>かずえ</sup>、菊と辰のデザインは児島虎次郎、施行は藤木工務店であった。建設費1万5,000円は大原孫三郎が支出した。以前の石橋は、倉敷美観地区の南端に移設され、「高砂橋」となって現存する<sup>27</sup>。

#### 奨農土地本社(喫茶エル・グレコ)



1955(昭和30)年に始まった高度経済成長が神武景気の始まりを告げ、1956年の「経済白書」は「もはや戦後ではない」と謳った。白黒テレビ、電気冷蔵庫、電気洗濯機が「三種の神器」と呼ばれた当時、人々が美術館に足を運ぶようになった。大原総一郎は美術鑑賞の間にコーヒーブレイクができるようにと1959年、奨農土地本社<sup>しょうのうどち</sup>を喫茶店に改修し「エル・グレコ」と命名した。日本初のミュージアムカフェである。

奨農土地本社事務所は1926(大正15)年、大原邸と倉敷川を挟んで向かい合うように建てられた。木造2階建、外壁はドイツ塗壁、上げ下げ窓を持



ち、道路側は腰の高さまで煉瓦積みとされている。外壁は蔦で覆われている。蔦を絡ましたのは設計者・薬師寺主計自身である。設計が佳境を迎えた頃、施主である大原孫三郎は大阪での仕事に追われ、図面を見る機会がなかった。ところが完成した建物を見て、本宅前に相応しくないと苦言を呈した。苦慮した薬師寺は蔦を這わすことで外観のディテールをわからなくした。それ以降の薬師寺建築には、蔦が使われるようになったという<sup>28</sup>。施行は藤木工務店、家具をデザインしたのは民藝運動に参加した黒田辰秋である。

#### 有隣荘



日本遺産構成文化財。妻・寿恵子が家族中心の家庭を持てるようにと1925(大正14)年、大原孫三郎が薬師寺主計に設計を依頼した旧東邸である。1926年の皇太子倉敷行幸と倉敷紡績見学が決まると、皇室を迎える迎賓館として使えるよう設計変更がなされた。屋根に飾られた奇獣や台所などに見られる中国意匠と和風建築部分は伊東忠太、欄間などのデザインには児島虎次郎が参加し、藤木工務店の施行で1928(昭和3)年完成した。「有隣荘」の命名者は第六高等学校教授・松尾哲太郎である。住居として使われたのは完成から3年ほどで、それ以後は迎賓館として機能した。大原家のアルバムには、總一郎がヘルベルト・フォン・カラヤン夫妻をもてなした時の写真が貼られている。

敷地の西側に配置された植物室のインテリアや洋室の家具デザインはアール・デコ様式である。アール・デコ建築としては、H. ラパンが設計し、1933年に完成した朝香宮邸(東京都庭園美術館)が有名であるが、薬師寺はラパンより5年早い1928年、有隣荘に採用している。大原美術館副館長を務めた原道彦によると、外壁に塗られたのは酒津の赤砂で、釉薬瓦は泉州谷川の産である。中国の孔子廟で見た瓦を焼く窯を探した児島が発見したという。木材は主に台湾の阿里山産の檜を中心に、和室の天井板は屋久杉の上物、床板は檜の玉目1枚板が使われている。洋室の暖炉に嵌め込まれている石のレリーフは、児島がエジプトから持ち帰ったものではないかと思われていたが上田恭嗣は、児島自身が彫ったポンチであると説く。建設費の26万円は、大原美術館本館の約5倍であった<sup>29</sup>。

#### 第一合同銀行倉敷支店



日本遺産構成文化財、倉敷市指定重要文化財。第一合同銀行は倉敷銀行、鴨方倉庫銀行、倉敷商業銀行、茶屋町銀行、日笠銀行、天満屋銀行を合併して1919(大正8)年9月に設立し、岡山市下之町に本店を置いた。資本金650万円。大原孫三郎が頭取に就任した。第一合同銀行の前身となる倉敷銀行は、山陽鉄道(山陽線)岡山・倉敷間が開業した1891(明治24)年7月に開行し1906年9月、孫三郎を頭取に迎えた。孫三郎は同日、倉敷紡績の社長にも就任している。

第一合同銀行は1930(昭和5)年12月、山陽銀行と合併し中国銀行になった。中国銀行に統合された銀行の中で最も歴史があり、中国銀行の淵源と言われているのが第八十六国立銀行である。1879年5月高梁市に興り1920年1月、庭瀬銀行、甕江銀行と共に第一合同銀行に吸収された。

第一合同銀行倉敷支店は倉敷銀行の跡地に、薬師寺主計やくしじかずえの設計、藤木工務店の施工により1922年11月8日開行した。倉敷初の西洋建築は9万2,000円で契約された。藤木工務店の創業者・藤木正一しょういちは、第一合同銀行倉敷支店と同じ1922年に開行した日本銀行岡山支店(おかやま旧日銀ホール、ルネスホール)の施工を請け負っていた。日本銀行岡山支店で確かな技術を認めた薬師寺が孫三郎に紹介した。藤木はそれ以降、大原家に関わるほとんどを請け負った。

躯体の主要部分は鉄筋コンクリートで、二階の一部と小屋組は木造である。外壁は煉瓦と石で組まれているが、表面にはモルタルを塗布し、石を布積みしたように見せている。基壇の花崗岩は、笠岡沖の北木島産から運ばれた。ルスティカーナ積みである。北面に6本、西面に4本配されたドリス式オーダーの間には、一階にステンドグラスをあしらった半円形ファンライトを持つ縦長窓、二階には矩形窓がデザインされ、北面に四つ、西面には一つのドーマーウィンドーが配されている。ステンドグラスの作者は、当時関西で唯一人生産技術を持っていた木内真太郎きうちしんたろうである。木内の作品は京都都ホテル、三井銀行京都支店、大阪中央公会堂などにも使われた<sup>30</sup>。ステンドグラスには、通貨を表す貝も表現されている。

#### 倉敷郵便局(株式会社三楽)

倉敷で電話による通話が始まったのは1906(明治39)年12月11日であった。電話交換は1907年に開始された。現在の三楽会館は1902年、倉敷郵便電信局として建てられた。倉敷郵便電信局は1903年、倉敷郵便局に改称された<sup>31</sup>。



木造2階建、棧瓦葺。外観は不完全ながら左右対称に近い造りとされ、1階と2階の間にも棧瓦葺屋根を備える。全体に下見板張りを基本とし、基壇には花崗岩が使われている。1階中央の出入口は後年改修されたが、上げ下げ式窓は竣工当時のままであると思われる。

#### 倉敷幼稚園園舎(倉敷市歴史民俗資料館)



旧倉敷町役場(倉敷市立美術館)の西、倉敷市砂越町(現在の中央2丁目)に1915(大正4)年、倉敷幼稚園園舎として建てられた。1976(昭和51)年8月、解体され、現在の倉敷市役所東駐車場に移設された<sup>32</sup>。もともとは、八角系の遊戯室から放射線状に園舎を配していた。

岡山県内には八角形の遊戯室から放射線状に園舎を配した幼稚園舎が建てられたが、1908(明治41)年に完成した、岡山市の旭きょくとう東小学校附属幼稚園園舎は重要文化財に指定されている。設計した江川三郎八えがわさぶろうはちは1902(明治35)年、岡山県技師に就任、官公庁や学校、病院、商店、宗教施設などを木



造擬洋風に置き換えていった。岡山県議会議事堂や岡山師範学校などを設計したのも江川であった。

倉敷幼稚園園舎のプロポーシ<sup>せんきやう</sup>ョンは江川式に近いが、旭東小学校附属幼稚園園舎や遷<sup>せんきやう</sup> 喬尋常小学校校舎に比べ、細部におよぶ意匠に違いが見られる。

倉敷町役場(倉敷館)



日本遺産構成文化財、倉敷市指定重要文化財。1917(大正 6)年に竣工した倉敷町役場は、重要伝統的建造物群保存地区に初めて現れた擬洋風建築である。その町の象徴的建物に付ける塔屋を多角形、外壁を下見板張り、外壁東側をハーフティンバー、窓の上下に楕型の装飾を施し、小屋組をトラス、基壇を煉瓦造とするなど、江川三郎八を思わせる意匠が見られる。

倉敷町役場は 1928(昭和 3)年、倉敷の市政施行と共に役場としての役割を終え、それ以降、倉敷市公益質屋、倉敷市農業共済組合事務所、倉庫などとして使われた。その後、荒廃が進んでいた 1968 年、市民の中から保存の声があがり、記録等を頼りに元の形態や色彩への復元がなされた<sup>33</sup>。そして 1985 年から 1987 年にかけて解体修理され、倉敷館として活用されている。

倉敷紡績倉敷工場(倉敷アイビースクエア)

日本遺産構成文化財。岡山県に紡績工場ができたのは 1881(明治 14)年である。まず、士族授産事業の岡山紡績所が岡山市内で創業し、政府がイギ



リスから 2,000 鍾<sup>すい</sup>ミュー<sup>せい</sup>ル<sup>ぼうき</sup>精紡機<sup>き</sup>を買い入れ、民間に払い下げた「十基紡<sup>じゅうきぼう</sup>」が玉島と児島で創業した。玉島紡績所と下村紡績所である。

倉敷紡績は犬飼松窓<sup>いぬかいしょうそう</sup>の私塾・三余塾<sup>さんよじゅく</sup>で学んだ大原孝四郎、小松原慶太、林醇平と大橋沢三郎が出資し 1889 年、倉敷代官所跡で操業を始めた<sup>34</sup>。初代社長に就任したのは大原孝四郎で、鹿児島紡績所から招聘された石河寛太郎<sup>いしかわくたろう</sup>らが木骨煉瓦造鋸屋根工場を設計した。イギリスのプラット社製 344 鍾リング精紡機 13 機やヒックハーグリーブス社製蒸気機関は、三井物産を介して輸入され<sup>35</sup>、工場施設と外壁等に使われた煉瓦は、山口県周防大島郡から運ばれた<sup>36</sup>。紡績技術者には三井物産が推薦した加藤知信と原賀道太郎が就任し、中堅となるべき男女職工は長期間、下村紡績所に派遣され技術養成につとめた。

倉敷アイビースクエア取締役・守本拓郎によると、外壁に蔦を這わした目的は、夏場の気温を下げることにあった。倉敷紡績は鹿児島紡績の建築技術を導入する傍ら、イギリス紡績業の中心地・ランカシャーの工場図面を参考に鋸屋根の角度を決めたという。ところが、倉敷とランカシャーでは緯度の差 19 度が屋根の勾配に活かされなかったため、夏至を中心に工場内に直射日光が差し込んだ。そのため、高温になった工場内の温度を下げるため蔦が植えられたのだという。

工場棟西側には、塵突<sup>じんとつ</sup>と鉄鈴、その作動装置が残されている。塵突は工場内に充満する糸屑を吸い出す設備で、鋸屋根と並ぶ紡績工場の特徴であ



る。煙を吸い出す煙突の糸屑版であると言える。鉄鈴は、蒸気機関を使って始業や終業などを知らせる、合図装置である。鉄鈴の音は明治時代の倉敷の風物だったという。

旧事務所は木造2階建、外観を下見板張りとし、縦羽目を基調とし、上げ下げ窓を持つ。南面は長崎のグラバー邸から全国に広まったヴェランダ・コロニアル様式で、1階ヴェランダ部分の軒下を飾る菱組天井、床面から立ち上がるフランス窓、フランス窓の上部に取り付けられた矩形のファンライトが特徴である。

倉敷紡績はその後、玉島紡績所を買収し、岡山市や四国へ進出するなど業務を拡大したが、満州事変が勃発した1931(昭和6)年、倉敷工場がまず軍需工場として取り上げられた。1944年からは三菱重工業水島製作所の協力工場として海軍一式陸上攻撃機の翼部分を製造したが、終戦後は休業状態であった。

倉敷市は1969年、伝統美観条例を定め、歴史的建造物の保存に着手した。また同年、倉敷紡績創立80周年を記念した倉紡記念館が倉敷工場の敷地内に完成した。大阪で日本万国博覧会が開かれた1970年、日本国有鉄道の「ディスカバー・ジャパン」キャンペーンが始まり、1972年には山陽新幹線新大阪・岡山間が開業し、2,000人を収容する倉敷市民会館も開館した。同年11月には、倉敷工場を宿泊施設、飲食施設、見学施設、多目的ホール、工房、記念ホールなどを備えた施設に改装する計画が発表された。1973年には、東京大学生産技術研究所の工学博士・村松定次郎が産業考古学的調査を行い、浦辺建築事務所と藤木工務店が改修に着手した。倉敷アイビースクエアがオープンしたのは1974年4月であった。

外壁を漆喰壁<sup>しっくい</sup>と焼板張りとし1888年に竣工した原綿倉庫(倉紡記念館)と、1906年、その西に隣接するように建設された木骨煉瓦造の製品倉庫は登録有形文化財である。2棟に葺かれている鬼瓦と、製品倉庫入口の人造石で造られた欠円アーチ

には、「常に一番を目指す」倉敷紡績の「二三のマーク」があらわれている。

#### 倉紡中央病院(倉敷中央病院)



倉敷紡績万寿第二工場が創業した1918(大正7)年当時の倉敷市の人口およそ1万5,000人のうち、倉敷紡績の従業員と家族が約1万人を占めていた。そこで大原孫三郎は、倉敷紡績関係者だけでなく、一般市民の利用できる病院を建設することを決意した。

設計にあたり京都大学総長・荒木寅三郎らは、孫三郎に二つのアドバイスをした。

- 1) 岡山医大病院に劣らない立派な病院をつくる
- 2) 日本には慈恵病院や研究病院はあるが、理想的な治療本位の病院がないので、日本を代表する病院をつくる。

荒木の言葉を受け孫三郎は、滋賀県近江八幡市でヴォーリズが経営する結核療養所(近江療養院、現在のヴォーリズ記念病院)を手本に、設計に着手した。当初、小規模な診療所を想定していた孫三郎の構想は、医学界の最高権威・荒木に相談したことで、計画の約10倍、総工費150万円の大総合病院構想へと発展した。

孫三郎はまず、次の4方針を掲げた。

- 1) 設計は全て治療本位とする
- 2) 病院臭くない明朗な病院にする
- 3) 患者は公平・平等に扱う
- 4) 東洋一理想的な病院にする

次に、アメリカのロックフェラー病院やドイツのハンブルク郊外にある熱帯病院を参考に 1921 年、基本設計を完成させた。建物は平屋建とし、唯一の 2 階部分にはエレベーターを取り付けた。大阪の鳥潟病院に倣い 2 箇所設置した植物園には、熱帯性の植物や花を植え、四季を通じて患者が快適に過ごせる所とした。孫三郎が掲げた人道主義・教育主義・進歩主義・向上主義を総括した「人格主義」を象徴する施設である<sup>37</sup>。現存する開院当時の建物の特徴は、赤い屋根とドイツ塗り壁であるが、赤い屋根は今に受け継がれている。

#### 倉敷教会堂



幕府により 1612(慶長 17)年、直轄地での布教・信仰が禁止されていたキリスト教であったが 1873(明治 6)年、「邪宗門」禁制が解かれた。岡山市内では 1875 年 4 月、プロテスタント派による伝導が始まり、新島襄らが訪れた。倉敷でも 1878 年、プロテスタント派による伝道活動が本格化し、1882 年には講義所が設けられた<sup>38</sup>。

岡山県内に現存する最古の教会は 1889 年に竣工した高梁教会堂で、次が 1890 年の天城教会堂である。共にプロテスタント教会で、設計は新居浜出身の吉田伊平<sup>よしだいへい</sup>である。倉敷教会堂が完成したのは 1923 年であった

大原孫三郎は 1899 年 7 月、新川小学校で開かれた慈善音楽会で知遇を得た石井十次の風格や説得力に感銘を受け<sup>39</sup>、1905 年 7 月 31 日には倉敷教会で洗礼を受けた<sup>40</sup>。石井は 1865(慶応元)年、宮

崎県に生れ、岡山県甲種医学校を卒業後、岡山教会牧師・金森通倫のもとで洗礼を受け、岡山市の三友寺境内に岡山孤児院を開設した。孤児は 1906 年の最盛期には 1,200 人を数えた<sup>41</sup>。孤児院を経営する資金を集めるため石井は、孤児による幻灯会や音楽会を全国に巡回させた。その一環の新川<sup>しんかわ</sup>小学校の慈善音楽会には 2 晩で 2,000 人近くが詰めかけたのであるが、孫三郎はそれ以降、石井に惜しみない援助を続けた。

倉敷教会堂を設計したのは西村伊作<sup>にしむらいさく</sup>である。西村は 1884 年、和歌山県新宮市に生まれた。両親はクリスチャンであった。倉敷教会堂の設計は当初、ヴォーリズ設計事務所に発注されたが、違約金を支払ってまで西村に託された。西村はヴァナキュラー(その土地独自の)という、民藝運動に近い思想・哲学を建築設計に反映させたのであるが、その点では浦辺鎮太郎に通じるものがあつたのである。

西村は建築に対し「建築は実用と美の両方を兼ね備えるべきもの、人間の社会的容器(建築)を美化する仕事」と、構造と表現の一致が重要であると考えていた<sup>42</sup>。その表れが、礼拝堂の天井トラスに美的表現を用いたことある。装飾優先でなく、用の美を追求した西村流である。南側外壁と 2 階の礼拝堂入口に至るスロープを北木島産花崗岩としたのは西村のヴァナキュラー哲学の表出である。窓と礼拝堂内部は尖塔アーチを基調とし、大原孫三郎が購入したミュステルのハーモニウムと石井十次の胸像が置かれている。倉敷市内に現存する西村建築には 1925(大正 14)年の若竹の園と、大正時代末期、祐安地区<sup>すけやす</sup>に建てた林邸、江口邸、吉岡邸がある。

#### おわりに

倉敷が一大観光地となったのは昭和 40 年代後半、山陽新幹線新大阪・岡山間の開業頃からである。1970 年の日本万国博覧会終了後、日本国有鉄道が始めた個人旅行拡大キャンペーン「ディスカ

バー・ジャパン」と、1970年と1971年に創刊された女性誌『an・an』、『non-no』が多数の女性客を倉敷に誘ってからであった。大原孫三郎が築いた繊維の産業システムと総一郎が守ろうとした古きよき倉敷が、衆目の目にとまり、観光地・倉敷の誕生につながったのである。城山三郎の著書『わしの眼は十年先が見える』と井上太郎の『大原総一郎へこたれない理想主義者』の主人公である孫三郎・総一郎父子の眼に観光客が押し寄せる倉敷が見えていたのかどうかはわからない。しかし、綿花に始まった倉敷の近代化が、うつくしい町・倉敷を残したことに違いはない。江戸時代の情緒と近代化遺産の町倉敷がその姿を今に伝える大きな要因が、空襲被害に遭わなかったことであることもまた事実である。

戦後、同志社大学の教壇に立ったアメリカ人の学者オーティス・ケーリーが、アメリカ国務省と国防省の書類を調べた結果、空爆中止を指示したのは陸軍長官ヘンリー・スチムソンで、その目的は、日本文化を破壊しないことにあったという。事実、奈良、京都、金沢、倉敷は空爆を免れた。大原総一郎は、リットン調査団の調査員が倉敷を訪れた1932(昭和7)年、「中央集権の独裁国だと思っていた日本の片田舎に、これほどすばらしい文化財が公開されている」と喜んで帰ったと回顧録

に記している<sup>43</sup>。城山も『わしの眼は十年先が見える』で述べているが、倉敷空爆回避の動機に大原美術館の存在があったか否かにはさらなる検証が必要である。

孫三郎は日記に「余がこの資産を与へられたのは、余の為にあらず、世界の為である。余に与へられしにはあらず、世界に与へられたのである。余は其世界に与へられた金を以て、神の御心に依り働くものである」と認めたと言われている。世の中から得た富を世に中に役立たせた孫三郎である。人を信じ、人の夢を大切にしたい孫三郎の「人格主義」は美観地区を中心とした倉敷の町に紡績の産業システムを生み出し、その意を継いだ総一郎は繊維業の一層の発展と並行して、倉敷が重化学工業都市として飛躍する基礎を固め、「倉敷ローテンプルク構想」を描いた。そうした孫三郎・総一郎の倉敷が現在の観光都市・倉敷の基礎であったと言っても誇張ではないと考える。日本遺産の構成資産にはオオハライズムの息づく施設が多数含まれている。小稿が紹介したのはその片鱗に過ぎない。オオハライズムと日本遺産のさらなる探求が必要である。

※写真は全て筆者撮影

#### 注・引用

- 1 「児島虎次郎の逝去と美術館の構想」(大原孫三郎傳刊行会編『大原孫三郎傳』、大原孫三郎傳刊行会、1983年)、239頁。
- 2 「決意」、前掲『夢かける 大原美術館の軌跡』、132～134頁。
- 3 「地鎮祭」、前掲『夢かける 大原美術館の軌跡』、138～141頁。
- 4 「大原美術館の竣工と叙勲」、前掲『大原孫三郎傳』、263～264頁。
- 5 「武内館長」、前掲『夢かける 大原美術館の軌跡』、148頁。
- 6 「はじめに」(城山三郎『わしに眼には十年先が見える-大原孫三郎の生涯-』、飛鳥新社、

1994年)、10頁。

- 7 上田恭嗣「大原美術館本館」(岡山県教育庁文化財課編『岡山県の近代化遺産-岡山県近代化遺産総合調査報告書-』、岡山県文化財保護協会、2005年)、247～248頁。
- 8 黒川創「ハンドメイドで生きた人 西村伊作のこと」(黒川創、藤森照信、大竹誠、坂倉竹之助、田中修司『愉快な家 西村伊作の建築』、INAX出版、2011年)、28頁。
- 9 「論考-浦辺鎮太郎 都市倉敷を大原総一郎と織り上げる」(長谷川堯『建築の出自 長谷川堯 建築家論考集』、鹿島出版、2008年)、200～205頁。

- <sup>10</sup> 「浦辺鎮太郎」(川添登『建築家・人と作品』下、井上新書、1968年)、152頁。「クラシキモジュール」(馬場璋造、臼田哲男編『浦辺鎮太郎作品集』、新建築社、2003年)、156頁。「〈倉敷文化〉を守る城壁」(栗田勇編『現代日本建築家全集 12 浦辺鎮太郎 大江宏』、三一書房、1973年)、29頁。
- <sup>11</sup> 有限会社UR設計相談役・辻野純徳氏提供の資料「倉敷建築研究会」による。
- <sup>12</sup> 「クラシキモジュール」、前掲『浦辺鎮太郎作品集』、156頁。
- <sup>13</sup> 浦辺鎮太郎「街並み保存の実践」(『環境文化』No. 39、環境文化研究所、1979年)、25～26頁。
- <sup>14</sup> 民芸の人々と工芸館建設(藤田慎一郎『大原美術館と私-50年のパサージュ-』、山陽新聞社、2000年)、29頁。
- <sup>15</sup> 民芸の人々と工芸館建設、同26～27頁。
- <sup>16</sup> 「東洋館」、同66～69頁。
- <sup>17</sup> 民芸の人々と工芸館建設、同34～35頁。
- <sup>18</sup> 前田興「旧倉敷市庁舎(現倉敷市立美術館)の建築とその周辺-1960年前後の丹下健三の動向-」(倉敷市立美術館編『戦後の美術-1960年のアヴァンギャルド』、倉敷市立美術館、1996年)、72頁。
- <sup>19</sup> 同72頁。
- <sup>20</sup> 同84～87頁。
- <sup>21</sup> 「ホテル建設前夜」(『倉敷国際ホテル50年の歩み』、倉敷国際ホテル、2013年)、44～45頁。
- <sup>22</sup> 「新緑大原家の社会・文化事業」、同43頁。
- <sup>23</sup> 「年表」、同103頁。
- <sup>24</sup> 高階秀爾「名画に迎えられるホテル」、同8頁。
- <sup>25</sup> 「おとぎの城」と謳われた保育園 若竹の園、前掲『愉快な家 西村伊作の建築』、50～51頁。
- <sup>26</sup> 「同52～53頁。
- <sup>27</sup> 「今橋」、前掲『岡山県の近代化遺産-岡山県近代化遺産総合調査報告書-』、143頁。
- <sup>28</sup> 上田恭嗣「旧奨農土地株式会社本社事務所(現、喫茶エル・グレコ)」、前掲『岡山県の近代化遺産-岡山県近代化遺産総合調査報告書-』、208頁。
- <sup>29</sup> 上田恭嗣「有隣荘」、前掲『岡山県の近代化遺産-岡山県近代化遺産総合調査報告書-』、283～284頁。
- <sup>30</sup> 上田恭嗣、前掲『岡山県の近代化遺産-岡山県近代化遺産総合調査報告書-』、198頁。
- <sup>31</sup> 「三楽会館・中国銀行」(倉地克直、山本太郎、吉原睦『絵図で歩く倉敷のまち』、吉備人出版、2011年)、62頁。
- <sup>32</sup> 堂下泰廣「旧倉敷幼稚線園舎(現、倉敷市立歴史民俗資料館)」、前掲『岡山県の近代化遺産-岡山県近代化遺産総合調査報告書-』、222頁。
- <sup>33</sup> 堂下泰廣「旧倉敷町役場(現、倉敷館)」、前掲『岡山県の近代化遺産-岡山県近代化遺産総合調査報告書-』、210頁。
- <sup>34</sup> 「紡績所設立の企畫」(倉敷紡績株式会社社史編纂委員編『回顧六十五年』、倉敷紡績、1953年)、15頁。
- <sup>35</sup> 「機械類の發註」、同37～40頁。
- <sup>36</sup> 「工場建築工事」、同43頁。
- <sup>37</sup> 「倉紡中央病院の設立」、前掲『大原孫三郎傳』、156～162頁。
- <sup>38</sup> 「プロテスタントの教え倉敷へ」(倉敷教会百年史編纂委員会編『倉敷教会百年史』、日本キリスト教団倉敷教会、2011年)、4～6頁。
- <sup>39</sup> 「石井十次との出会い」、前掲『大原孫三郎傳』、34～35頁。
- <sup>40</sup> 「大原孫三郎年譜」、前掲『大原孫三郎傳』、400頁。
- <sup>41</sup> 「石井十次との出会い」前掲『大原孫三郎傳』、34頁。
- <sup>42</sup> 新谷雅之「日本基督教団倉敷教会教会堂」前掲『岡山県の近代化遺産-岡山県近代化遺産総合調査報告書-』、252頁。
- <sup>43</sup> 「リットン調査団」(山陽新聞社編『夢かける 大原美術館の軌跡』、山陽新聞社、1991年)、152頁

#### 主な参考資料

井上太郎『へこたれない理想主義者＝大原総一郎』、講談社、1993年  
 上田恭嗣『大原美術館の誕生-画家児島虎次郎の想いと建築家薬師寺主計の思い-』、山陽新聞社、2012年  
 『浦辺鎮太郎作品集』、新建築社、2003年  
 大原孫三郎傳刊行会編『大原孫三郎傳』、大原孫三郎傳刊行会、1983年  
 岡山県教育庁文化財課編『岡山県の近代化遺産-岡山県近代化遺産総合調査報告書』、岡山県教育委

員会、2005 年  
 岡山県郷土文化財団編『岡山の自然と文化』33、  
 岡山県郷土文化財団、2014 年  
 岡山県歴史人物事典編纂委員会編『岡山県歴史人  
 物事典』、山陽新聞社、1994 年  
 倉敷教会百年史編纂委員会編『倉敷教会百年史』、  
 日本キリスト教団倉敷教会、2011 年  
 『倉敷国際ホテル 50 年の歩み』、倉敷国際ホテ  
 ル、2013 年  
 倉敷市史研究会編『新修倉敷市史』第 5 巻 近代  
 (上)、倉敷市、2002 年  
 倉敷市史研究会編『新修倉敷市史』第 6 巻 近代  
 (下)、倉敷市、2004 年  
 倉敷市立美術館編『戦後の美術-1960 年のアヴ  
 ァンギャルド』、倉敷市立美術館、1996 年  
 倉敷紡績株式會社社史編纂委員編『回顧六十五  
 年』、倉敷紡績、1953 年  
 倉敷紡績株式会社編『倉敷紡績百年史』、倉敷紡  
 績、1988 年  
 倉地克直、山本太郎、吉原睦『絵図で歩く倉敷の  
 まち』、吉備人出版、2011 年  
 黒川創、藤森照信、大竹誠、坂倉竹之助、田中修  
 司『愉快的家 西村伊作の建築』、INAX 出版、  
 2011 年  
 栗田勇『現代日本建築家全集』12、三一書房、1973  
 年

佐藤竜馬、今瀧哲之、名塚雅絵編『丹下健三 伝統  
 と創造-瀬戸内海から世界へ』、美術出版社、2013  
 年  
 山陽新聞社編『夢かける 大原美術館の軌跡』、山  
 陽新聞社、1991 年  
 城山三郎『わしに眼には十年先が見える-大原  
 孫三郎の生涯-』、飛鳥新社、1994 年  
 創立 50 周年記念誌編纂委員会編『中國銀行五十年  
 史』、中國銀行、1983 年  
 豊川斉赫編『丹下健三と KENZO TANGE』、オーム  
 社、2013 年  
 長谷川堯『建築の出自 長谷川堯建築家論考集』、  
 鹿島出版会、2008 年  
 馬場璋造、臼田哲男編『浦辺鎮太郎作品集』、新  
 建築社、2003 年  
 藤田慎一郎『大原美術館と私-50 年のパサージュ  
 -』、山陽新聞社、2000 年  
 藤田慎一郎、守田均編『大原美術館収蔵品目録』、  
 大原美術館、1991 年  
 藤森照信『日本の近代建築』上、岩波書店、  
 2010 年 6 刷  
 『ヴォーリズ建築の 100 年』、創元社、2008 年  
 『愉快的家-西村伊作の建築-』、INAX 出版、2011  
 年



「一輪の綿花から始まる倉敷物語」調査研究事業報告書

2019 年 3 月 25 日

監修 産業考古学会、岡山近代化遺産研究会

編集 浅沼淑子(岡山近代化遺産研究会)

著者 玉川寛治、清水憲一、天野武弘、唐澤克樹、井上実子  
渡部菜々子、雑賀優衣、木之下樹、小西伸彦

発行 「一輪の綿花から始まる倉敷物語」近代化遺産研究会